

教育研究年報

(2023 年度)

I. 教育活動の記録	1
1) 看護学科.....	2
2) 検査技術学科.....	5
3) 放射線学科.....	7
4) 臨床工学科.....	9
5) 理学療法学科.....	11
6) 作業療法学科.....	13
7) 言語聴覚学科.....	15
9) 保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程.....	17
9) 保健科学研究科保健科学専攻博士後期課程.....	19
II. 研究活動の記録	20
1) 看護学科.....	21
2) 理学療法学科.....	52
3) 作業療法科.....	76
4) 言語聴覚学科.....	91
5) 検査技術学科.....	102
6) 放射線学科.....	124
7) 臨床工学科.....	135
8) 教養部.....	152

教育研究年報の背景

本学においては 2005 年度より、医療系高等教育機関としての質の向上を図る活動の一環として、本学の教育活動と研究活動の実績を社会に公表し、社会的責任を果たすことを目的に「群馬パース大学年報」を年 1 回発行してきた。

この年報については、発行以来何度か見直しを行い、(1) 各領域の教育活動の総括、(2) 教育活動の諸記録、(3) 研究活動の諸記録、(4) FD 活動の記録、(5) 学生サービスの記録、の内容を掲載してきた。

2018 年度からは上記 (1) (4) (5) の内容を自己点検評価書に組み入れ、(2) (3) の内容を「群馬パース大学教育研究年報」として、「教育活動の記録」及び「研究活動の記録」の 2 部で構成し、自己点検評価書とともに毎年度作成・公表している。

I. 教育活動の記録

教育活動の記録は、各専任教員が担当した科目において実施内容とシラバスとの対応性、授業の方法、使用した教材、成績評価における学習目標の到達度の測定などを教育実績として収集したデータである。

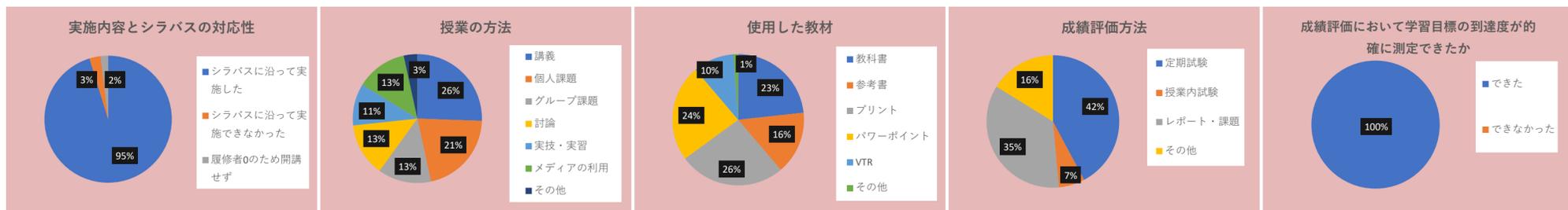
個人、また各学科で毎年教育実績を振り返ることで改善の促進をはかり、PDCA サイクルを機能させることで、大学に求められる役割の一つである「学生の教育の充実」に対する継続的な教育活動の質の向上に繋げ、教育面での自己点検の一環として、一つの指標となっている。

本年度、各専任教員が担当した学部、大学院の各科目の実施内容とシラバスの対応性は、全体で 96.5%の科目でシラバス通りに講義が進められており、成績評価における学習目標の到達度の測定においては全体で 99.3%の科目において的確に測定できているという結果となった。

看護学部 看護学科 教育活動の記録 (専任教員)

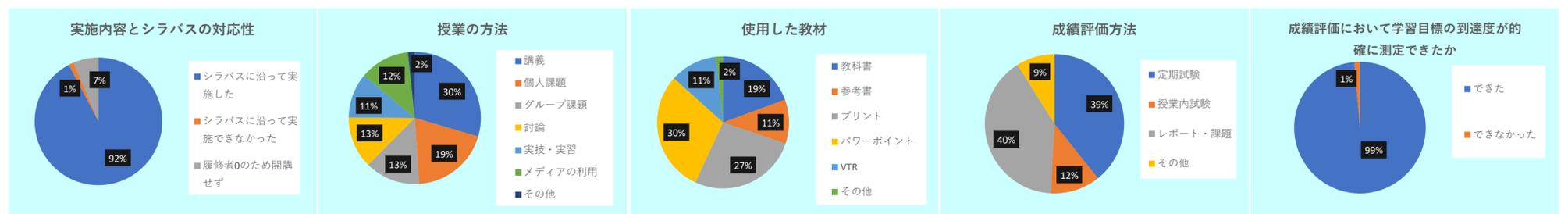
授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか										
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考							
心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○					○			○										○				できた		
教育心理学	1	後期	選択	1	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施できなかった		○	○					○			○														できた		
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○		○							○										○	○			できた		
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施できなかった	学生の実態に応じて球技種目を変更した			○	○						○											○	○			できた	
生命倫理	2	後期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○									○					できた		
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○											○		○	多読(達成語数)		できた		
医療英語リーディング	1	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○											○	○				できた		
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○											○					できた		
医療英語会話	2	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○											○					できた		
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○											○					できた		
大学の学び入門	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○												○			できた		
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○									○					できた		
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○									○					できた		
臨床解剖学	4	後期	選択	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○								○										○					できた		
生理学Ⅰ	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○		○		○							○		○			できた		
生理学Ⅱ	1	後期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○		○		○							○		○			できた		
臨床生理学	4	後期	選択	1	洞口 貴弘	履修者0のため開講せず																											
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○								○	○				できた		
病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○								○									○					できた		
臨床病理学	4	後期	選択	1	湯本 真人	履修者0のため開講せず																											
薬理学	1	後期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○																		○					できた		
臨床薬理学	4	後期	選択	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○																		○					できた		
臨床病態学Ⅰ	2	前期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○																		○					できた		
臨床病態学Ⅱ	2	前期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○																		○					できた		
臨床病態学Ⅲ	2	後期	必修	1	田村 遵一	シラバスに沿って実施した		○																		○					できた		
免疫・感染症学	2	前期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○							○		○									○					できた		
臨床検査学	2	前期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○							○		○									○					できた		
発達心理学	2	前期	必修	1	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○											○				できた	
臨床心理学	2	後期	必修	1	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○											○				できた	
社会福祉・社会保障制度論	2	後期	必修	1	矢島 正栄	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○									○					できた		
地域保健行政	3	前期	選択	2	小林亜由美	シラバスに沿って実施した		○							○	○		○								○	○				できた		
リハビリテーション概論	2	後期	選択	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○							○		○		○							○							
カウンセリング	2	後期	選択	4	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施できなかった		○	○	○					○		○											○			できた		
看護学概論Ⅰ	1	前期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○		○									○		○	ミニッツペーパー		できた		
看護学概論Ⅱ	1	後期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○		○									○		○	ミニッツペーパー		できた		
基礎看護技術演習	1	前期	必修	1	長嶺めぐみ	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○		○			できた		
コミュニケーション論	1	後期	必修	1	萩原 一美	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○		○		○							○		○	ミニッツペーパー 演習ワークシート		できた		
日常生活援助学演習Ⅰ(活動・食事・排泄)	1	後期	必修	1	千葉今日子	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○	○		○								○		○			できた		
日常生活援助学演習Ⅱ(清潔・安楽)	1	後期	必修	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○		○			できた		
ヘルスアセスメント	2	前期	必修	1	森田 綾子	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○								○	○		ミニッツペーパー		できた		
ヘルスアセスメント演習	2	前期	必修	1	森田 綾子	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○								○		○	実技試験		できた		
看護過程論入門	2	前期	必修	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○								○		○			できた		
看護過程展開論演習	2	前期	必修	1	千葉今日子	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○		○			できた		
治療援助学演習	2	後期	必修	1	長嶺めぐみ	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○	○	○			できた		
基礎看護学特論	4	後期	選択	1	堀込 由紀	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○		○		○									○	グループワーク発表		できた		
地域・在宅看護学概論	1	後期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○		○			できた		
地域・在宅看護方法論	2	前期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○		○			できた		
地域・在宅看護展開論	2	後期	必修	1	齋藤 基	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○		○			できた		
成人看護学総論	1	後期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○										○				できた	
成人看護方法論	2	前期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○		○							○					できた		
成人看護方法論Ⅱ	3	前期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○								○					できた		
慢性期看護論	2	後期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○								○					できた		
周手術期看護論	3	前期	必修	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○								○			授業時間外に中間試験を実施		できた		
クリティカルケア看護論	3	前期	必修	1	堀越 政孝	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○		○								○					できた		
成人看護学演習	3	前期	必修	1	金子 吉美	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○	○		○								○		○	技術試験		できた		

看護学部 看護学科 教育活動の記録（専任教員）



リハビリテーション学部 作業療法学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法							使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか						
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考				
作業療法総合評価演習	3	前期	必修	1	岡田 直純	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○							○	○					○	○			できなかった	成績評定の基準につきあいまいな点があった。ルーブリック導入により基準を明確にしたい。	
身体領域の作業療法学	2	後期	必修	2	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○		○	○				○				できた		
身体領域の作業療法学実習	3	前期	必修	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○		○	○				○				できた		
認知機能作業療法学	3	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○		○	○				○				できた		
精神領域の作業療法学	2	後期	必修	2	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○					○				○		○	○				○				できた		
精神領域の作業療法学実習	3	前期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○		○	○				○				できた		
発達領域の作業療法学	2	後期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○		○	○				○				できた		
発達領域の作業療法学演習	3	前期	必修	1	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○	○				○		○	○						○			できた	
老年期の作業療法学	3	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○		○	○					○				できた	
内部障害作業療法学	3	前期	必修	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○		○	○				○				できた		
作業療法理論	3	後期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○									○		○							○			できた	
作業療法リズニング	3	後期	必修	1	村田 和香	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○		○						○				できた	
義肢装具学	3	前期	必修	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○		○	○				○				できた		
就労支援技術論	3	後期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○	○				○	○				○	○	○					○				できた	
リハビリテーション栄養学	3	前期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○		○	○				○					できた	
地域作業療法学	3	前期	必修	1	竹原 敦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○		○	○					○				できた	
生活環境学	3	前期	必修	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○									○		○					○					できた	
福祉機器論	3	後期	選択	1	南 征吾	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○	○					○		○	○				○					できた	
支援工学	3	前期	選択	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○	○										○							○			できた	
地域リハビリテーション学	3	後期	必修	1	馬場 順子	シラバスに沿って実施した		○		○	○	○					○		○	○						○			できた	
作業療法基礎実習 I	3	後期	必修	3	岡田 直純	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○							○							学内実習課題・学外実習提出書類		できた		
作業療法基礎実習 II	3	後期	必修	3	吉岡 和哉	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○	○				○		○	○						○	報告会		できた	

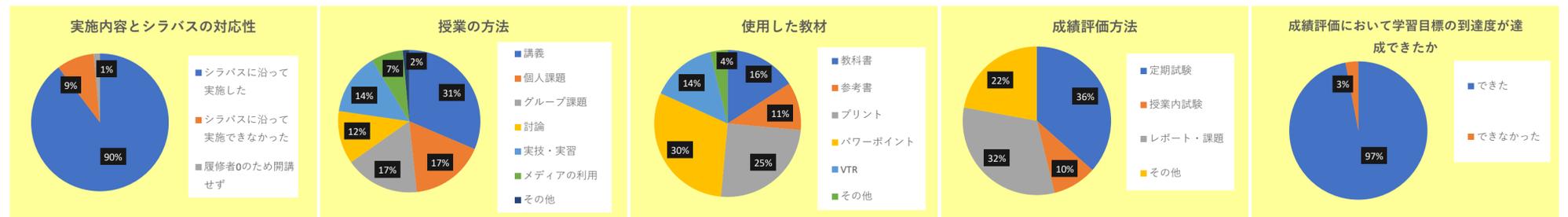


リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか								
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考					
心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○							○			できた			
教育心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施できなかった		○	○						○		○										○		できた		
健康スポーツ理論	1	前期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した		○									○	○						○	○			できた			
健康スポーツ実技	1	後期	必修	1	衣川 隆	シラバスに沿って実施した																				○		できた			
生命倫理	3	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○		○							○				できた			
人工知能・ロボットと社会	1	後期	必修	2	佐藤 満	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○							○		○	プレゼンテーション	できた		
人間関係・コミュニケーション論	2	後期	必修	1	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○									○		できた		
基礎物理学	1	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○																○	○		自作ノート	できた		
物理学	1	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○																	○	○		自作ノート	できた	
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○		○	○							○				できた		
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																									
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○									○		できた		
大学の学び入門	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○	○	○	○								○		できた		
大学の学び-専門への誘い	1	後期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○						○	○	○									○		できた		
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○		○	○						○	○							○				できた		
医学概論	1	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○							○		○								○				できた		
解剖学総論	1	前期	必修	1	後藤 遼佑	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○							○				できた		
局所解剖学（言語・聴覚・発声・嚥下）	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○							○				できた		
基礎生理学	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○	○						○				できた		
基礎病理学	1	後期	必修	1	田村 遼一	シラバスに沿って実施した		○									○								○				できた		
医療危機管理（窒息・誤嚥・吸引含む）	1	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○		○							○								○				できた		
精神医学	1	前期	必修	1	石井 良和	シラバスに沿って実施した		○							○		○	○							○				できた		
リハビリテーション医学	2	後期	必修	2	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○			問題・質問への解答	できた		
リハビリテーション関連領域実技実習	1	前期	必修	1	浅田 春美	シラバスに沿って実施した		○									○	○							○			杖・車いす	実技試験	できた	
神経内科学	2	前期	必修	1	宗宮 真	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○						○			問題・質問への解答	できた		
脳神経外科学	2	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○									○								○				できた		
言語医学	2	前期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○	○	○						○	○	○	○						○	○	○		できた	3コマは外部非常勤	
臨床心理学	2	後期	必修	1	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○	○								○				できた	
生涯発達心理学	1	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○						○			授業のまとめの提出	できた		
学習・認知心理学	2	後期	必修	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○	○									○			できた	
心理測定法	3	前期	必修	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○										○			できた	
言語学	1	後期	必修	2	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○		○	○							○				できた		
音声学	2	前期	必修	2	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○						○				できた		
言語発達学	2	前期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○				○	○	○	○	○						○			授業のまとめの提出	できた		
ICFとリハビリテーション	1	前期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施できなかった		○		○					○		○	○									○	聴講票の提出	できた		
AACと教材学	3	前期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○							○				できた		
チーム医療とリハビリテーション	1	後期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○	○	○							○		聴講票	できた		
地域社会学	3	前期	選択	1	丹下 弥生	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○						○									○		聴講票	できた		
言語聴覚障害学概論	1	前期	必修	1	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○		○	○	○							○				できた	
言語聴覚障害学演習	1	前期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施できなかった		○		○	○						○	○	○								○	聴講票	できなかった		
言語聴覚障害学診断学	1	後期	必修	1	神山 政恵	シラバスに沿って実施できなかった		○		○	○						○	○	○								○	聴講票	できなかった		
地域リハビリテーション学	1	前期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施できなかった		○		○	○				○		○	○									○	聴講票の提出	できた		
失語症学	2	前期	必修	2	三浦 康子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○							○				できた		
高次脳機能障害学	2	後期	必修	2	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○						○	○	○	聴講票	できた		
失語・高次脳機能障害学評価法	3	前期	必修	2	神山 政恵	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○						○	○	○	聴講票	できた		
失語・高次脳機能障害学支援論	3	後期	必修	2	丹下 弥生	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○								○				できた	
言語発達障害学	2	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○				○		○	○	○							○			授業のまとめの提出	できた	
言語発達障害学評価法	3	前期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○							○				できた	
言語発達障害学支援論	3	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○				○	○	○	○	○								○			できた	
病理音声学	2	前期	必修	2	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○						○		○			できた	
発声発語・嚥下障害学評価法	2	後期	必修	2	三浦 康子	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○						○		○			できた	
器質性・機能的発話障害学支援論	3	前期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○	○		○				○	○	○	○	○						○					できた	
運動性発話障害学支援論	3	後期	必修	2	酒井 哲郎	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○	○	○	○	○						○		○			できた	
聴覚障害学	2	前期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○		○	○						○	○	○								○			できた	
聴覚検査法	2	後期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○			○						○	○	○						○	○				できた	

リハビリテーション学部 言語聴覚学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか																	
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考														
聴覚補償	3	前期	必修	1	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○					○				○		○	○			○				○				○		できた							
先天性聴覚障害支援論	3	後期	必修	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○					○	○					○	○				○				○				○		できた						
後天性聴覚障害支援論	3	前期	必修	1	岡野 由実	シラバスに沿って実施した		○											○	○				○				○				○		できた						
地域参加支援演習 I	2	後期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○	○									○													ゼミ活動への貢献度	できた						
地域参加支援演習 II	3	前期	必修	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した				○	○					事業の実施					○												ゼミ活動への貢献度	できた						
聴覚障害演習	3	前期	選択	2	岡野 由実	シラバスに沿って実施できなかった	見学先の施設の都合により日程の微調整を行い、学生には適宜連絡した	○						○	○						○	○												○	○	できた				
運動系障害演習	3	後期	選択	2	丹下 弥生	シラバスに沿って実施した		○		○	○										○	○						○					聴講票	できた						
言語系障害演習	3	前期	選択	2	三浦 康子	シラバスに沿って実施した	同時並行している高次脳機能系講義の進捗状況を配慮しつつの展開	○	○	○	○										○	○	○					○	○	○					○	○	○	できた		
小児系障害演習	3	後期	選択	2	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○		○											○	○	○	○										○		○	できた			
卒業研究	3	後期	選択	3	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○	○																												論文審査口頭試問	できた		
見学実習	1	後期	必修	1	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○																													評価表による	できた		
観察実習	2	後期	必修	3	齊藤 吉人	シラバスに沿って実施した		○																														評価表による	できた	
評価実習	3	後期	必修	6	白坂 康俊	シラバスに沿って実施した		○		○																												実習評価票	できた	

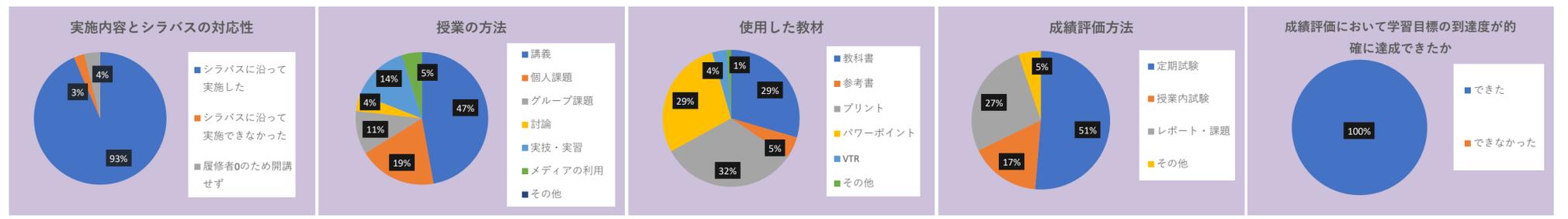


医療技術学部 検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか									
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考						
心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○								○			できた			
教育心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施できなかった		○	○							○		○											○		できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○		○								○									○	○		できた		
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した			○	○								○									○	○		できた		
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○									○					できた		
基礎物理学	1	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○												自作ノート				○		○			できた		
物理学	1	後期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○												自作ノート				○		○			できた		
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○									○		○		多読（達成語数）		できた		
医療英語会話	1	後期	必修	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○			○							○					できた		
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○										○	○				できた		
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																										
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○							○									○					できた		
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																										
大学の学び入門	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○							○	○	○	○	○							○			できた		
大学の学びー専門への誘いー	1	前期	必修	1	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○					○	○	○	○							○	○			できた		
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○	○	○						○	○			できた		
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○					できた		
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○					できた		
生理学Ⅰ	1	前期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○	○					○		○			できた		
生理学Ⅱ	1	後期	必修	1	洞口 貴弘	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○	○					○		○			できた		
生化学	1	後期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○	○	○					○	○				できた		
組織学	2	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○					できた		
組織学実習	2	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○	○						○		○	○						○		○			できた		
基礎発生工学	1	前期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○									○								○	○			できた		
病理学	1	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○						○					できた		
病態薬理学	2	前期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○										○							○					できた		
老年医学	2	後期	必修	1	田村 遼一	シラバスに沿って実施した		○										○							○					できた		
遺伝と病気	1	後期	選択	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○										○	○						○					できた		
感染と免疫	1	後期	必修	1	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○	○						○	○				できた		
生殖医療技術学	2	後期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○							○	○			できた		
医学概論	1	前期	必修	2	古田島伸雄	シラバスに沿って実施した		○								○		○							○	○				できた		
公衆衛生学	1	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○								○		○							○					できた		
臨床心理学	1	後期	選択	1	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○	○								○			できた		
医療システムとマネージメント	2	前期	選択	1	三浦 佑介	履修者0のため開講せず																										
情報科学概論	3	後期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○					できた		
生体計測工学	3	後期	選択	1	目黒 力	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○	○								○				講義担当割合変更のため都度対応した	
医療統計学	1	前期	必修	1	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○	○	○					○		○			できた		
臨床検査解析学 (Reversed CPC) I	3	前期	必修	1	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○	○						○					できた		
臨床検査解析学 (Reversed CPC) II	3	後期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○	○						○					できた		
臨床検査医学	2	後期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○					できた		
電気泳動分析病態解析学	3	後期	必修	2	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○	○						○		○			できた		
ビットフォール解析学	3	前期	必修	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○	○						○					できた		
血液検査学	2	通年	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○	○				できた		
血液検査学実習	3	前期	必修	2	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○		○						○		○	○						○		○			できた		
病理検査学	2	前期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○	○						○					できた		
病理検査学実習	3	後期	必修	2	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○	○						○		○	○						○		○			できた		
細胞診断学	2	後期	必修	1	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○	○						○					できた		
臨床検査学総論	2	前期	必修	1	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○								○		○							○	○				できた		
臨床検査学総論実習	2	後期	必修	1	藤本 友香	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○	○	○			できた		
医動物学実習	1	後期	必修	1	藤本 友香	シラバスに沿って実施した		○	○							○		○	○	○					○	○	○			できた		
免疫検査学	2	通年	必修	2	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○	○	○						○	○				できた		
免疫検査技術学実習	3	前期	必修	2	高橋 克典	シラバスに沿って実施した		○								○		○							○		○			できた		
臨床化学検査学	2	通年	必修	2	松下 誠	シラバスに沿って実施した		○	○	○						○		○	○						○		○			できた		
臨床化学検査学実習	3	後期	必修	2	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○								○		○	○						○		○			できた		
RI検査学	3	後期	必修	1	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○		○							○			ミニテスト		できた		
健康食品学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○								○		○							○			ミニテスト		できた		

医療技術学部 検査技術学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか							
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考				
食品衛生学	3	前期	選択	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○									○		○					○				ミニテスト	できた	
遺伝子検査学	2	前期	必修	1	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○				○					できた	
遺伝子検査学実習	2	後期	必修	1	荒木 泰行	シラバスに沿って実施した		○					○						○	○					○	○			できた	
遺伝子分析学	2	後期	選択	1	長田 誠	シラバスに沿って実施できなかった		○									○		○					○					できた	
遺伝子工学	3	前期	選択	1	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○				○					できた	
輸血検査学	3	後期	必修	1	林 由里子	シラバスに沿って実施した		○					○				○		○	○				○					できた	
微生物検査学	2	後期	必修	2	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○				○					できた	
微生物検査学実習	3	前期	必修	2	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○	○				○				○		○	○				○	○	○			できた	
ウイルス検査学	2	前期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○									○		○					○					できた	
生理機能検査学	2	通年	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○				○					できた	
生理機能画像検査学実習	3	前期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した							○				○		○						○	○			できた	
画像解析検査学	3	前期	必修	2	長田 誠	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○				○					できた	
医療現場と臨床検査	2	後期	必修	2	亀子 光明	シラバスに沿って実施した		○					○				○		○					○					できた	
関係法規	1	前期	必修	2	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○				○					できた	
関係法規	3	前期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○									○		○	○				○					できた	
臨床検査学総合演習 I	3	後期	必修	3	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○				○					できた	
臨床検査学総合演習 II	4	後期	必修	4	岡山 香里	シラバスに沿って実施した		○									○	○	○	○				○					できた	
医療安全管理学演習	2	前期	必修	1	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○	○				○				○		○	○	○			○					できた	
医療機器管理学	1	後期	必修	1	石垣 宏尚	シラバスに沿って実施した		○					○				○		○	○				○					できた	
臨地実習	4	前期	必修	7	長田 誠	シラバスに沿って実施した							○						○						○	○	臨地実習施設の評価点	できた		
卒業研究	4	通年	必修	8	藤田 清貴	シラバスに沿って実施した			○	○	○	○						○	○	○						○	研究発表	できた		

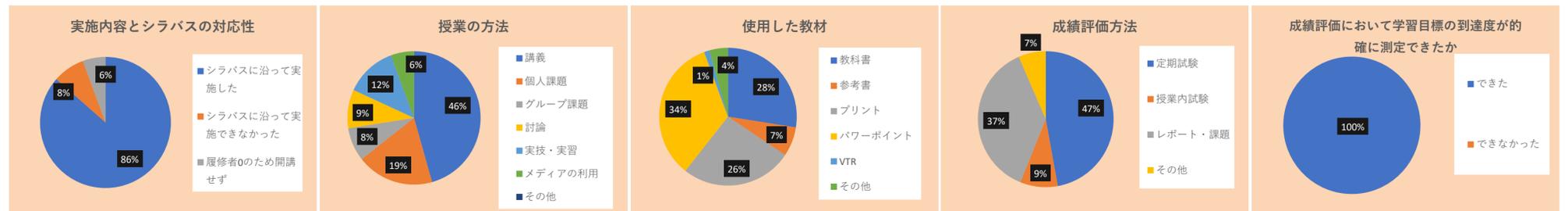


医療技術学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか							
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考				
心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○								○	○							○			できた		
教育心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施できなかった		○	○					○			○	○								○			できた	
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○		○								○							○	○		できた		
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した			○	○							○								○	○		できた		
生命倫理	2	前期	選択	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○								○				できた		
基礎数学	1	前期	選択	1	今尾 仁	シラバスに沿って実施した		○									○	○							○			できた		
数学	1	後期	選択	1	今尾 仁	シラバスに沿って実施した		○									○	○							○			できた		
基礎化学	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○								○								○				できた		
化学	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○								○								○				できた		
基礎物理学	1	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○											自作ノート				○		○		できた		
物理学	1	後期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○											自作ノート				○		○		できた		
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○				○			○							○		○	多読(達成語数)			
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○				○			○							○	○					
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	履修者0のため開講せず																								
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	徳永 慎也	履修者0のため開講せず																								
情報処理	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○					○	○		○							○	○			できた		
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																								
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																								
大学の学び入門	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○					○	○	○	○	○							○			できた		
大学の学び-専門への誘い-	1	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○			○	○		○								○	プレゼン発表		できた		
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○						○		○	○							○				できた		
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○						○		○	○							○				できた		
病理学	1	前期	必修	1	田村 遼一	シラバスに沿って実施した		○									○							○				できた		
薬理学	2	前期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○								○								○				できた		
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○							○				できた		
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○	○					○		○								○				できた		
看護技術論	2	後期	選択	1	萩原 英子	シラバスに沿って実施した		○			○					○	○								○	各回のMinutesPaper		できた		
画像診断学Ⅰ	2	後期	必修	2	茂木 俊一	シラバスに沿って実施できなかった	今年度より受け持ちのため、シラバス作成者と受け持ち者が違った	○							○		○							○				できた		
画像診断学Ⅱ	3	前期	選択	2	茂木 俊一	シラバスに沿って実施できなかった	今年度より受け持ちのため、シラバス作成者と受け持ち者が違った	○							○		○							○				できた		
医療基礎数学	1	前期	選択	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○								○		○		できた		
医療基礎化学	1	前期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○							○		○							○				できた		
医療基礎物理学	1	前期	必修	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○											自作ノート				○		○		できた		
医療電気・電子工学Ⅰ	1	前期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○								○								○				できた		
医療電気・電子工学Ⅱ	1	後期	選択	2	山崎 真	シラバスに沿って実施できなかった	8コマで時間が足りず、学生の理解度に合わせて講義を進めた	○	○											自作ノート				○		○		できた		
医療統計学	2	後期	必修	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○					○	○							○		○		できた		
放射線医療学概論	1	前期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○								○		○		できた		
放射線救急医学	2	後期	選択	1	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○	○		○	○	○							○	○	○		できた		
放射線文献講読Ⅰ	3	前期	選択	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○				○	○										発表		できた	
放射線文献講読Ⅱ	3	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																								
放射線物理学Ⅰ	2	前期	必修	2	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○						○					自作ノート				○		○		できた		
放射線物理学Ⅱ	2	後期	必修	2	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○						○					自作ノート				○		○		できた		
放射線物理学演習	3	前期	選択	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○							○									○			できた		
放射化学	2	前期	必修	2	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○							○		○							○				できた		
放射化学演習	2	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○		○					○	○	○							○				できた		
放射線生物学	1	後期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○								○								○				できた		
放射線計測学Ⅰ	2	後期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○								○								○				できた		
放射線計測学Ⅱ	3	前期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○								○								○				できた		
放射線計測学演習	3	後期	選択	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○								○									○			できた		
放射線計測学実験	3	前期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○							○					実験装置					○			できた		
診療放射線学概論	1	前期	必修	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○	○	○				○									○		○		できた		
診療画像検査学概論	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○							○		○		できた		

医療技術学部 放射線学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか										
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考							
診療放射線学導入実習	2	後期	必修	1	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																									シラバス作成時点で評価方法が十分に検討できていなかった		
診療放射線学総合臨床実習	4	前期	必修	2	西澤 徹	シラバスに沿って実施した																											
診療画像解析学Ⅱ	2	前期	必修	2	今尾 仁	シラバスに沿って実施した																											
診療画像解析学Ⅲ	2	後期	必修	2	茂木 俊一	シラバスに沿って実施できなかった																											
診療画像解析学演習	3	前期	選択	1	茂木 俊一	シラバスに沿って実施した																											
診療画像解析学実習Ⅱ	3	前期	必修	1	今尾 仁	シラバスに沿って実施した																											
診療画像解析学実習Ⅲ	3	後期	必修	1	茂木 俊一	シラバスに沿って実施できなかった																											
診療画像解析学特論	3	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した																											
医療放射線機器学Ⅰ	1	後期	必修	2	茂木 俊一	シラバスに沿って実施した																											
医療放射線機器学Ⅱ	2	前期	必修	2	今尾 仁	シラバスに沿って実施した																											
医療放射線機器学Ⅲ	2	後期	必修	2	茂木 俊一	シラバスに沿って実施できなかった																											
診療画像解剖学Ⅰ	1	後期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した																											
診療画像解剖学Ⅱ	2	前期	必修	2	加藤 英樹	シラバスに沿って実施した																											
診療画像解析学臨床実習Ⅰ	4	前期	必修	2	茂木 俊一	シラバスに沿って実施した																											
核医学検査技術学Ⅰ	2	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
核医学検査技術学Ⅱ	2	後期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
核医学機器工学	3	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
核医学検査技術学演習	3	前期	選択	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
核医学検査技術学実習	3	後期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
核医学検査技術学臨床実習	4	前期	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
放射線治療技術学Ⅰ	2	前期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																											
放射線治療技術学Ⅱ	2	後期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																											
放射線治療機器工学	3	前期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																											
放射線治療技術学演習	3	前期	選択	1	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																											
放射線治療技術学実習	3	後期	必修	1	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																											
放射線治療技術学臨床実習	4	前期	必修	2	岩井 謙憲	シラバスに沿って実施した																											
放射線情報システム学	3	前期	必修	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した																											
医療画像情報学演習	3	後期	選択	1	星野 洋満	シラバスに沿って実施した																											
放射線安全管理学	3	前期	必修	2	島崎 綾子	シラバスに沿って実施した																											
診療放射線技師の義務と役割	2	後期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した																											
放射線関係法規	2	後期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した																											
医療安全管理学	3	前期	必修	2	島崎 綾子	シラバスに沿って実施した																											
放射線科学特別講義	4	前期	選択	1	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した																											
診療放射線学総合演習	4	通年	必修	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
診療放射線技術と研究	3	後期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
診療放射線学研究Ⅰ	3	後期	必修	1	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											
診療放射線学研究Ⅱ	4	通年	必修	4	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した																											

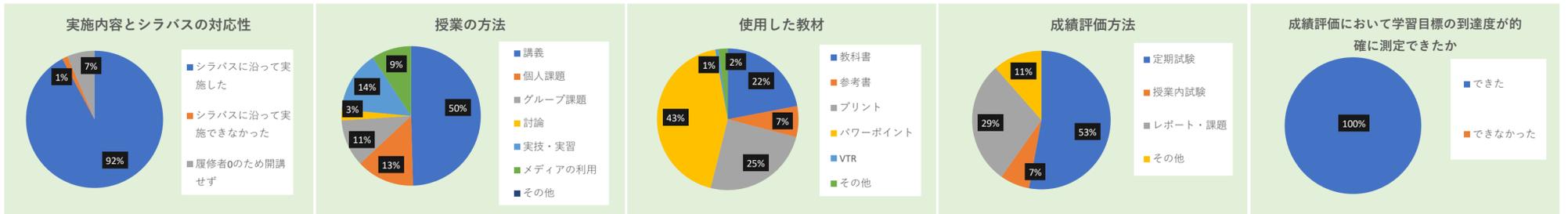


医療技術学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか							
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考				
心理学	1	後期	必修	2	竹居田幸仁	シラバスに沿って実施した		○	○									○	○							○		できた		
教育心理学	1	後期	選択	2	竹居田幸仁	履修者0のため開講せず																								
健康スポーツ理論	1	前期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施した		○		○															○	○		できた		
健康スポーツ実技	1	後期	選択	1	岩城 翔平	シラバスに沿って実施できなかった 履修者が少なく、その実態に応じて球技種目を変更した				○															○	○		できた		
生命倫理	2	前期	必修	2	峯村 優一	シラバスに沿って実施した		○	○		○													○			できた			
基礎化学	1	前期	必修	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																○			できた			
化学	1	後期	選択	1	酒井 健一	シラバスに沿って実施した		○																○			できた			
基礎物理学	1	前期	必修	1	山崎 真	シラバスに沿って実施した		○	○														自作ノート	○		○		できた		
物理学	1	後期	選択	1	山崎 真	履修者0のため開講せず																								
英語リーディング	1	前期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○										○		○	多読（達成語数）		
医療英語リーディング	2	後期	必修	1	徳永 慎也	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○										○	○				
英語会話	2	前期	選択	1	David Andrews	シラバスに沿って実施した		○	○	○					○													できた		
英語アカデミックリーディング・ライティング	3	前期	選択	1	徳永 慎也	履修者0のため開講せず																								
情報処理	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○									○	○		できた		
情報リテラシー	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																								
データサイエンス入門	1	後期	選択	1	星野 修平	履修者0のため開講せず																								
大学の学び入門	1	前期	必修	1	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○						○	○	○	○								○		できた		
大学の学び-専門への誘い-	1	後期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○		○	○					○										○		できた		
多職種理解と連携	2	前期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○																		○		できた		
解剖学Ⅰ	1	前期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
解剖学Ⅱ	1	後期	必修	1	浅見知市郎	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
生化学	1	前期	必修	1	木村 鮎子	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
公衆衛生学	1	後期	必修	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○	○						○		○											できた		
病理学	1	前期	必修	1	田村 遼一	シラバスに沿って実施した		○									○								○			できた		
薬理学	1	後期	必修	1	栗田 昌裕	シラバスに沿って実施した		○							○										○			できた		
基礎医学実習	2	後期	必修	1	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○								○	○									○		できた		
看護学概論	2	後期	必修	1	西川 薫	シラバスに沿って実施した		○								○	○	○								○	毎回提出されるミニッツペーパー	できた		
臨床生理学	2	前期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○									○								○			できた		
臨床病理学	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○							○		○								○			できた		
臨床薬理学	2	後期	必修	1	湯本 真人	シラバスに沿って実施した		○									○								○			できた		
臨床検査学総論	2	後期	選択	2	三浦 佑介	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
応用数学	1	前期	必修	2	花田三四郎	シラバスに沿って実施した		○								○	○								○			できた		
医用電気工学実習	1	前期	必修	1	松岡雄一郎	シラバスに沿って実施した										○	○									○		できた		
医用電子工学実習	2	後期	必修	1	松岡雄一郎	シラバスに沿って実施した										○	○									○		できた		
計測工学	1	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
医用超音波工学	2	前期	必修	1	松岡雄一郎	シラバスに沿って実施した		○							○		○								○			できた		
放射線工学概論	2	後期	必修	1	西澤 徹	シラバスに沿って実施した		○								○									○			できた		
医用機械工学	2	前期	必修	2	花田三四郎	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
医用機械工学演習	2	後期	必修	1	花田三四郎	シラバスに沿って実施した		○								○	○								○			できた		
基礎工学実験	1	後期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した				○						○	○									○		できた		
医療情報処理工学	2	前期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
医療情報処理工学演習	2	後期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した			○							○	○									○			できた	
医用情報通信工学	3	前期	必修	1	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
医用工学概論	1	前期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○								○	○								○			できた		
人間工学	2	後期	必修	2	松岡雄一郎	シラバスに沿って実施した		○		○							○										グループ発表内容	できた		
医用レーザー工学	3	前期	選択	2	松岡雄一郎	シラバスに沿って実施した		○									○								○			できた		
生体物性工学	3	前期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
医用材料工学	2	後期	必修	2	丸下 洋一	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
医用機器学概論	1	後期	必修	1	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○									○								○			できた		
医用治療機器学	3	前期	必修	2	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○									○								○			できた		
医用治療機器学実習	3	後期	必修	1	西村 裕介	シラバスに沿って実施した		○	○	○							○									○		できた		
生体計測装置学	2	前期	必修	2	島崎 直也	シラバスに沿って実施した		○							○	○	○								○			できた		
生体計測装置学実習	2	後期	必修	1	島崎 直也	シラバスに沿って実施した				○					○		○									○	プレゼンテーション	できた		
生体機能代行装置学Ⅰ	3	前期	必修	2	大濱 和也	シラバスに沿って実施した		○									○								○			できた		
生体機能代行装置学Ⅱ	3	前期	必修	2	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した		○							○		○								○			できた		

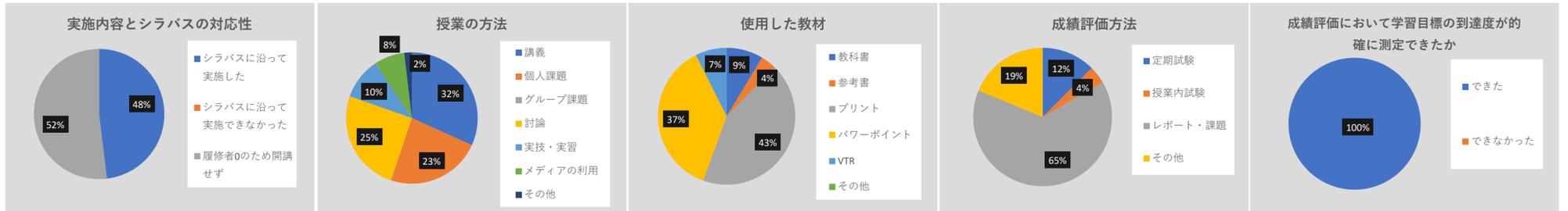
医療技術学部 臨床工学科 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか							
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考				
生体機能代行装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した				○							○	○	○	○				○				できた		
呼吸療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した			○							○		○						○				できた		
呼吸療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した			○							○	○							○				できた		
体外循環装置学	3	前期	必修	2	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した			○										○					○				できた		
体外循環装置学実習	3	後期	必修	1	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した			○								○	○						○				できた		
血液浄化療法装置学	3	前期	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した			○							○	○							○				できた		
血液浄化療法装置学実習	3	後期	必修	1	近土真由美	シラバスに沿って実施した				○						○	○							○		実技試験		できた		
医用機器安全管理学 I	2	前期	必修	2	島崎 直也	シラバスに沿って実施した			○									○						○				できた		
医用機器安全管理学 II	2	前期	必修	2	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した			○										○					○				できた		
医用機器安全管理学実習	2	後期	必修	1	島崎 直也	シラバスに沿って実施した					○								○					○	○	プレゼンテーション		できた		
医療安全工学	2	後期	選択	2	西村 裕介	シラバスに沿って実施した			○										○					○				できた		
関係法規	3	前期	必修	1	齋藤 慎	シラバスに沿って実施した			○										○					○				できた		
臨床医学総論 I	2	前期	必修	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した			○										○					○				できた		
臨床医学総論 II	2	後期	必修	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した			○										○					○				できた		
救急救命医学	3	前期	選択	2	西村 裕介	シラバスに沿って実施した			○										○					○				できた		
臨床実習 I	4	前期	必修	4	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した																		○		実習態度等		できた		
臨床実習 II	4	前期	必修	3	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した																		○		実習態度等		できた		
臨床工学総合演習 I	3	通年	必修	2	近土真由美	シラバスに沿って実施した			○		○	○							○	○	○	○			○		中間試験		できた	
臨床工学総合演習 II	4	後期	必修	2	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した			○											○	○				○				できた	
臨床工学英文講読	3	後期	選択	2	湯本 真人	シラバスに沿って実施した			○	○										○	○				○				できた	
臨床工学研究セミナー	4	前期	選択	2	花田三四郎	シラバスに沿って実施した			○												○	○			○				できた	
卒業研究	4	通年	必修	4	大瀧 和也	シラバスに沿って実施した					○																論文、発表		できた	



保健科学研究科保健科学専攻博士前期課程 教育活動の記録（専任教員）

授業科目	学年	開講期	必修/選択	単位数	単位認定者	実施内容とシラバスの対応性		授業の方法						使用した教材					成績評価方法				成績評価において学習目標の到達度が的確に測定できたか							
						選択	備考	講義	個人課題	グループ課題	討論	実技・実習	メディアの利用	その他	教科書	参考書	プリント	パワーポイント	VTR	その他	定期試験	授業内試験	レポート・課題	その他	選択	備考				
放射線教育学演習	1	後期	選択	2	倉石 政彦	履修者0のため開講せず																								
放射線防護学特論	1	前期	選択	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○					○	○							○			できた		
放射線防護学演習	1	後期	選択	2	渡邊 浩	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○					○	○							○			できた		
放射線利用学特論	1	前期	選択	2	酒井 健一	履修者0のため開講せず																								
放射線利用学演習	1	後期	選択	2	酒井 健一	履修者0のため開講せず																								
放射線学特別研究	2	通年	選択	10	倉石 政彦 渡邊 浩 酒井 健一	履修者0のため開講せず																								
放射線学特論	1	後期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○	○							○			できた		
臨床工学特別研究	2	通年	選択	10	大瀧 和也 花田 三四郎	履修者0のため開講せず																								
健康行動科学特論	1	前期	選択	2	小林 亜由美	シラバスに沿って実施した		○	○		○	○					○	○							○	発表・討議内容		できた		
ヘルスコミュニケーション特論	1	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○			○		○						○	○			できた		
環境保健学特論	1	前期	選択	2	倉石 政彦	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○								○			できた		
産業保健学特論	1	後期	選択	2	浅見 知市郎	履修者0のため開講せず																								
健康・医療政策特論	1	前期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○	○							○			できた		
国際保健政策特論	1	後期	選択	2	堀込 由紀	履修者0のため開講せず																								
先端感染症制御学特論	2	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○			○						○	○									討論・理解度		できた	
地域ケアシステム管理学特論	1	前期	選択	2	矢島 正栄	履修者0のため開講せず																								
実践リーダー育成特論A	1	前期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した		○	○		○						○	○								討論・理解度		できた		
実践リーダー育成演習A	1	後期	選択	2	木村 博一	シラバスに沿って実施した			○		○	○						○	○								演習結果・理解度		できた	
政策教育リーダー育成特論B	1	前期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○			○		○	○					○	○			できた		
政策教育リーダー育成演習B	1	後期	選択	2	木村 朗	シラバスに沿って実施した		○	○			○	○			○		○	○					○	○			できた		
政策教育リーダー育成特論C	1	前期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○			○						○								○			できた		
政策教育リーダー育成演習C	1	後期	選択	2	星野 修平	シラバスに沿って実施した		○			○						○								○			できた		
公衆衛生学特別研究	2	通年	選択	10	木村 博一	シラバスに沿って実施した			○								○	○								研究成果		できた		



II. 研究活動の記録

研究活動の記録は、専任教員の研究活動状況について収集したデータである。

研究活動状況を広く社会へ公表することにより、地域の方々と連携した生涯学習や課題解決に取り組んだり、企業等との受託研究や共同研究などのかたちで研究成果の社会還元を促進したりすることを通じて、大学の目的である「地域社会への貢献」を恒常的に実施し、定着させることを目的としている。また、個人で毎年研究実績を振り返ることにより PDCA サイクルを機能させ、研究活動の推進と質の向上を図っている。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 小林亜由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Validity of a 98-item Food Frequency Questionnaire for the Japan Nurses' Health Study. (日本ナースヘルス研究のための98項目からなる食物摂取頻度調査票の妥当性) (査読付)	共著	令和5年11月	The KITAKANTO MEDICAL JOURNAL. Vol173, No. 4, pp277-283, 2023.	働く女性の習慣的な栄養摂取状況を測定するために日本ナースヘルス研究の参加者に98項目からなる食物摂取頻度調査票 (JNHS-FFQ) を作成した。2回の7日間の食事記録で得られた栄養素量に対する妥当性を調べたところ、ピアソンの相関係数の中央値はエネルギー調整をしたもので0.34であり、栄養素ごとに見ると-0.12-0.56の幅があった。JNHS-FFQは働く日本人女性の栄養摂取を測ることを目的とする疫学的調査に有効である。(共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (Emiko Otsuka, Yukiko Miyazaki, Yuki Ideno, Kazue Nagai, <u>Ayumi Kobayashi</u> , Mikiko Kishi Jung-Su Lee and Kunihiko Hayashi)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 早川有子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 中下富子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
小児看護学実習における臨地実習指導者と大学教員の協働に関する研究（査読付）	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 第29号, 43-51, 2023	本研究は、実習指導者から捉えた小児看護学実習における実習指導者と大学教員の協働の実態を明らかにすることを目的とした。結果、実習指導者は、実習前の準備が実習指導者の役割であることを認識していた。また、大学教員との協働について「意志決定」「協調性」「情報共有」に高い傾向があげられた。実習指導者としての認識を尊重し、大学教員が関係性を築いていくことがより適切な協働につながることを示された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：生方明日香, 内山かおる, 中下富子
在日ブラジル人学校の子供の生活と健康 第Ⅱ報—ブラジル人学校の中高校生への質問紙調査から—	共著	2023年9月	埼玉大学紀要（教育学部）72(2), 69-88, 2023	本研究は、日本に在住するブラジル人の子供たちのライフスタイル、食物摂取状況、健康意識の視点から、その現状と課題について明らかにすることを目的とした。結果、ブラジルの食文化の影響を受けた食習慣、就寝時刻の遅さなどの生活習慣と、健康意識と健康行動が関連していないことを踏まえ、保護者の仕事の多忙さや不安定さ等の家庭環境などを考慮したライフスタイルへの支援が必要である。また、学習塾や家庭学習時間の少なさの要因として、言語力不足や家庭の経済力の低さ、高校進学や大学入学資格の厳しさなど様々な要因が含まれており、それらを考慮した支援の必要性が示された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：武井佑真, 中下富子, 斎藤千景

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 西川 薫

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践（査読付）	共著	令和6年3月	群馬バース大学紀要, 30, 13-22	本研究の目的は、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践を明らかにすることである。Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践を表す17カテゴリが形成された。 共著者：佐藤和也、西川薫 本人担当部分：研究計画の遂行、考察を担当した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 萩原英子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 看護過程の展開における患者指導をロールプレイングした学生の学び - 成人期にある患者への指導を通して -	共著	2024年3月	群馬パース大学紀要 第30号 p. 23-30	成人期にある患者の看護過程の展開における患者指導をロールプレイングした学生の学びを明らかにすることを目的とし、成人看護学演習にて記載した「ロールプレイングを通しての学び」に関するレポートを質的帰納的に分析した。その結果、学生は患者の理解度や背景を考慮した指導をすることの重要性や患者・家族の思いを尊重した指導の大切さに気づき、成人期にある患者と家族に対する指導の在り方を学んでいることが明らかとなった。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (金子吉美、安田弘子、湯澤香緒里、萩原英子、堀越政孝、小池菜穂子)
2. コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安	共著	2024年3月	群馬パース大学紀要 第30号 p. 59-66	コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安を明らかにすることを目的とし、対面による半構造化面接を実施した結果、コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安として、12の不安が明らかとなった。これらの多くは、患者と実際に相対し、直接、看護技術を提供する機会が減少したことに関連するものであった。学内にて、地域で生活している人々から体験を聴く機会を設けたり、リモートやシミュレータなどを活用し、看護実践の場面を見たり体験できる機会を設けることが有用であることが示唆された。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (湯澤香緒里、金子吉美、日下田那美、高橋翔、小池菜穂子、堀越政孝、萩原英子、安田弘子)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
大腸がん患者の術後機能障害マネジメントに関する国内文献レビュー	共著	2024年2月	第38回日本がん看護学会学術集会 兵庫県	大腸がん患者の術後機能障害マネジメントに関する国内文献レビューを行った結果、セルフマネジメントは食事内容や摂取方法の工夫などの「食事を整える」、便意の誘発や調整などの「排便を整える」、運動の実施や生活調整などの「心身を整える」、看護介入的サポートは「排便に関する情報提供」「不安の軽減」にカテゴライズされた。患者は生活体験の中で自己流に症状マネジメントしていくことが明らかになっており、経験則によるリソースの共有を図ることで、広い視野でのマネジメントが可能となっていくため、介入研究等によるエビデンスの蓄積が必要である。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (堀越政孝、安田弘子、日下田那美、萩原英子)

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 中島久美子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
看護学生の視座から捉えた助産学生による性のピアエデュケーションの教育的効果の検討 「査読付」	共著	2024年1月	母性衛生 64 (4) , 461-468	看護学生を対象に助産学生によるリプロダクティブヘルスに関するピアエデュケーションの学びの内容を明らかにし、教育的効果を検討した。結果、看護学生は【性に関する自己と他者の価値観の尊重と自己責任】と【性に関する良好なパートナーシップの重要性】を認識し、青年期の自己意識の形成に寄与すると考えられた。。ピアエデュケーションの教育的効果が明らかとなり新たな看護・助産教育への可能性が示唆された。 中島久美子, 吉野めぐみ, 廣瀬文乃, 綿貫真歩.
助産学生の視座から捉えた看護学生への性に関するピアエデュケーションの教育効果の検討 「査読付」	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 29, 3-14	看護学生への性に関するピアエデュケーションの経験を通じた助産学生の学びと自己意識の発達を明らかにし、教育的効果を検討した。結果、ピアエデュケーションの経験は、女性たちの性に関する自己決定について助産師として支援をする役割を考える経験学習となった。また、ピアエデュケーター同士の仲間意識を育てていく経験は、助産師のアイデンティティ形成の基盤となる態度に繋がると考えられた。 中島久美子, 廣瀬文乃, 吉野めぐみ, 綿貫真歩.
就労妊婦のマタニティハラスメント被害を受けての想いと対処 「査読付」	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 29, 35-42	マタニティハラスメント被害による終了妊婦の想いと被害時の対処を明らかにした。3名の事例研究の結果、客観的に自身の状況をマタハラ被害と判断できず戸惑う思いがあった。就労妊婦のマタニティハラスメントに対する助産支援としては、就労女性を労い、気持ちを表出できるような関りが重要である。 廣瀬文乃, 中島久美子.
死産に対する看護者の感情—グリーフケアツールの活用— 「査読付」	共著	2023年8月	日本助産学会 37(2), 206-215	死産を経験した夫婦に対する看護者の思いや死産の看護について妊娠期から産褥期の各期に記入できるグリーフケアツールを試作し、ツールを使用して死産の看護を想起することによる看護者の死産に対する感情を明らかにした。死産の看護をツールに記入することは、看護者が死産の関わりがあった各時期の夫婦や死児に対する思いを再認識し、看護者が実施した看護や看護者自身の感情を振り返る機会となること、また死産の看護への探究につながることを示唆された 吉野めぐみ, 中島久美子.
助産学実習における分娩介助シミュレーション実習の学習効果の検討 「査読付」	共著	2024年3月	群馬パース大学紀要 30, 67-75	助産学実習の期間中（中期段階）に分娩介助シミュレーション実習を正常編、異常編の2事例を行い、学習効果を検討した。シミュレーション実習は、分娩介助技術や助産診断の習得に繋がる学習であることが明らかとなった。 廣瀬文乃, 中島久美子, 吉野めぐみ, 綿貫真歩.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
A study of midwives' support for couples in Japanese hospitals and clinics during the COVID-19 pandemic (COVID19パンデミックにおける我が国の病院・診療所での夫婦への助産支援の実態)	—	2023年6月11-14日	第33回ICM (33rd International Confederation of Midwives Triennial Congress) (インドネシア・バリ)	COVID19パンデミック時の我が国の病院・診療所の産科施設における夫婦への助産支援の実態を明らかにした。80%以上がCOVID-19によって夫婦への助産支援に影響を受け、集団教室や個別指導の規模の縮小等が余儀なくされた。重要な夫婦の関係性に関する助産支援は実施されていることが明らかとなった。 Kumiko Nakajima, Ayano Hirose, Megumi Yoshino, Tomoko Nameda.
「夫婦のパートナーシップを育むために助産師は夫婦をどのように支えていくのか—産後クライシスの予防に向けた妊娠中からの助産支援を実践しよう—」	—	2023年10月8-9日	第37回日本助産学会学 (聖路加国際大学)	産後クライシスの予防に向けた妊娠中からの助産支援の実践に向けて助産師向けの交流集会を企画し実行した。 中島久美子, 廣瀬文乃, 吉野めぐみ, 綿貫真歩, 行田智子.
妊娠中から夫婦の関係性を高める支援の研修会の実施と評価	—	2023年10月8-9日	第37回日本助産学会学 (聖路加国際大学)	助産師への夫婦支援研修会を開催しプログラムの効果について報告した。 廣瀬文乃, 中島久美子, 吉野めぐみ, 綿貫真歩, 行田智子.
産後クライシスの予防に向けた妊娠中からのカップルセラピー	単著	2023年11月	金剛出版「臨床心理学」 Vo. 23 No. 6	特集「カップルセラピーをはじめ—もしあなたのもとにカップが訪れたら?」として、親への移行期にある夫婦のパートナーシップを育む支援について助産師の立場から実践を報告した。 中島久美子

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 奥野みどり

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 1歳6か月児健診からの早期スクリーニング 群馬県における Social Attention and Communication Surveillance-Japan の活用	-	2023年8月	第19回日本臨床発達心理士学会全国大会（兵庫県・神戸市）	平成27年度からR4年まで群馬県と協働し発達障害児の早期発見支援として乳幼児健診にSACS-Jを導入する取り組みからSACS-J実施マニュアルと動画が作成されるまでの経緯についてまとめた。 （全体総括）共同発表者：奥野みどり、毛塚恵美子
2. 1歳6か月児健康診査からの早期スクリーニング（SACS-J）の有効性	-	2023年10月	第82回日本公衆衛生学会総会（茨城県つくば市）	群馬県渋川市において2016年度から乳幼児健診に導入したSACS-Jのカットオフ値と感度について検証した。感度は73.3～76.5%であり、1歳6か月児健診を端緒とした継続的なSACS-Jの実施が、「神経発達症」の早期発見・支援に有効であることが示唆された。（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）共同発表者：奥泉庸子・上田由香・奥野みどり

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 堀越政孝

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 看護過程の展開における患者指導をロールプレイングした学生の学び - 成人期にある患者への指導を通して - (査読有)	共著	2024年3月	群馬パース大学 紀要, 30:23-30	ロールプレイングでの学生の学びとして、【わかりやすい指導をする大切さ】【正確な知識や根拠に基づいた指導の必要性】【患者の理解度に合わせた指導の必要性】【患者の背景を踏まえた指導の必要性】【患者・家族を尊重した指導の大切さ】【家族への指導の大切さ】の6カテゴリが抽出された。学生は看護過程の展開における患者指導のロールプレイングを通して、患者の理解度や背景を考慮した指導をすることの重要性や患者・家族の思いに配慮した尊重した指導の大切さに気づき、成人期にある患者と家族に対する指導の在り方を学ぶことができていた。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：金子吉美・安田弘子・湯澤香緒里・萩原英子・堀越政孝・小池菜穂子
2. コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安 (査読有)	共著	2024年3月	群馬パース大学 紀要, 30:59-66	コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安として、【患者の家族に対する関わり方】【多職種との円滑な連携方法】【患者の発達段階や疾患の特徴を踏まえた関わり】【患者に実施した経験が少ない看護技術の提供】【短時間で行う的確なアセスメント】【必要な情報の明確化と情報収集の方法】【状況に応じた柔軟かつ的確な判断と対応】【患者の特性に応じたケアの実施】【患者・家族の心情に配慮した声掛け】【患者に不安感や不快感を与えない振る舞い】【先輩看護師や他職種への的確な情報伝達の方法】【患者の意思決定に関する支援】が明らかとなった。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：湯澤香緒里・日下田那美・金子吉美・小池菜穂子・安田弘子・萩原英子・堀越政孝

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
大腸がん患者の術後機能障害マネジメントに関する国内文献レビュー	—	2024年2月	第38回日本がん看護学会 学術集会(兵庫県神戸市)	対象文献は10件であった。研究デザインは、量的研究が3件、質的研究が6件、量質併用が1件であった。発行年は、2011年2件、2014年1件、2017～2020年がそれぞれ1件、2021年2件、2022年1件であった。対象者術式は結腸切除、LAR、SLAR、ISRであった。セルフマネジメントでは食事内容や摂取方法の工夫などの「食事を整える」、便秘の誘発や調整などの「排便を整える」、運動の実施や生活調整などの「心身を整える」、看護介入的サポートは「排便に関する情報提供」「不安の軽減」にカテゴライズされた。 共同発表者：堀越政孝、安田弘子、日下田那美、萩原英子

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 関 妙子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
株式会社ヤマニ熱工業安全協力会員研修	—	2023. 12. 8	株式会社ヤマニ熱工業安全大会協力会員研修	参加者の多くが経営者管理者であり、会社の安全衛生の1つとして、職員の健康管理意識向上につなげることを目的とした。「健康リスクに備えよう」と題し他テーマに沿って、生活習慣や加齢に伴う血管変化から、動脈硬化を起こし脳梗塞や心筋梗塞のリスクが高まることを説明し、生活習慣を整えることの重要性を説明した。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 金子 吉美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. 看護過程の展開における患者指導をロールプレイングした学生の学び—成人期にある患者への指導を通して—（査読付）	共著	2024年3月	群馬パー大学紀要、第30号, pp23-30.	成人期にある患者の看護過程の展開における患者指導をロールプレイングした学生の学びを明らかにすることを目的とした。ロールプレイング後の学生のレポート内容を質的帰納的に分析し、カテゴリ化した。対象者は、学生81名であった。学生の学びとして、327文脈を抽出し、23サブカテゴリ、6カテゴリ【わかりやすい指導をする大切さ】【正確な知識や根拠に基づいた指導の必要性】【患者の理解度に合わせた指導の必要性】【患者の背景を踏まえた指導の必要性】【患者・家族を尊重した指導の大切さ】【家族への指導の大切さ】が形成された。学生は看護過程の展開における患者指導のロールプレイングを通して、患者の理解度や背景を考慮した指導をすることの重要性や患者・家族の思いに配慮した尊重した指導の大切さに気づき、成人期にある患者と家族に対する指導の在り方を学ぶことができていた。 (全体総括) (筆頭論文) (金子吉美、安田弘子、湯澤香緒里、萩原英子、堀越政孝、小池菜穂子)
2. コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安（査読付）	共著	2024年3月	群馬パー大学紀要、第30号, pp59-66.	コロナ禍により臨地実習時間が減少したことに伴う学生の看護実践に関する不安を明らかにすることを目的とした。学生11名に半構造化面接を実施しデータを収集し、質的帰納的に分析を行った。コロナ禍により臨地実習時間が減少した学生の看護実践に関する不安として、【患者の家族に対する関わり方】【多職種との円滑な連携方法】【患者の発達段階や疾患の特徴を踏まえた関わり】【患者に実施した経験が少ない看護技術の提供】【短時間で行う的確なアセスメント】【必要な情報の明確化と情報収集の方法】【状況に応じた柔軟かつ的確な判断と対応】【患者の特性に応じたケアの実施】【患者・家族の心情に配慮した声掛け】【患者に不安感や不快感を与えない振る舞い】【先輩看護師や他職種への的確な情報伝達の方法】【患者の意思決定に関する支援】が明らかとなった。これらの多くは、患者と実際に相対し、直接、看護技術を提供する機会が減少したことに関連するものであった。 (共同研究につき本人担当部分抽出不可能) (湯澤香緒里、金子吉美、日下田那美、小池菜穂子、堀越政孝、萩原英子)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 萩原 一美

学術論文

名称	単著・共著の	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. Approach and Issues of Basic Nursing Practice the COVID-19 outbreak -From the self-evaluation of students for Basic Nursing practice 1- (COVID-19流行下の基礎看護学実習の取り組みと課題) (査読付)	共著	2023. 3. 31	BULLETIN OF GUNMA paz UNIVERSITY. vol. 29. pp53-65	COVID-19流行下の基礎看護学実習 I の取り組みを2019年度と2020年度の学生の自己評価を比較し、学習成果や課題を検討した。その結果、自己評価点は2020年度の方が低かった。学生は、「観察する」ことや「知る」ことはできたが、事前学習と結びつけることはイメージができず、学びが深まらないなど「理解する」思考の発展までには至らなかった。よって、短時間でも臨地で学ぶことができるような実習環境を調整することが重要である。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 〔共著〕 Hiroko JOBOSHI , Megumi NAGAMINE, Kazumi HAGIWARA, Teruko SATO, Takeshi HOSHINO, Miho SATO, Yuki HORIGOME
2 . 看護専門学校の初任期教員が語る授業実践の振り返り (査読付)	単著	2024. 3. 31	群馬パース大学紀要 vol. 30 pp77-80	看護専門学校の教員の授業研究の一助として自身の授業動画を視聴後に語られた内容を質的帰納的に分類した。その結果【授業実践に基づく授業進行を評価】【授業進行中に生じた現象を意味付け】【授業実践の新たな改善点を発見】という3カテゴリ、6サブカテゴリの振り返りの内容が抽出された。
3 . COVID-19 専用病棟の看護師が他病棟で行う看護業務支援に対する思い (査読付)	共著	2024. 3. 31	群馬パース大学紀要 vol. 30 pp51-58	COVID-19 専用病棟の看護師が他病棟で行う看護業務支援に対する思いを半構造的面接法で、インタビューし、逐語録を質的帰納的に分析した。その結果、他病棟への業務支援を「前向きにとらえる」「積極的に受け入れられない」という2コアカテゴリと、8カテゴリに分類された。他病棟への業務支援は、看護管理者の動機づけと体制整備が必要と考えられた。(全体の構成・考察に一部を担当) 〔共著〕村田亜由美, 萩原一美,

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 堀込由紀

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
該当なし				

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Approach and issue of Basic nursing Practice under the COVIT-19 outbreake-From the Self-evaluation of students for Basic Nursing practice I-COVIT-19流行下の基礎看護学実習の取組みと課題-基礎看護学実習 Iにおける学生の自己評価から-	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 第29巻, 53-65	COVIT-19流行下における基礎看護学実習 I の自己評価を2019年と2020年で比較し、学習成果等について検討した。その結果、自己評価は2019年に比べて2020年は低く、また、自由記載では「観察する」、「知る」項目は多かったが「説明する」という項目の記載が少なく、思考の発展に至らなかった。このような社会環境においても、看護学生ができるだけリアルな臨床の体験ができるような工夫が必要であると考える。（共同研究のため、担当部分抽出は不可能である） Hiroko Joboshi, Megumi NAGAMINE, Kazumi HAGIWARA, Teruko SATO, Yuki HORIZOME

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. Disaster Prevention Awareness among Nursing Students and its Relationship with Background Factors 看護学生の防災意識と背景要因の関連性及び防災意識の現状の分析	—	2023年7月	ICN Congress in Montral E-Poster	防災意識とその影響要因を調べるために調査を実施した。日本で開発された防災意識尺度とその背景要因について、関東地方の看護学生124名にオンライン質問票を実施した。データは、重回帰分析とスチューデントのt検定を使用して分析された。看護学生の防災意識は、日本での先行研究と比較して有意に高かった。防災意識と背景要因の関連性については「災害看護学受講後の災害看護への関心」「友人や家族の被災体験」、「大学の防災マニュアルへの関心」の3変数の影響が認められた。（研究企画、調査実施、分析、発表資料等全般を担当した。） Yuki HORIZOMR, Miho SATO
2. 看護基礎教育における国際看護教育の質保証のためのFD研修会の実践報告	—	2023年11月	日本国際看護学会第7回 学術集会 with Youさいたま	看護基礎教育における国際看護学教育の質保証を目的にFD研修会を開催した。2022年は国際看護学教育で講義されている講義内容を精選してシリーズ化し、さらに模擬形式での講義を体験し、模擬講義提供者、参加者間で模擬講義に関するディスカッションを行った。本報告では、研修会の成果と課題について報告した。堀込由紀、大植崇、横山詞果、吳小玉、江角伸吾

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 千葉 今日子

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
主任看護師である実習指導者の自己教育力とその関連要因（査読付）	共著	2024.3	群馬パース大学紀要 30,p31-41.	本研究は、看護学臨地実習指導者自己教育力尺度を用いて、主任看護師である指導者の自己教育力とその関連要因を明らかにすることを目的とした。300床以上の病院に勤務する主任看護師である指導者を対象として自記式質問紙調査を実施した。自己教育力尺度に欠損がない295部（有効回答率17.4%）を分析対象とした。本研究における指導者の自己教育力の平均は68.9±10.6点、重回帰分析による自由度調整済み決定係数は0.69であった。指導者の自己教育力に強く関連していた変数は、実習指導は自己成長に繋がっている、であり、主任看護師である指導者の役割や範囲を明確に、自己成長を実感できるような支援が必要であることが示唆された。 千葉 今日子、富田 幸江、中澤 沙織

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
看護管理者の立場にある実習指導者の自己教育力とその関連要因	—	2023.8	日本看護学教育学会誌33 巻学術集会講演集 Page198	看護管理者の立場にある実習指導者の自己教育力の関連要因を明らかにした。300床以上の病院に勤務する指導者に自記式質問紙調査を実施した。指導者の自己教育力の総点と説明変数について2変量解析を実施し、有意差（ $p < 0.05$ ）のあった変数と重回帰分析を実施した。指導者の自己教育力の関連要因は、学生をチームの一員として認めている、学生のモデルになっているなどであった。管理者である指導者はスタッフ・主任である指導者より自己教育力が高く、学生のモデルとなるよう自己の価値を認め、看護チームの管理者として学生を受け入れていた。 千葉今日子 中澤沙織
看護学臨地実習指導者の倫理的行動と関連要因	—	2024,3	第34回日本医学看護学教育学会学術学会講演集 Page52.	看護学臨地実習指導者（以下指導者）の倫理的行動と関連要因を明らかにした。全国300床以上の病院に勤務する指導者に自記式質問紙調査を実施した。指導者の倫理的行動と説明変数について有意差（ $p < 0.05$ ）のあった変数を選択し、重回帰分析（ステップワイズ法）を実施した。指導者の倫理的行動の関連要因は、看護師のレジリエンス、指導者の自己教育力、学生のケアが患者の負担となっていると感じるなどであった。 千葉今日子 富田幸江 小林由起子 中澤沙織 萩原一美
新型コロナウイルス感染症の流行を経験した看護大学生の社会人基礎力と看護学生のアイデンティティ	—	2024, 3	第34回日本医学看護学教育学会学術学会講演集 Page55.	新型コロナウイルス感染症の流行を経験した看護大学生の社会人基礎力と看護学生のアイデンティティを明らかにした。A大学の看護大学生を対象にWeb調査を実施した。調査項目についてt検定・一元配置分散分析を実施した。 千葉今日子 伊藤晴香 熊谷萌玖 高橋志帆 横瀬菜奈

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護 氏名 長嶺めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Approach and Issues of Basic Nursing Practice under the COVID-19 outbreak From the self-evaluation of students for Basic Nursing Practice I (COVID-19流行下における基礎看護実習の取り組みと課題基礎看護実習学生の自己評価から) (査読あり)	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 第29号 pp53-66	2020年はCOVID-19の世界的な流行をうけ、看護基礎教育において様々な面に変化を求められた年であった。臨地実習では、感染拡大防止の観点から全国的に実習受け入れの中止が相次ぎ、期間の縮小や変更、学内実習への切り替えなどが行われた。COVID-19の影響は長期化されることが予測されており、仮に終息しても今後新たな感染症が蔓延する可能性もある。そこで2020年度の基礎看護学実習Ⅰの変更点や取り組みについて報告するとともに2019年度と比較することで基礎看護学実習Ⅰの成果や課題を明らかにし、COVID-19流行下における新たな看護基礎教育における示唆を得ることを目的とする。(共同研究により担当箇所抽出不可能) 共著者: Hiroko Joboshi, Megumi Nagamine, Kazumi Hagiwara, Teruko Sato, Takeshi Hoshino, Miho Sato, Yuki Horigome
2. Basic Nursing Practice II during the COVID-19 outbreak (COVID-19流行下における基礎看護実習Ⅱ) (査読あり)	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 第29号 pp67-78	臨地実習は看護実践能力を獲得していく上で、非常に重要な学習といえる。しかし、2020年度はCOVID-19の世界的な流行をうけ、全国の看護師養成機関において一部施設の実習中止や実習時間の短縮等を行っている。本稿では、臨地での実習継続が不可能となり、学内で代替実習を行ったグループの学生の実習の学びや実習目標への到達状況について分析を行ったため報告する。今回、学内でSPを使った実習が臨地と近い形で行え、学生の自己評価に大きな差異を出さなかった背景には、1週間だけでも臨地で実際の患者の様子を見られたことが大きい。学生は実際の患者の情報を収集し見学した上で、計画を立て実際の患者に状態に沿った看護援助の提供が、単なる紙上事例とSPを使った学内演習とは違い、実習目標の達成に繋がり、学生の学びとなっていたと思われる。(共同研究により担当箇所抽出不可能) 共著者: Hiroko Joboshi, Megumi Nagamine
3. 基礎看護実習前の実技試験における模擬患者の教育効果 (査読あり)	単著	2024年3月	群馬パース大学紀要 第30号 pp43-50	バイタルサイン測定は、患者の状態把握をする上で不可欠な看護援助技術であると同時に、基礎看護学実習で学生が経験できる看護援助技術の一つでもあるため、看護基礎実習前に確実な技術の獲得が望まれる。看護実践能力の向上を促す教育手法として、模擬患者 (Simulated Patient: 以下SP) の導入が報告されており、臨地実習前の導入が最も学習効果をもたらすと報告もある。そこで、技術試験にSPを導入し、臨場感を高め、学生たちの看護実践能力の向上に繋がりたいと考えた。しかし、バイタルサイン測定の技術試験の患者にSPを導入することが、学生の看護実践能力向上にどのような教育効果があるのかは明らかとなっていない。よって、本研究の目的は、基礎看護実習前に開講されている「治療援助学演習」での技術試験 (バイタルサイン測定) にSPを導入し、その教育効果を明らかにすることである。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Educational Effectiveness of Simulated Patients in Practical Examinations before Basic Nursing Practice (基礎看護実習前の技術試験に模擬患者を導入することの教育効果)	—	2024年3月	26nd East Asian Forum of Nursing Scholars	模擬患者の導入は、リアリティのある学習状況を作ることができ、看護実践能力の向上を促す教育手法である。特に看護学実習前のSP導入は、学生の患者像のイメージを容易にする。本研究の目的は、実習前のバイタルサイン技術試験にSPを導入したことによる教育効果を明らかにする。(データ収集、分析、考察を担当) 共著者：Megumi Nagamine, Hiroko Joboshi.

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 反町 真由

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護実践(査読付き)	共著	2023. 3	群馬パース大学紀要 No. 29, pp. 25-34	子育て期の女性がん療養者の意思決定を支える訪問看護師の看護実践を明らかにすることを目的に、同意が得られた訪問看護師10名に半構成的面接を行い、質的帰納的に分析した。訪問看護実践として6つのカテゴリが抽出され、看護の示唆が得られた。共著者：反町真由・林恵・小林亜由美

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 東泉貴子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
チーム医療演習Ⅱにおけるオンラインフィールドワークの学び—終了後のグループ討議のまとめから—	共著	令和6年1月	日本医療科学大学研究紀要, No. 16. p49-59.	「チーム医療演習Ⅱ」で試みたオンラインフィールドワークにおける学生の記述記録を質的分析を行った結果、167コードが抽出され、【他職種の具体的な業務内容】【他職種の特徴的な役割】【多職種との連携】【全体の評価】に関する4カテゴリーが抽出された。学生は、看護職以外の他職種について知識や理解を深め、多職種連携の必要性を理解していた。しかし、学習目標であるチーム医療における看護師の役割に関する記述が見られず補完する必要がある。（平田礼子, 高野直美, 東泉貴子, 久松佳子）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
看護師のストレスとバーンアウト、生理的尺度との関係	—	令和5年6月	日本看護福祉学会全国学術大会（第36回）	中堅看護師（入社して3年以上）の看護師を対象に唾液中のIgAとストレス尺度（SRS-18）、日本語版バーンアウト尺度（BAT-J）を用いて調査を行った。唾液中のIgAは朝が高く、夕方値が低かった。ストレス尺度とバーンアウト得点の相関分析を行った結果、優位な正の相関がみられた。バーンアウトを予測するには、ストレスを測定することが有意義であることが示された。（佐藤光榮, 小山田路子, 東泉貴子, 久松桂子）

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 高野 直美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
第112回看護師国家試験問題解答・解説 (ISBN978-4-8392-1718-1)	共著	2023年4月	メヂカルフレンド社	分担執筆: 貝瀬友子, 藏谷範子, 小山道子, 清水泰子, 末永弥生, 高野海哉, 高野直美, 土屋守克, 富澤栄子, 博多祐子, 久松佳子, 古村ゆかり, 真野響子, 山崎由美子, 山下留理子. 担当: 午前14「糖尿病の急性合併症」午前15「メタボリックシンドローム」午後78「インスリンの過剰投与」午後2「健康日本21(第二次)」午後3「循環式浴槽の水質汚染」午後41「与薬」午後49「パッチテスト」午後91・92・93「救急外来を受診した患者の看護

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
チーム医療演習Ⅱにおけるオンラインフィールドワークの学び—終了後のグループ討議のまとめから—.	共著	2024年1月	日本医療科学大学研究紀要, No.16. p49-59.	「チーム医療演習Ⅱ」で試みたオンラインフィールドワークにおける学生の記述記録を質的分析を行った結果、167コードが抽出され、【他職種の具体的な業務内容】【他職種の特徴的な役割】【多職種との連携】【全体の評価】に関する4カテゴリが抽出された。学生は、看護職以外の他職種について知識や理解を深め、多職種連携の必要性を理解していた。しかし、学習目標であるチーム医療における看護師の役割に関する記述が見られず補完する必要がある。(共同研究のため本人担当部分抽出不可能) 平田礼子, 高野直美, 東泉貴子, 久松佳子.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
チーム医療演習におけるオンラインフィールドワークの学び	—	2023年8月	第32回日本看護学教育学会学術集会	「チーム医療演習Ⅱ」で試みたオンラインフィールドワークにおける学生の記述記録を質的分析を行った結果、167コードが抽出され、【他職種の具体的な業務内容】【他職種の特徴的な役割】【多職種との連携】【全体の評価】に関する4カテゴリが抽出された。学生は、看護職以外の他職種について知識や理解を深め、多職種連携の必要性を理解していた。しかし、学習目標であるチーム医療における看護師の役割に関する記述が見られず補完する必要がある。(共同研究のため本人担当部分抽出不可能) 共同発表者: 平田礼子, 久松佳子, 高野直美, 東泉貴子.

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 佐藤 和也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
A病院医療観察法病棟の看護師が役割遂行上直面する問題（査読付）	共著	令和6年3月	群馬バース大学紀要, 30, 3-11	本研究の目的は、A病院医療観察法病棟の看護師が役割遂行上直面する問題を明らかにすることである。Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、A病院医療観察法病棟に勤務経験のある看護師56名に質問紙を配布し、49名から回答を得た。その結果、医療観察法病棟の看護師が役割遂行上直面する問題を表す26カテゴリが形成された。共著者：山口洋子、吉野綾子、垣上正裕、小西美里、佐藤和也 本人担当部分：データ分析、考察、執筆を担当した。
医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践（査読付）	共著	令和6年3月	群馬バース大学紀要, 30, 13-22	本研究の目的は、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践を明らかにすることである。Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用し、全国の医療観察法指定入院医療機関に所属する看護師1,012名に質問紙を配布し、317名から回答を得た。その結果、医療観察法入院対象者の主体的なクライシス・プランの活用に向けた看護実践を表す17カテゴリが形成された。共著者：佐藤和也、西川薫 本人担当部分：研究計画の遂行、考察、執筆を担当した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 日下田那美

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
大腸がん患者の術後機能障害 マネジメントに関する国内レ ビュー	-	2024年2月	第38回日本がん看護学会学 術集会	大腸がん患者の術後機能障害マネジメント国内文 献レビューの結果、対象文献は10件で、患者は生 活体験の中で自己流に症状マネジメントしている ことが明らかになった。看護師は、経験によるリ ソースの共有を図ることで、広い視野でのマネジ メントが可能となることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：堀越政孝、安田弘子、日下田那美、 萩原英子

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 廣瀬 文乃

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 看護学生の視座から捉えた助産学生による性のピアエデュケーションの教育的効果の検討（査読付）	共著	2024年1月	日本母性衛生学会 64（4），461-468.	助産学生が看護学生に対し性のピアエデュケーションを実施し、看護学生の視座から教育学的効果の検討を行った。デザインは、質的記述的研究である。助産学生が看護学生に対して行う性のピアエデュケーションは、看護学生の性感染症の予防や避妊に対する認識を高めることに繋がっていた。 共著者：中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬文乃、綿貫真歩
2 就労妊婦のマタニティハラスメント被害を受けての想いと対処（査読付）	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 第29号，35-42.	就労妊婦がマタニティハラスメント被害を受けた際の想いと対処について、インタビュー調査を行い質的機能的に分析した。マタニティハラスメントを受けた就労妊婦は、就労継続に対する嫌悪感を抱えるだけでなく、妊娠継続に対しても否定的な感情を抱く可能性がある事がわかった。 共著者：廣瀬文乃、中島久美子
3 Evaluation of a pregnancy programme to enhance older primiparas' physical and mental health and marital relationships after childbirth: A non-randomized clinical trial（高齢初産婦の心身の健康と産後の夫婦の関係性を高める妊娠期プログラムの評価－非ランダム化比較試験）（査読付）	共著	2023年5月	Nursing Open （Open Access）	高年初産婦の心身の健康と分娩との夫婦関係を強化するための妊娠期プログラムについて、介入群15組、対照群15組を比較検討した。結果、介入群は、対照群と比較して夫婦の関係性が強化され、妻の心身の健康についての理解が得られた。この研究は、妊娠中からのプログラム介入により夫婦関係の向上に寄与することを示唆している。 共著者：中島久美子、廣瀬文乃、行田智子
4 助産学生の視座から捉えた看護学生への性に関するピアエデュケーションの教育的効果の検討（査読付）	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 第29号，3-14.	助産学生が看護学生に対し、性感染症と避妊についての教育をピアエデュケーションの視点から実施し、その教育的評価について検討した。助産学生は、看護学生に対しピアの視点で教育を行うことで、これまでに学習した内容を深め、同じ立場で関わることの大切さを学んでいた。 共著者：中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬文乃、綿貫真歩
5 助産学実習における分部介助シミュレーション教育の検討（査読付）	共著	2024年3月	群馬パース大学紀要 第30号，67-75.	コロナ禍や分娩件数の減少に伴い、助産学実習中に分娩介助シミュレーション教育を導入し、その効果を検討した。助産学実習の中期段階と後期段階にそれぞれ1事例ずつシミュレーション教育を導入し、その前後の臨地実習での分娩介助得点と比較した。また、学生からの意見を求めた。その結果、シミュレーション教育と臨地実習での得点に有意差はなかった。学生からは、分娩介助を振り返る機会になった等の意見があった。 共著者：廣瀬文乃、中島久美子、吉野めぐみ、綿貫真歩

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 A study of midwives' support for couples in Japanese hospitals and clinics during the COVID-19 pandemic (COVID-19パンデミックにおける綿国の病院・診療所での夫婦への助産支援の実態)	-	2023年6月	第33回ICM (33rd International Confederation of Midwives Congress)	コロナ禍での病産院における助産師の夫婦関係に対する支援について調査を行った。コロナ禍において、母親学級や両親学級の縮小に伴い、夫婦支援を行う機会が不足していることがわかった。また、助産師は夫婦関係への支援を行いたいと思っても、それらを学ぶ機会や具体的な実施方法について学ぶ機会が乏しいことがわかった。 共同発表者：中島久美子、廣瀬文乃、吉野めぐみ、行田智子
2 夫婦のパートナーシップを育むために助産師は夫婦をどのように支えていくのか - 産後クライシスの予防に向けた妊娠中からの助産支援を実践しよう -	-	2023年10月	第37回日本助産学会学術集会	コロナ禍での病産院における助産師の夫婦関係支援に対する支援についての調査から、助産師が夫婦に対して実施できる支援方法を交流集会提示した。さらに、参加した助産師間での活用性について話し合いの機会を持った。助産師からは夫婦関係支援に対する前向きな意見が聞かれた。一方で夫を責める事のないような配慮が必要であるといった活用への注意点についても話し合いが行われた。 共同発表者：中島久美子、廣瀬文乃、行田智子
3 妊娠中から夫婦の関係性を高める支援の研修会の実施と評価	-	2023年10月	第37回日本助産学会学術集会	産後の母親の精神的不健康を予防するために、助産師への夫婦支援研修会を開催しプログラムの効果を検討することを目的とした。研修会に参加することにより、助産師は夫婦の関係性を支援する必要性を深め、夫婦が妊娠期から産後の夫婦のリスクを理解し準備するための機会として活用できると考える。今後は、夫婦支援のさらなる拡充と、助産師が各勤務施設で夫婦支援の実践を行い、効果の検討が必要がある。 共同発表者：廣瀬文乃、中島久美子、吉野めぐみ、綿貫真歩、行田智子

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 吉野めぐみ

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
助産学生の視座から捉えた看護学生への性に関するピアエデュケーションの教育的効果の検討（査読付）	共著	2023年3月	群馬バース大学紀要 第29号 pp. 3-13	本研究では、看護学生への性に関するピアエデュケーションを実施した助産学生の学びと自己意識の発達を明らかにし、助産学生の視座から捉えたピアエデュケーションの教育的効果を検討した。助産学生のピアエデュケーターとしての経験は、女性の性に関する自己決定について助産師として支援す津役割を考える経験学習となりうる。またピアエデュケーター同士の仲間意識を育てていく経験は、助産師のアイデンティティ形成の基盤となる態度に繋がる。（分析を担当） 共著者：中島久美子、廣瀬文乃、吉野めぐみ、綿貫真歩
死産に対する看護者の感情-グリーフケアツールの活用-（査読付）	共著	2023年8月	日本助産学会誌 37巻2号 pp. 206-215	本研究では、死産を経験した夫婦に対する看護者の思いや死産の看護について妊娠から産褥期の各期に記入できるグリーフケアツールを試作し、ツールを使用して死産の看護を想起することによる看護者の死産に対する感情を明らかにした。看護者の感情は、【死産の看護に対する使命感】【夫婦や死児への看護に対する困惑】【死産の看護に対する探究心】【チーム医療への期待感】の4つであった。死産の看護をツールに記入することは、看護者が死産の関わりがあった各時期の夫婦や死児に対する思いを再認識し、看護者が実施した看護や看護者自身の感情を振り返る機会となること、また死産の看護への探究につながる。（分析、本文作成） 共著者：吉野めぐみ、中島久美子
看護学生の視座から捉えた助産学生の性のピアエデュケーションの教育的効果の検討（査読付）	共著	2024年1月	母性衛生 64巻4号 pp. 461-468	本研究の目的は、看護学生に対して助産学生が行うリプロダクティブヘルスに関するピアエデュケーションの学びの内容を明らかにし、教育的効果を検討することである。看護学生のピアエデュケーションの学びは【身近に起こる望まない妊娠と性感染症への意識化】と【性の健康問題から自身を守る予防行動】の認識に繋がった。また、【性に関する自己と他者の価値観の尊重と自己責任】と【性に関する良好なパートナーシップの重要性】を認識し、青年期の自己意識の形成に寄与すると考えられた。さらにピアエデュケーションは【看護者の視点で性の健康問題に向き合う】経験となり、【性に関して女性に寄り添う看護】や【性的リスク予防の普及に向けた看護】という看護の役割への認識に繋がった。（分析担当） 共著者：中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬文乃、綿貫真歩

助産学実習における分娩介助シミュレーション実習の学習効果の検討（査読付）	共著	2024年3月	群馬パース大学紀要第30号 pp. 67-75	近年の日本の少子化により助産学生が実習にて分娩介助の経験数が減少してきている。本研究では、助産学実習中に学内にて分娩介助シミュレーション実習を実施し、助産診断・技術の評価と学生の学びの内容から学習効果を検討した。その結果、学内にて中期から後期段階にシミュレーション実習を行うことにより分娩介助技術や診断力に繋がっていた。学内において実施する分娩介助シミュレーション実習は、学生の分娩介助評価得点の分析からその時期に応じた臨地実習の保管になる可能性が示唆された。（分析を担当） 共著者：廣瀬文乃、中島久美子、吉野めぐみ、綿貫真歩
--------------------------------------	----	---------	-------------------------	--

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
8 A study of midwives' support for couples in Japanese hospitals and clinics during the COVID-19 pandemic	—	2023年6月12日	33rd ICM Triennial Congress	近年の日本は、核家族化や出生率の低下が進んでおり夫婦の親密性を高めるための助産師の支援が重要となってくる。COVID-19の流行により、助産師は夫婦へのサポートを十分に行うことができていない。本研究では、COVID-19パンデミック時の病院や診療所における、妊娠した夫婦への保健指導、集団教育、助産師によるサポートの実態を明らかにした。COVID-19の影響により、指導頻度や規模の縮小、ウェブや動画、電話などの指導方法の変更がみられ、80%以上が夫婦へのサポートに影響があった。妊娠中の夫婦関係に対する支援を助産師が行っていくことが非常に重要である。 （分析を担当） 共同発表者：中島久美子、廣瀬文乃、吉野めぐみ、行田智子
9 妊娠中から夫婦の関係性を高める支援の研修会の実施と評価	—	2023年10月9日	第37回日本助産学会学術集会	近年の日本では、核家族の増加や身近な子育て支援者の不足から母親が精神的不健康に陥りやすい。そのため、夫婦の関係性と産後の心身の健康を高めるための、夫婦の関係性支援プログラムの実践が助産師に求められている。本研究の目的は、助産師への夫婦支援研修会を開催しプログラムの効果を検討することである。助産師が研修会に参加することにより、夫婦の関係性を支援する必要性を深めていた。また、助産師が実施する夫婦支援は、夫婦が妊娠期から産後の夫婦間のリスクを理解し準備するための機会として活用できると考える。今後は、夫婦支援のさらなる拡充に向け、助産師が各勤務施設で夫婦支援の実践を行い、その効果について検討していく必要がある。（分析を担当） 共同発表者：廣瀬文乃、中島久美子、吉野めぐみ、綿貫真歩、行田智子

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 森田綾子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 看護学実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動の解明（修士論文）	単著	2023年9月	群馬県立県民健康科学大学大学院	実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を明らかにし、その特徴を考察することを目的とし、Berelson, B. の方法論を参考にした看護教育学における内容分析を適用した。全国の看護基礎教育機関に所属し実習を担当している教員798名を対象に、郵送法による質問紙を配布し、回答した270名の記述を、意味内容の類似性に基づき分類しカテゴリ化した。結果は、実習中に目標達成度を学生に伝達するための教授活動を表す38カテゴリが形成され、考察により7の特徴を示した。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 基礎看護学領域

氏名

佐藤美保

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
COVID-19流行下の基礎看護実習の取り組みと課題-基礎看護実習 I における学生の自己評価から-	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 第29号 pp53-65	<p>COVID-19流行下の基礎看護実習の取り組みと2020年度の学生の自己評価を2019年度と比較し、学習成果や課題について検討した。</p> <p>1) 2020年度の自己評価点は77.09±8.13 (mean±SD) 点、2019年度の79.92±10.16 (mean±SD) 点に比し低かった。</p> <p>2) 2020年度の学生の自由記述では「観察する」124記録単位 (43.8%) で全記録単位の約半数を占めていた。最も少なかったのは「説明する」15記録単位 (5.3%) であった。「観察する」「知る」ことはできたが、事前学習と結びつけることやイメージができず、学びが深まらないなど「理解する」という思考の発展には至らなかった。学生は実際の医療環境に身を置き、体験することで学びが深まる。よって、短時間でも臨地で学ぶことができるように実習環境を調整することが重要である。さらにインターネットやVRなど学習ツールを取り入れながら、双方向的なコミュニケーションができるシステムを構築することが今後の課題である。(共同研究につき、本人担当分抽出不可能)</p> <p>共著者：上星浩子、長嶺めぐみ、萩原一美、佐藤晶子、星野健、佐藤美保、堀込由紀</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 林恵

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
2 医療的ケア児の児童発達支援または保育所等の利用開始に向けた訪問看護実践(査読付き)	共著	2023年7月	日本看護科学会誌 No43. P99-108	本研究は、未就学の医療的ケア児の通所利用開始に向けた訪問看護実践を明らかにすることを目的とした。小児訪問看護の熟練看護師に半構造化面接を実施し、Berelson, B. の内容分析の方法を参考に分析した。研究対象者は10人の訪問看護師であり、15コアカテゴリが形成された。子どもの将来を思慮しつつ親による通所利用の意思決定を支援し、申請手続きを見守りながら通所利用による変化を予測した看護の必要性が示唆された。修士論文の内容を投稿論文にしたものである。共著者：林恵、飯田苗恵、横山京子 担当：研究計画、調査、分析、論文作成等の全ての過程（筆頭論文）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 伊藤順子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
「看護師の暗黙知に関する文献検討」（査読付）	共著	2023年9月	群馬パース大学紀要. 1880-2923, 28号, Page27-34, 2023.	先行文献を通して、看護師が言語化できない暗黙知に関する研究の動向を知り、暗黙知の具現化への参考資料とする目的で文献検討した。（主たる研究遂行者）共著者：伊藤順子, 上星浩子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
摂食嚥下支援チームと誤嚥性肺炎予防の取り組み	—	2023年9月	群馬県央摂食嚥下研究会, 高崎市民活動センター「ソシアス」.	群馬大学医学部付属病院 摂食・嚥下障害看護認定看護師 武藤満理子氏のご講演の座長を務めた。本研究会は医師、歯科医師、看護師、栄養士、言語聴覚士、理学療法士、作業療法士、歯科衛生士、薬剤師、ケアマネージャーなど多職種と協働して県央地区の摂食嚥下ケアの向上を図るものである。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学部看護学科 氏名

綿貫真歩

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 助産学生の視座から捉えた看護学生への性に関するピアエデュケーションの教育的効果の検討（査読付）	共著	2023年3月	群馬パース大学紀要 Vol. 29 pp3-13	ピアエデュケーションの経験を通じた助産学生の学びと自己意識の発達を明らかにした。自身のピア活動の経験を振り返ることで今後の学習に展開できる抽象的な概念化に繋がった。ピア活動による仲間教育は助産師のアイデンティティ形成の基盤となる態度に繋がった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：中島久美子、廣瀬文乃、吉野めぐみ、綿貫真歩
看護学生の視座から捉えた助産学生による性のピアエデュケーションの教育的効果の検討（査読付）	共著	2024年1月	母性衛生 Vol. 64 No. 4 pp461-468	看護学生を対象に助産学生によるピアエデュケーションの学びの内容を明らかにし、教育的効果を検討した。ピアエデュケーションの学びは性に関する意識や予防行動の認識、青年期の自己意識の形成に寄与すると示唆された。また、看護の役割への認識にも繋がった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 中島久美子、吉野めぐみ、廣瀬文乃、綿貫真歩
助産学実習における分娩介助シミュレーション実習の学習効果の検討（査読付）	共著	2024年3月	群馬パース大学紀要 Vol. 30 pp67-75	助産学生を対象に助産実習中のシミュレーション実習の学習効果を検討した。シミュレーション実習は助産診断や技術の習得に繋がり、臨地実習の補完となる学習であった。今後の課題は、よりリアリティを高め、産婦の状況に合わせた対応を取り、分娩満足度を向上できるように図る。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 廣瀬文乃、中島久美子、吉野めぐみ、綿貫真歩

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 妊娠中から夫婦の関係性を高める支援の研修会の実施と評価	—	2023年10月	第37回日本助産学会学術集会	病産院・助産所の助産師による夫婦の関係性支援プログラムの実践により介入効果を検討した。研修会参加により、助産師は夫婦の関係性を支援する必要性を深めていた。助産師が行う夫婦支援は、夫婦が妊娠期から産後の夫婦のリスクを理解し準備するための機会として活用できると考える。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 廣瀬文乃、中島久美子、吉野めぐみ、綿貫真歩

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 看護学科 氏名 林 真由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 腎代替療法選択の共同意思決定における看護師の役割遂行の認識に影響する因子に関する研究	—	2023年12月	第43回日本看護科学学会	腎代替療法選択の共同意思決定における看護師の役割遂行の認識に影響する因子を明らかにすることを目的とした。認識に影響する因子として、腎代替療法選択外来の設置、患者と十分に話し合う時間の確保、看護師が共同意思決定を学ぶ機会の確保、医師と看護師の情報共有の4項目が示唆された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不能) 共同研究者：矢島正榮、齋藤基、上星浩子

研究活動の記録 (2023年4月～2024年3月)

所属 理学療法学科

氏名

佐藤 満

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
なし				

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. Evaluation of hallux valgus using rotational moment of midfoot measured by a three-dimensional foot scanner: a cross-sectional observational study. (3次元足スキャナで測定した中足の回転モーメントを用いた外反母趾の評価:断面観察研究)(査読付)	共著	2023年6月	Advanced Biomedical Engineering, 30, 154-162	新たに開発した3次元足部スキャナで中足部回転モーメント (RMM) を算出する方法を確立し、外反母趾の特徴を明らかにすることを目的とした。スマートフォンを用いて592名の参加者の足部を撮影し部位別に分析した。RMM平均値は男性12.3 Nm、女性9.4 Nmであった。中足部が回内すると、舟状骨内転と骨軸距離の増加により、回転モーメントと中足部への負荷が増加した。RMMと舟状骨モーメントアームの増加は第1中足骨の回内と回転を引き起こし、舟状骨に加えらるる回転モーメントは、隣接する内側楔形骨と中間楔形骨に影響を及ぼした。(研究企画と原稿校閲を担当) 共著者: Yamashita T, Yamashita K, <u>Sato M</u> , ほか
2. Valid Indicators for Predicting Falls in Community-Dwelling Older Adults Under Ongoing Exercise Intervention to Prevent Care Requirement (介護予防の継続的運動介入を受けている地域在住高齢者における転倒を予測するための有効な指標)(査読付)	共著	2024年1月	Gerontology and Geriatric Medicine Vol.10 No.233372 14241229328 pp1-8	運動プログラムを継続している要介護の地域在住高齢者124名を対象に、いくつかの身体的・認知的指標を用いて転倒リスクを評価した。ロジスティック回帰分析により12か月間運動を継続できた87名の参加者の転倒関連因子を決定した。足底触覚閾値(PTT)は転倒者で有意に高く、最も強い転倒予測因子であった。PTTは継続的身体運動介入に参加する高齢者の転倒予測因子であり、既存の転倒リスク評価戦略の有用性を補強する可能性が示唆された。(研究企画、データ収集処理、原稿を担当) (筆頭論文) 共著者: <u>Sato M</u> , Yamashita T, Okazaki D, Asada H, Yamashita K
3. Improvement of postural control in the frail older adults through foot care: A pre- and post-intervention study (フットケアによる虚弱高齢者の姿勢制御の改善: 介入前後比較研究)(査読付)	共著	2024年2月	Medical Engineering & Physics, 125. 104115. 1-6.	虚弱高齢者の姿勢制御に対するフットケアの効果を調べることを目的とした。48人の参加者が5か月間フットケア介入を受け、測定はその介入前後に行った。その結果、フットケアにより静的立位時のつま先接地面積が1.3倍に大幅に増加し、前後方向の動きの制御が改善された。姿勢制御の強化は、フットケアによって皮膚の状態が改善し、測定機械的刺激受容器の入力が強化され、姿勢制御の出力が改善されたことから生じた。積極的なフットケアで高齢者骨折リスクを軽減できる可能性を強調している。(研究企画と原稿校閲担当)。共著者: Yamashita T, Yamashita K, <u>Sato M</u> , 他

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 高齢者の転倒予測における足底触覚閾値の有用性	-	2023年5月	第62回日本生体医工学会	足底面の触覚閾値検査の値は介護を要する高齢者の1年後までの転倒を予測するファクターとして有用であることを示した。(共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: <u>佐藤満</u> , 山下和彦, 山下知子
2. 高齢者の足部骨格計測システムの開発と歩行によるアルツハイマー病予防	-	2023年5月	第62回日本生体医工学会	スマートフォン画像から足部骨格の評価システムを開発し、2000人を対象に変形性膝関節症リスクを評価して有用性を確認した。(共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: 山下和彦, 山下知子, <u>佐藤満</u>
3. 小学生の足部骨格3D計測による外反母趾の発生メカニズム	-	2023年5月	第62回日本生体医工学会	足部骨格3D計測システムを開発し、小学生124人の成長に伴う骨格変化評価して有用性を確認した。(共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: 山下知子, 山下和彦, <u>佐藤満</u> , 阿多信吾
4. Effect of COVID-19 on the activity level of elderly people with dementia (認知症高齢者の活動レベルへのCOVID-19の影響)	-	2023年7月	45th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine & Biology Society	ICTベースの歩数監視システムを開発し、COVID-19の流行前から流行中の認知症の13人の歩数の変化を調査し、外出頻度の大幅な減少等を明らかにし、有用性を示した。(共同研究につき担当部分抽出不可能) 共同発表者: Yamashita T, Yamashita K, <u>Sato M</u> , 他

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名 木村 朗

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1 理学療法概論テキスト第4版	共著	2023年4月	南江堂	全228頁，編集：細田多穂，分担執筆：木村朗他13名。担当：第7章「地域包括ケア」（86頁～88頁）。保健分野、地域包括ケアにおける理学療法士の役割について記述した。「地域における理学療法とは？」「地域における理学療法士の活動とは？」の疑問に対し、平易な表現、具体的な説明を用い、実際のフィールド現場の様子も含め、理学療法士を目指す学生に必要な情報を示した。今改訂では各種統計数値のアップデート、法制度の改定に伴う内容を記述した。
2 運動療法学 総論第5版	共著	2023年4月	医学書院	全228頁，編集：吉尾正春他，分担執筆：木村朗他13名。担当：第7章「運動と代謝」（128頁～137頁）。第7章では、代謝機能と運動の関係について最新知見を加えて運動と代謝の生体機能を記述した。身体活動時の呼吸、循環、代謝機能の改善をはかるために必要な知識を記述した。特にインスリンが関与しない運動に伴う代謝の作用の記述を加え、糖尿病の運動療法の基礎となる、運動と代謝基質、運動強度と血糖値の関係の詳細し、運動とインスリン分泌の機序について述べた。概要図を前版より整理した。
3 やさしい疫学第4版	共著	2024年3月	南江堂	全228頁，編集：日本疫学学会，尾島俊之他、分担執筆：木村朗他23名。担当：第7章「ランダム化比較対照試験」（97頁～112頁）「疫学専門家練習問題」。臨床試験、ランダム化比較対照試験について記述した。厳密に盲検化ができない性質の事象に対する比較対照試験のためにクラスターランダム化比較試験について原理を示した。そのほかITTや臨床治験におけるプロトコルに関するコラム、医師国家試験に出題されたランダム化比較試験に関する問題の解法を記述した。
4 公衆衛生学	共著	2024年3月	メジカルビュー	全228頁，編集：浅川康吉，分担執筆：木村朗他20名。担当：第1章「公衆衛生とは」（2頁～10頁、「民間における公衆衛生サービス」131頁～141頁）。公衆衛生の定義、公衆衛生活動と公衆衛生学の歴史、理学療法と公衆衛生活動の関連の歴史について記述した。また、2022年時点における民間サービスを取り上げ解説した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 通電信号の知覚認識過程における失明時期の違いが情報の正誤判断の許容誤差に及ぼす皮膚インピーダンスへの影響について	単著	2023年7月	SIG Technical Reports研究報告 アクセシビリティ22(7),pp1-5.	失明者が衝突を避けるためのセンサーと通電信号を用いた装置の効果を検証した。先天性と後天性失明者の間で、通電信号が人の接近判断に与える影響と、それに伴う皮膚インピーダンスの違いを調査した。実験では超音波センサーを使用し、条件を設定してフィールド実験を行い、結果、先天性失明者と後天性失明者の間で有意な違いが見られた。
2 The Relationship Between Living Environment Information and Vascular Health in the Elderly Population of Ogimi Village(大宜味村高齢者における生活環境情報と血管の健康との関連について)(査読付)※	単著	2024年3月	JJPHPT,No10,2. ISSN2189-5899.pp6-10.	沖縄県大宜味村の高齢者を対象に生活環境特にWalk Scoreと血管の健康の関係を調査した。この村では所得が低いにもかかわらず長寿が目立ち、従来の研究と異なり、Walk Scoreと健康の関連性に違いが見られた。85歳以上の20人を対象に行われ、Walk Scoreに基づくクラスターで血管の健康指標を分析した結果、Walk Scoreが健康行動には影響するものの、血管の健康については有意な影響を示さなかった。地域ごとに健康への影響が異なることが示唆された。
3 The Influence of Physical Therapy Content on the Image of Physical Therapy among First-Time Students of Physical Therapy in Japan(理学療法初学者の理学療法イメージに及ぼす理学療法コンテンツの影響について)(査読付)※	単著	2024年3月	JJPHPT,No10,2. ISSN2189-5899.pp1-5.	理学療法学科入学生に対して臨床判断を伴う理学療法行為の動画を提示することが、彼らの理学療法経験の有無と関連して、動作と回復の共起表現頻度にどのような影響を与えるかを調査した。具体的には、動画が理学療法学科入学生の理学療法の実践に対する理解やその後の回復過程の表現にどう影響を与えるかを検討した。
4 Effects of Computational Statistics Exercises on Health Sciences College Students' Understanding of Biomedical statistics(計算統計学演習が保健医療系大学生の生物医学統計学の理解に及ぼす影響)(査読付)※	単著	2024年3月	JJPHPT,No10,1. ISSN2189-5899.pp1-6.	医療系大学生でノートパソコンを使った計算機統計の演習が、生物医療統計の基礎である多変量解析の概念を手計算に近い形で体験できるか検証した。保健科学部の学部生を対象に10年間の授業で実施し、RとRGを使用してアンケートを通じて評価した。結果、学生の98%がコンピュータ統計の有用性を認識し、深い理解が得られることが示された。1-6
5 Rehabilitation contributes to lower readmission rates for individuals with peripheral arterial disease: A retrospective observational study(リハビリテーションは末梢動脈疾患患者の再入院率の低下に寄与する: 後方視的観察研究)(査読付)※	共著	2023年4月	Ann Phys Rehabil Med.2023 Oct;66(7):10176 8.ePublishing, no Pages.	周辺動脈疾患(PAD)患者のリハビリテーションの影響を、JMDC病院データベースの回顧的分析で検証した。2014年から2020年の間にPADで入院した20歳以上の二つのグループのデータを対象に、リハビリテーションを受けたかどうかで分けた。リハビリテーション群は、初回入院後30日、60日、90日、180日の再入院率が有意に低かったことが示された。この大規模な研究は、PAD治療の一環としてリハビリテーションの介入の必要を支持した。 (疫学研究方法、全体の考察を担当) 共著者：.Keisuke Suzuki , Tomohiko Kamo , Ryo Momosaki , Akira Kimura , Takayasu Koike , Shinichi Watanabe , Takashi Kondo .

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
6 Arduinoを用いた筋電情報と低周波刺激装置による高齢片麻痺者の麻痺側の動作生成至適条件に関する研究（査読付）※	共著	2023年8月	SIG Technical Reports(研究報告アクセシビリティ22(3),pp1-6.	健常者11名と片麻痺者10名を対象に、手関節の最大背屈角度、疼痛、および汎用性インデックスをアウトカムとして、異なる周波数条件での反応を比較した。結果、35Hz条件では背屈角度が低下し、120Hz条件では疼痛が増加が示された。また、片麻痺者では、35Hz条件で汎用性インデックスが最大の者が少なく、周波数による反応性が異なることが観察された。これにより、脳卒中片麻痺患者の生活期において、麻痺肢の使用状況を考慮した周波数設定が重要であることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当分抽出不可能) 共著者：田辺将也、木村 朗.
7 Time to reach maximum grip strength to discriminate incident frequency before discharge in Japanese convalescent wards(療養病棟における退院前の事故頻度を判別するための最大握力到達時間)（査読付）※	共著	2024年3月	JJPHPT,No10,2,ISSN2189-5899,pp11-18.	日本の国民皆保険制度下での回復期リハビリテーション病棟での研究として、握力の時間経過と離床後の転倒事故頻度の関係を調査した。研究は200床の病棟で行われ、入院後1週間以内に入院した成人患者を対象にした。結果から、握力達成時間がインシデント発生の予測指標として有用であり、女性の方が男性よりも早く最大握力に達することが示された。 (研究の計画、全体の考察を担当) 共著者：.Itsuki Takada,Akira Kimura..

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等	概要
1 コホート研究	単著	2023年 4月	理学療法ジャーナル Vol. 57 No. 4 2023. pp. 465-468. 医学書院	臨床研究のスズメ—エビデンスを創るう 4 コホート研究を執筆。 コホート研究は、特定の集団（コホート）を長期間にわたって観察し、その集団のメンバーに共通する特性や要因が健康や疾病の発生にどのように影響するかを調査する研究デザインであることを解説した。研究の開始時点で、参加者たちが特定の特性、年齢、性別、職業などを共有していることが特徴であることを述べている。
2 Association of ACE Gene Polymorphism with Atherosclerosis Progression and Duration of Independent Living in the Elderly(ACE遺伝子多型と動脈硬化の進行および高齢者の自立生活期間との関連性)	—	2023年5月	第91回欧州動脈硬化学会	沖縄県大宜味村在住の85歳以上の高齢の人々においてACE遺伝子多型と高齢者における動脈硬化進行と独立生活の期間との関連性を探った。ACE遺伝子の特定の多型が高齢者における動脈硬化の進行速度には関連性を認めたが、自律生活の持続期間との関連性は認められなかったことを報告した。
3 MUSCLE STRENGTH-RELATED INDEXES EFFECTIVE IN EXTENDING THE DURATION OF ADL INDEPENDENCE IN THE VERY OLDER AGE GROUP (超高齢者におけるADL自立期間の延長に有効な筋力関連指標)	—	2023年6月	2023年国際理学療法会議	沖縄県大宜味村在住の85歳以上の高齢の人々において、日常生活動作（ADL）の独立を延ばすのに効果的な筋力関連指標を調査した。握力の大きさは、性別と独立して健康寿命の長さとも相関を認めた。
4 婦恋村農業従事者の健康リテラシーと動脈硬化リスクとの関連性に基づく健康教育課題	—	2023年9月	日本公衆衛生学会	婦恋村の農業従事者における健康リテラシーと動脈硬化リスクとの関連性に焦点を当て、約300名中47名の女性会員に調査を行った。農業従事者の健康に関する知識や理解度が、動脈硬化リスクに対して40歳未満と以上で群化した場合、若い群のリテラシーが低下していたことを報告した。 (研究計画、実施の指揮、データ分析、考察を担当)
5 公衆衛生と理学療法の接点	—	2023年10月	第39回東海北陸理学療法学会	特別講演およびシンポジスト（木村 朗）

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌等	概 要
5 逆確率重みづけ法を用いた明治大正期の幕内相撲力士の寿命における番付の影響	—	2024年2月	日本疫学学会	逆確率重みづけ法を用いて明治から大正期の幕内相撲力士の寿命における番付の影響を調査した。研究では、力士の番付が寿命にどのような影響を与えるかを統計的に分析し、その結果、明治大正期の幕内相撲力士の寿命は格付けとの関連性が低いことを報告した。
6 臨床判断を伴う理学療法行為の動画の提示は理学療法学科入学生において理学療法経験の有無と関連して動作と回復の共起表現頻度に影響をもたらすか	—	2023年12月	日本理学療法教育学会	理学療法学科入学生に対して臨床判断を伴う理学療法行為の動画を提示することが、彼らの理学療法経験の有無と関連して、動作と回復の共起表現頻度にどのような影響を与えるかを調査した。具体的には、動画が理学療法学科入学生の理学療法の実践に対する理解やその後の回復過程の表現にどう影響を与えるかを検討した。
7 Identification of brain activity sites in blind people during successful interpersonal collision avoidance by signal energization using maximum frequency coherence variation (最大周波数コヒーレンス変動を用いた信号通電による全盲者の対人衝突回避成功時の脳活動部位の同定)	—	2023年10月	アメリカリハビリテーション医学会議	失明者が他者との衝突を避ける際の脳活動の場所を特定しました。信号のエネルギー化と最大周波数の一貫性変動を使用して、彼らが衝突を回避する過程でどの脳領域が活発化するかを明らかにしました。これにより、失明者の空間認識や行動制御における脳の機能的なメカニズムを理解する一助となる知見が得られた。(英語)
8 Determination of Optimal Conditions for Neuroprosthetic Functional Electrical Stimulation Therapy to Produce Wrist Dorsiflexion Movements Using the Versatility Index (汎用性指標を用いた手関節背屈運動を誘発する神経補填的機能的電気刺激療法の最適条件の決定)	—	2023年10月	アメリカリハビリテーション医学会議	神経補填的機能的電気刺激療法において、手首の背屈運動を生じさせるための最適条件を「Versatility Index (多用途指数)」を用いて決定することを目的としています。Versatility Index は、療法が目的の運動パターンをどれだけ効果的に引き起こすかを評価する指標です。この研究は、神経補填的技術の進展と患者の日常生活の質向上に寄与する可能性があることを報告した。 (共同研究につき、本人担当分抽出不可能) 共著者：Masaya Tanabe, Akira Kimura.

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名 鈴木 学

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
A大学リハビリテーション学部におけるアルバイト時間とGPAによる成績との関連	—	2023年10月	第42回関東甲信越ブロック理学療法学会	A大学リハビリテーション学部200名に対しアルバイト時間とGPAとの関連を検討した。試験前1週間のアルバイトの有無によるGPA得点は両者ともに有意差はみられず、アルバイト時GPA間との間には有意な相関はみられなかった。 (共同研究につき本人担当部分の抽出不可能) 共同発表者：瀬戸清楓、鈴木学
医療系大学生におけるリュックサックの通学における使用状況と腰部への影響との関連について	—	2023年10月	第42回関東甲信越ブロック理学療法学会	A大学理学療法学科の28名に対して腰痛とリュックサックの重量と肩ベルトの長さとの関係について検討した。腰痛の程度とリュックサックの重量および肩ベルトの長さおよその間には正の相関を示したが、有意差はみられず、両者の間には関係がないことが示唆された。 (共同研究につき本人担当部分の抽出不可能) 共同発表者：渡辺沙祐未、鈴木学

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名

目黒 力

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
生活環境学テキスト 改訂 第二版	共著	2023年4月	南江堂	編集:村田伸,岡本加奈子,北島栄二 著者:村田伸,小谷泉北島栄二,白岩加代子, 林悦子,徳田良英,佐藤三矢,山野薫,中原雅 美,島ノ江寿,山田隆人,幅田智也,前岡浩,相 馬正之,岡本加奈子,目黒力 担当:15章まちづくり(pp.175-187) リハビリテーション医療と都市・交通、道 路、外出行動と徒歩交通、様々な公共交通 機関

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所,発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名

富田 浩

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
人間発達学	共著	令和5年10月	診断と治療社	編集：笹田哲，分担執筆：有川真弓，井口知也，石附智奈美，奥村智人，富田浩，他 担当：第2章（pp100-107） 原始反射・姿勢反射（反応）について，各 反射（反応）の刺激方法と応答，出現およ び消失時期について図を含めて解説

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名 岡崎大資

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Valid Indicators for Predicting Falls in Community-Dwelling Older Adults Under Ongoing Exercise Intervention to Prevent Care Requirement. (介護予防の継続的運動介入を受けている地域在住高齢者における転倒を予測するための有効な指標) (査読付)	共著	2024年1月	Gerontology and Geriatric Medicine Vol.10 No. 233372 14241229328 pp1-8	運動プログラムを継続している要介護の地域在住高齢者124名を対象に、いくつかの身体的・認知的指標を用いて転倒リスクを評価した。ロジスティック回帰分析により12カ月間運動を継続できた87名の参加者の転倒関連因子を決定した。足底触覚閾値(PTT)は転倒者で有意に高く、最も強い転倒予測因子であった。PTTは継続的身体運動介入に参加する高齢者の転倒予測因子であり、既存の転倒リスク評価戦略の有用性を補強する可能性が示唆された。(初稿・再稿の校閲を担当) 共著者：Sato M, Yamashita T, <u>Okazaki D</u> , Asada H, Yamashita K

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
急性大動脈解離を発症した高度肥満症例に対する運動耐容能の向上及び減量を目的とした行動分析的介入	-	2023年6月	第60回日本リハビリテーション医学会学術集会	急性大動脈解離後に運動耐容能が低下した高度肥満症例に対して、運動頻度向上と減量を目的とした行動分析的介入を行った。第1介入期から第3介入期にかけて先行刺激と後続刺激を変更しつつ介入した結果、NYHA分類はIV度からII度、6MWTは190mから432m、体重は155kgから145kgとなり、日常生活動作は問題なく可能となった。また、ロフトストランドクラッチを使用して自宅退院可能となった。 (共同研究のため担当部分抽出不可能) 佐藤雅浩 <u>岡崎大資</u> 芝篤志 倉田浩充 八木康公

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科

氏名

宗宮 真

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 神経筋疾患におけるリハビリテーション医学・医療の継承と革新 パーキンソン病のリハビリテーション治療	—	令和5年11月	第7回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会	パーキンソン病のリハビリテーション治療において、歩行や嚥下などに対して実際に行われている手技とその効果・機序について、著者らの論文報告とともに、文献的な考察を加え報告した。また、近年注目されている反復経頭蓋磁気刺激 (rTMS) や経頭蓋直流電気刺激 (tDCS) などの非侵襲的脳刺激療法を用いたニューロリハビリテーションの効果についても報告した。(文献検討・考察) 中雄裕美子、宗宮 真、和田直樹

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科

氏名

浅田 春美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Valid Indicators for Predicting Falls in Community-Dwelling Older Adults Under Ongoing Exercise Intervention to Prevent Care Requirement. (介護予防の継続的運動介入を受けている地域在住高齢者における転倒を予測するための有効な指標) (査読付)	共著	2024年1月	Gerontology and Geriatric Medicine Vol.10 No.233372 14241229328 pp1-8	運動プログラムを継続している要介護の地域在住高齢者124名を対象に、いくつかの身体的・認知的指標を用いて転倒リスクを評価した。ロジスティック回帰分析により12カ月間運動を継続できた87名の参加者の転倒関連因子を決定した。足底触覚閾値(PTT)は転倒者で有意に高く、最も強い転倒予測因子であった。PTTは継続的身体運動介入に参加する高齢者の転倒予測因子であり、既存の転倒リスク評価戦略の有用性を補強する可能性が示唆された。(初稿・再稿の校閲を担当) 共著者：Sato M, Yamashita T, Okazaki D, Asada H, Yamashita K

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科

氏名

城下 貴司

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. Relationship between the y-balance test and dorsiflexion range of motion: Differences between stretching and mobilization with movement(査読付)	-	2023年6月	World Physiotherapy Congress 2023	Yバランステストと足関節ストレッチングと足関節のモビライゼーションとの4週間の縦断研究を行った。足関節背屈可動域がYバランステストの前方方向との関係性が深いという報告がある。本研究では足関節ストレッチングでは背屈可動域が広がる傾向を示したが、Yバランステストの前方方向はむしろ低下した。一方で、足関節のモビライゼーション介入群ではYバランステストの後外側方向が有意に向上し、先行研究とは異なる結果となった。バランス戦略はさまざまな要素が関与している。短絡的に可動域だけでバランス戦略を理解することの危険性を示した(家庭事情により渡航キャンセル) 発表者：城下貴司

研究活動の記録 (2023年4月～2024年3月)

所属 理学療法学科

氏名

洞口貴弘

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
<p>Purposeful activity-based electrical stimulation therapy promoted adaptability to daily life for a patient with moderate/severe upper extremity paralysis after a chronic stroke: a case report (合目的的活動に伴う電気刺激療法が慢性脳卒中後の中等度/重度の上肢麻痺患者における日常生活適応性の向上を促進した事例報告) (査読付)</p>	共著	令和5年12月 2023/12	Cognition Rehabilitation 4(1) : 54-58	<p>合目的電気刺激療法 (PA-EST) プログラムを行い、慢性脳卒中後の重度片麻痺患者の運動機能と脳の血行動態が改善されるかを検討した。その結果、手首の動作中の酸素化ヘモグロビン濃度が増加し、適応能力が向上することが示され、本プログラムにより運動機能だけでなく脳の活性化も生じることがわかった。 (実験、fNIRSの解析、考察) 共著者 : Minami, S., Kobayashi, R., Horaguchi, T., Kondo, K., Ishimori, T., Aoki, H., Fukumoto, Y., Sano, N., Shinoda, A., Hashimoto, K. and Aoyama, T..</p>
<p>Change in H-reflex amplitude associated with cognitive load. (認知負荷に伴い変化する下腿三頭筋から導出したH波振り幅) (査読付)</p>	共著	令和5年12月 2023/12	Cognition Rehabilitation 4(1) : 44-49	<p>認知負荷に伴う脊髄機能の変化を評価するため、左右視野に呈示される視覚刺激に対して左右のボタンで応答する選択反応課題と、左右に呈示される一桁の数字のどちらが大きいかを左右のボタンで応答する数値比較課題遂行中の右下腿三頭筋H波振り幅の違いを計測した。その結果、反応時間は選択反応時間課題、数値比較課題のうち二つの数字の差が大きい場合、二つの数字の差が小さい場合の順に長くなった。またそれに伴い、H波の振り幅も大きくなった。このことから、脳活動の活発化が脊髄機能に影響を及ぼすことが明らかとなった。 (解析、全体の考察、草案の修正、全体的な改訂・執筆を担当) (筆頭著者と同等の貢献 Equally-contributed, 責任著者) 共著者 : Fujiwara-Ohya, M., Horaguchi, T. and Minami, S.</p>
<p>記憶・学習研究のツールとしての眼球運動と眼球運動課題 (査読無)</p>	単著	令和6年3月 2024/3	バイオメカニズム学会誌 48(1) : 28-35	<p>眼球運動を研究することは、静止時および運動時に視覚を安定的に保つことに重要であり、過去の研究から眼球運動制御機構は詳細に調べられてきた。また眼球運動の正確性や制御機構が詳細に調べられてきた背景から、眼球運動は特に空間記憶に基づいた運動を調べるツールとしても用いられている。本論文では著者の行ってきた眼球運動を用いた運動学習の研究を背景に、その有用性を解説した。 (実験、解析、考察、執筆を担当) (筆頭著者、責任著者) 共著者 : Horaguchi, T.</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
学会発表(国際学会) The unconscious selection bias in temporal order judgment task with tactile stimulation after presentation of numbers. (数字呈示後の触覚を用いた時間順序判断基準課題における無意識な選択バイアス)(査読付)	-	令和5年 2023/11	The Society for Neuroscience Washington DC, USA	数字呈示後に、左右人差し指に時間差をおいて1回ずつ触覚刺激を与え、どちらが先に刺激されたかを左右人差し指の下に設置したボタン押しで答えてもらうという、時間順序課題における正答率を検討した。また事前のアンケートにより、右手から指折り数える者(R-starter)と左手から数える者(L-starter)とに被験者を分類した。 その結果、R-starterとL-starterでは、特に判断が難しいと考えられる5 msおよび15 msの時間差における右手が先に刺激された時の反応について差がみられた。この場合、いずれの被験者においても右手が先に刺激されたと判断する傾向が高かった。そしてR-starterでは事前に大きな数字が、L-starterでは事前に小さな数字が呈示されていた場合にこの傾向が高かった。 本研究から、数字を指折り数え始める習慣に伴い、呈示される数字の大小によって注意が向く方向が変わる可能性が示唆された (実験、解析、全体の考察、執筆を担当)(筆頭論文) 共著者：Horaguchi, T
Rehabilitation Program for severely hemiparetic upper limb in chronic stroke survivors: A Case Study. (重度の片麻痺を持つ慢性脳卒中後の上肢リハビリテーションプログラム)(査読付)	-	令和5年 2023/11	The Society for Neuroscience Washington DC, USA	慢性脳卒中サバイバーの重度片麻痺上肢のリハビリは困難であり、これに対処するためわれわれは合目的電気刺激療法(PA-EST)プログラムを開発してきた。本研究では、PA-ESTによる脳の血行動態(fNIRSで測定)と運動機能の改善について調査した。 右片麻痺の57歳男性が3か月間PA-ESTに参加。運動機能はFMA、目標達成はGAS、脳機能はfNIRSで評価した。手と手首の動作中の酸素化ヘモグロビン濃度変化を分析した。 その結果、PA-EST後、FMAおよびGAS-Lightのスコアが向上し、運動機能と適応能力が改善が見られた。またfNIRSの結果から、両側手掌領域の酸素化ヘモグロビン値が増加した。 本研究から、PA-ESTプログラムは慢性脳卒中の重度上肢麻痺の運動機能と脳の血行動態にポジティブな影響を与える可能性が示唆された。 (実験、解析を担当) 共著者：Minami, S., Horaguchi, T., Kobayashi, R., Fukumoto, Y., Aoki, H., Morioka, K., Funahashi, R., Kohama, T., and Aoyama, T.
その他				

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名 黒川 望

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
なし				

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
なし				

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
なし				

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名 橋口 優

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Effect of driving training on car crashes and driving skills in older people: A systematic review and meta-analysis (高齢者に対する運転介入が自動車事故数や運転技能に与える影響) (査読付)	共著	2023年10月	Geriatrics Gerontology International Vol. 23, No. 11 pp. 771-778	高齢者における自動車事故の減少及び運転技能の向上に対する、運転に関連した介入の効果についてシステマティックレビュー及びメタアナリシスを行った。 (一次スクリーニング、二次スクリーニング、データ抽出を担当) [共著者] Ishii H, Okubo Y, Doi T, Tsutsumimoto K, Nakakubo S, Kurita S, Uemura K, Misu S, Sawa R, Hashiguchi Y, Shimada H, Arai H.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
装具による歩行時筋活動及び筋シナジーへの影響について	—	2023年10月	第30回群馬県理学療法士学会	歩行中の筋活動及び筋シナジーに対して装具を着用した影響について比較検討した。筋シナジーに関わる指標の性質が明らかとなった。 発表者：橋口 優

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 理学療法学科 氏名 加茂智彦

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
前庭リハビリテーションガイドライン	共著	2024年2月	金原出版	分担執筆：荻原啓文、加茂智彦、北原礼、肥塚泉、五島史行、佐藤豪、塩崎智之、武田憲昭、伏木宏彰、堀井新、山中敏彰 担当：第4章(pp37-48) 日本めまい平衡医学会はその標準化を目的に、本ガイドラインを策定。訓練方法をイラストで詳細に解説し、11のCQでシステマティックレビューに則ってエビデンスを解析し、推奨を作成。
生活期におけるリハビリテーション・栄養・口腔管理の協働に関するケアガイドライン	共著	2024年3月	医学書院	分担執筆：前田啓介、新井秀典、加茂智彦、他 担当：第4章(pp182-pp196) 自立支援・重度化防止に向け、CQ11問・BQ21問を含む、リハビリテーション・栄養・口腔管理の一体的取り組みのための国内外初のガイドライン。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Effects of Early Vestibular Rehabilitation in Patients With Acute Vestibular Disorder: A Systematic Review and Meta-Analysis(急性前庭障害患者における早期前庭リハビリテーションの効果：系統的レビューとメタ分析)(査読有)	共著	2023年8月	Otol Neurotol. 2023 Oct 1;44(9):e641-e647.	目的：急性前庭障害患者における早期前庭リハビリテーションが身体機能とめまい症状に及ぼす影響を調査すること。結論：本研究により、早期前庭リハビリテーションが急性前庭障害患者のめまいハンディキャップ・インベントリー、平衡感覚（目を閉じた状態）、自覚的めまいを改善することが示された。この結果は、早期前庭リハビリテーションが前庭補償を促進することを示している。(研究の立案、研究の実行、執筆を担当)(筆頭論文)共著者：Kamo T, Ogihara H, Azami M, Momosaki R, Fushiki H.
Reconsidering Compression Depth in Hands-Only Cardiopulmonary Resuscitation: A Critical Analysis of a Randomized Cross-Over Trial(心肺蘇生法における胸骨圧迫の深さの再考：無作為化クロスオーバー試験の批判的分析)(査読有)	共著	2023年9月	Ann Emerg Med. 2023 Sep;82(3):414-415.	心肺蘇生法における胸骨圧迫の深さの再考：無作為化クロスオーバー試験の批判的分析(査読有)共著者：Yamada N, Shiroshita A, Kamo T.
Rehabilitation contributes to lower readmission rates for individuals with peripheral arterial disease: A retrospective observational study(リハビリテーションは末梢動脈疾患患者の再入院率の低下に寄与する：レトロスペクティブ観察研究)(査読有)	共著	2023年10月	Ann Phys Rehabil Med. 2023 Oct;66(7):101768.	目的：PAD患者における再入院率に対するリハビリテーションの影響を調査する。結論：この大規模な全国調査により、入院中のリハビリテーション治療は、PADで入院した患者の再入院率と死亡率を下げることに関連していることが判明し、PADの標準治療として取り入れることが支持された。(研究の立案指導、研究の実行、全体の考察を担当)共著者：Suzuki K, Kamo T, Momosaki R, Kimura A, Koike T, Watanabe S, Kondo T.

Peer Support for Patients With Heart Failure: A Systematic Review and Meta-Analysis. (心不全患者に対するピアサポート：系統的レビューとメタ分析。) (査読有)	共著	2023年10月	Cureus. 2023 Oct 9;15(10):e46751.	本研究の目的は、心不全患者に対するピアサポートの潜在的な利益について精査することである。ピアサポートがQOLに及ぼす影響については、エビデンスが非常に不確実であった(標準化平均差2.03、介入群で高値、95% CI=1.79低値から5.84高値、エビデンスの確実性は非常に低い)。したがって、心不全患者に対するピアサポートを推奨することは、現状では正当化できない。(研究の立案指導、研究の実行、全体の考察を担当)共著者：Nakao S, Kamo T , Someko H, Okamura M, Tsujimoto Y, Ogihara H, Sato S, Maniwa S.
Effects of weekend rehabilitation on vertebral compression fractures in the elderly (高齢者の椎体圧迫骨折に対する週末のリハビリテーションの効果) (査読有)	共著	2024年1月	Physiother Res Int. 2024 Jan;29(1):e2049.	はじめに：このレトロスペクティブコホート研究の目的は、60歳以上の脊椎骨折患者における日常生活動作(ADL)と再入院に及ぼすリハビリテーションと週末療法の影響を調査することである。結論：週末リハビリテーションは、ADLの獲得と再入院防止のための治療プログラムにおいて重要な要素であると考えられる。(研究の立案指導、研究の実行、全体の考察を担当)共著者：Asahi R, Kamo T , Yuguchi S, Azami M, Ogihara H, Momosaki R.
Characteristics and Methodological Quality of the Top 50 Most Influential Articles on Stroke Rehabilitation: A Bibliometric Analysis(脳卒中リハビリテーションに関する最も影響力のある記事トップ50の特徴と方法論的品質：書誌学的分析) (査読有)	共著	2024年1月	Am J Phys Med Rehabil. 2024 Apr 1;103(4):363-369.	この研究の目的は、脳卒中リハビリテーションに関する最も影響力の高い論文トップ50について、被引用回数、出版年、研究デザイン、研究テーマなどの特徴を包括的に調査し、エビデンスレベルと方法論的質を評価することである。被引用数だけでは研究の質を示す信頼できる指標にはならない可能性を示唆している。(研究の立案指導、研究の実行、全体の考察を担当) 共著者：Ogihara H, Yamamoto N, Kurasawa Y, Kamo T , Hagiwara A, Hayashi S, Momosaki R.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録 (2023年4月～2024年3月)

所属 理学療法学科

氏名

田辺将也

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1 Arduinoを用いた筋電情報と 低周波刺激装置による高齢片麻 痺者の麻痺側の動作生成至適条 件に関する研究	—	2023年7月	情報処理学会アクセシビリ ティ研究会	Arduinoを用いた装置を活用し、電気刺激により片麻 痺高齢者に対する動作生成における詩的条件の検討を 行った。 「主として研究計画の立案、データの測定、統計処 理、考察を担当」 <u>田辺将也</u> 、木村朗
2 地域在住高齢者の移動販売車 の利用の有無による身体機能と 生活に対する意欲の関係性につ いて	—	2023年10月	第42回関東甲信越ブロッ ク理学療法士学会 71	移動販売車を利用している外出が困難なものと、体力 測定会に参加できる外出可能者の身体機能、生活に対 する意欲などについて調査を行った。「主として研究 計画の指導、データの測定、統計処理を担当」清水仁 絵、石川優姫、 <u>田辺将也</u>

3 ミラーセラピーとKinVis療法が手指巧緻動作に与える影響	—	2023年10月	第42回関東甲信越ブロック理学療法士学会	ミラーセラピーとタブレット端末を用いたKinVis療法とコントロール群でボール回し動作に改善がみられるかを比較検討した。「主として研究計画の指導、データの測定、統計処理を担当」浅川優佳, 石川優姫, 清水仁絵, <u>田辺将也</u>
4 ノーリフティングケア導入施設における腰痛の有訴率と痛みが出る作業場面との関連性の検討	—	2023年10月	第10回日本予防理学療法学会学術大会	ノーリフティングケアを導入した介護老人保健施設における腰痛の実態と疼痛出現に牽連する作業場面の特定を行った。「主として研究計画の立案・調整を担当」立花智也, 塩浦宏祐, 柳澤海志, <u>田辺将也</u> , 高橋稚菜, 原田亮
5 Determination of Optimal Conditions for Neuroprosthetic Functional Electrical Stimulation Therapy to Produce Wrist Dorsiflexion Movements Using the Versatility Index (汎用性インデックスを用いた手関節背屈運動を誘発する神経補綴機能的電気刺激療法の最適条件の決定)	—	2023年11月	ACRM 100th Annual Conference	各周波数における手関節背屈角度と疼痛から算出される汎用性インデックスという指標を用い、有効な通電条件を検討した。「主として研究計画の立案、データの測定、統計処理、考察を担当」 <u>Masaya Tanabe</u> , Akira Kimura
6 片麻痺者における神経補綴電気刺激方法による動作創出成功率の向上に関する研究	—	2023年12月	第12回日本支援工理学療法学会学術大会	非麻痺側の筋電図信号を活用し、麻痺側を運動させる動作課題において、片側のみで実施する課題が良いのか、両側で実施する課題が良いのかを成功率、主観的な疲労感、難易度などから検討。「主として研究計画の立案、データの測定、統計処理、考察を担当」 <u>田辺将也</u> , 木村朗
7 介護における腰痛予防 ノーリフティングケアの導入 介護現場におけるノーリフティングケアの基本的考え方について (査読なし)	単著	2024年3月	認知症ケア事例ジャーナル Vol. 16 no. 4. 2024 pp. 284-290 ワールドプランニング	介護施設において、ノーリフティングケアを現場に導入し定着させるための基本的な考え方について事例を交えて紹介。

研究活動の記録 (2023年4月～2024年3月)

所属 理学療法学科 氏名

林 翔太

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
11 Predictive discriminative accuracy of walking abilities at discharge for community ambulation levels at 6 months post-discharge among inpatients with subacute stroke. (査読付き)	共著	2023年5月	J Phys Ther Sci. 35 (3):257-264.	亜急性期脳卒中入院患者の退院後6ヵ月における退院時歩行能力の予測精度を地域歩行レベルと比較し、最適なカットオフ値を設定することを目的とした。家庭内・最限度者、最限度者間において、6分間歩行距離と快適歩行速度は同様の予測精度(曲線下面積、0.6-0.7)を示し、カットオフ値はそれぞれ195mと0.56m/sとなった。また、最小制限歩行者と無制限歩行者の間では、6分間歩行距離は0.896、快適歩行速度は0.844であり、それぞれ299mと0.94m/sのカットオフ値であった。 共同研究のため担当部分抽出不可能 Tatsuya Igarashi, Ren Takeda, Yuta Tani, Naoya Takahashi, Takuto Ono, Yoshiki Ishii, Shota Hayashi , Shigeru Usuda
12 亜急性期循環器疾患患者における退院時歩行速度および下肢機能と退院1月後の身体活動量との関連性の検証。(査読付き)	共著	2023年8月	理学療法群馬. 34:36-44	亜急性期循環器疾患患者の退院時の歩行速度および下肢機能から退院1ヶ月後の身体活動との関連性を検証することを目的とした。退院時に快適歩行速度、SPPBを評価し、IPAC-SFにより病前の身体活動(高強度・中強度・低強度・座位活動・合計)を聴取し、退院1ヵ月後に身体活動を再度聴取した。身体機能と身体活動に対して、年齢とBMIで調整したSpearmanの偏順位相関を用いて関連性を検討した。また、病前と退院1ヵ月後の身体活動をWilcoxonの符号付順位検定にて比較した。SPPBと座位活動で相関関係を認め(rs=-0.43, p=0.04)、退院1ヵ月後の合計身体活動は病前と比較して有意に低かった。退院後の座位活動時間を軽減させるためにも入院中から下肢機能に着目する必要がある。(実験の遂行、全体の考察、執筆担当)(筆頭論文) 林翔太 、小野拓斗、小池智紗、小川嘉志、五十嵐達也

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
13 Clinical Prediction Models for Nonmortality Outcomes in Older Adults With Hip Fractures: A Systematic Review. (股関節骨折を患う高齢者の非死亡率転帰に関する臨床予測モデル: 系統的レビュー) (査読付き)	共著	2023年8月	J Gerontol A Biol Sci Med Sci. 78(12):2363-2370.	股関節骨折の臨床予測モデルが多く開発されており、股関節骨折の臨床予測モデルで使用されているアウトカムをマッピングし、予測因子の領域と手段を特定、それぞれのバイアスリスクを評価することを目的とした。3206件の研究をスクリーニングし、45件が対象となった。アウトカムは死亡、移動、ADLが含まれ、予測因子は8つのドメインと38の尺度で報告されていた。バイアスリスクを実施した10件の研究全てでバイアスリスクは高いことが示された。共同研究のため担当部分抽出不可能 Yoichi Kaizu, Shuntaro Tamura, Hiroyuki Saito, Shota Hayashi , Hiroki Iwamoto, Kazuhiro Miyata.
14 Characteristics and Methodological Quality of the Top 50 Most Influential Articles on Stroke Rehabilitation: A Bibliometric Analysis. (脳卒中リハビリテーションに関する最も影響力のある論文トップ 50 の特徴と方法論の品質: 文献計量分析) (査読付き)	共著	2023年3月	Am J Phys Med Rehabil. 103(4):363-369.	本研究の目的は、脳卒中リハビリテーションに関する最も影響力のある上位50論文を包括的にレビューし、エビデンスレベルと方法論の質を評価することである。さらに、過去5年以内に発表された同領域の上位10論文についても傾向や方法論の質の潜在的な変化を見極めることを目的とした。非侵襲的脳刺激とロボットによるリハビリテーションは、上位50論文で頻繁に取り上げられていた。すべての年の上位50論文と過去5年間の上位10論文の間に、方法論の質に差はないことがわかった。さらに、被引用数や被引用密度は、方法論の質とは関連していなかった。この結果は、被引用数だけでは研究の質の信頼できる指標とはならない可能性を示唆している。共同研究のため担当部分抽出不可能 Hirofumi Ogihara, Norio Yamamoto, Yasuyuki Kurasawa, Tomohiko Kamo, Akikazu Hagiwara, Shota Hayashi , Ryo Momosaki.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13. 健常成人に対するVRゴーグルを用いた静的及び動的自覚的視性垂直位の信頼性の検証. (ポスター)	-	2023年6月	第2回日本前庭理学療法研究会学術集会(群馬)	スマートフォンアプリとvirtual reality(VR)を用いた静的及び動的自覚的視性垂直位(SVV)の信頼性を検証することを目的とした。静的SVVは $0.05 \pm 1.18^\circ$ 、動的SVV(時計回り)は $4.57 \pm 3.45^\circ$ 、動的SVV(反時計回り)は $-3.28 \pm 2.30^\circ$ であった。級内相関係数(ICC1,1)はそれぞれ0.794, 0.771, 0.518 ($p < 0.05$)であり、SEMは 0.31° , 1.62° , 1.40° 、MDC 95は 0.87° , 4.48° , 3.87° であった。VRゴーグルを用いたSVV測定は静的のみならず、動的SVV測定でも中等度から十分な信頼性が得られた。測定の実行、全体の構成、筆頭演者 林翔太 , 伊藤祐輝, 五十嵐達也, 加茂智彦.
14 . 脳卒中のリハビリテーションに関して最も影響力のある50本の論文: 計量書誌学的分析.	-	2023年6月	第53回長野県理学療法学会(長野)	脳卒中リハビリテーションに関する最も影響力のある上位50論文を包括的にレビューし、エビデンスレベルと方法論の質を評価した。非侵襲的脳刺激とロボットによるリハビリテーションは、上位50論文で頻繁に取り上げられていた。すべての年の上位50論文と過去5年間の上位10論文の間に、方法論の質に差はないことがわかった。さらに、被引用数や被引用密度は、方法論の質とは関連していなかった。共同研究のため、本人担当部分抽出不可能 萩原啓文、山本乃利男、倉澤康之、加茂智彦、萩山 明和、 林翔太 、百崎良

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
15 . 日本における頭部外傷に対するリハビリテーションの実施状況～DPCデータを用いた解析～(ポスター)	-	2023年9月	第21回日本神経理学療法学会学術大会(神奈川)	Diagnosis Procedure Combination (DPC) データを用いた、急性期頭部外傷患者に対する院内リハビリテーションの実施状況を調査した。リハビリ総時間の中央値は280 (120-680) 分、リハビリ提供時間/日の中央値は16.0 (12.5-20.0) 分であった。各年別 (2017年～2022年) のリハビリ実施率は63.9%、67.5%、69.3%、70.5%、72.0%、67.6%であり、2017年と比較すると各年別で増加を認めた (p<0.05)。急性期の頭部外傷患者に対するリハビリ実施率は60～70%程度と増加傾向であるが、患者一人当たりのリハビリ総時間およびリハビリ提供時間/日は減少傾向であることが明らかとなった。 データの解析、全体の構成、筆頭演者 林翔太 、加茂智彦、百崎良
16 外傷性脳損傷患者に対する早期リハビリテーション介入の効果：後方視的コホート研究(口述)	-	2023年10月	第30回群馬県理学療法士学会(群馬)	外傷性脳損傷(Traumatic brain injury: TBI)は年々増加傾向であり、急性期TBI患者の早期リハ介入の効果をJapan Medical Data CenterのDiagnosis Procedure Combination(DPC)データを用いて検証することを目的とした。 早期リハ群では、自宅退院(950人(29.4%) vs 1,051人(48.5%), p<0.01)、BI効率(0.07 vs 0.19, p<0.001)が有意に高く、在院日数(34.2日 vs 27.0日, <0.001)、誤嚥性肺炎(419人(13.0%) vs 361人(11.2%), p<0.05)が有意に低かった。早期リハ介入によって、ADL効率の改善や誤嚥性肺炎の予防、在院日数の短縮につながる可能性が示唆された。 データの解析、全体の構成、筆頭演者 林翔太 、加茂智彦、百崎良
17 Effects of combined exercise on patients with chronic heart failure: A systematic review and meta-analysis(慢性心不全患者に対する複合運動の効果：システマティックレビューとメタアナリシス) (ポスター)	-	2023年11月	16th The Asian Confederation for Physical Congress(Thailnad)	慢性心不全における一般的な介入であるAE単独と比較して、有酸素運動とレジスタントトレーニングの併用運動(CE)が運動機能や健康関連QOL(HRQOL)にどのような効果をもたらすかをsystematic reviewおよびmeta-analysisにて検証した。506人の患者を含む15件の研究がこのレビューに含まれた。全体的なシステマティックレビューの結果、CHF患者における併用運動の有益性が示された。CE群は有酸素運動群と比較して、CHF患者の筋力、HRQOLを有意に改善した。CEは慢性心不全患者の筋力とHRQOLを改善する効果的な治療法のひとつであると考えられる。 データの解析、全体の構成、筆頭演者 Shota Hayashi , Tomohiko Kamo, Yuta Tani, Hirofumi Ogihara.

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 作業療法学科 氏名 石井良和

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
地域在住要支援・要介護高齢者の作業同一性の経時的変化の特徴および作業同一性とADL・健康関連QOLとの関係(査読あり)	共著	2024年3月	作業行動研究27(4)212-220	本研究は地域在住の要支援・要介護高齢者の作業同一性の経時的変化の特徴やADLおよびQOLとの関連を検討したもので、結果は作業同一性が低下した状態が継続することで、作業的存在としての認識が低下する可能性が示唆された。動機づけにも問題があることが予測され、早期の介入が必要と考えられた。 著者：鹿田将隆, 篠原和也, 石井良和
Development of the Japanese version of the stroke stigma scale: a validity and reliability assessment. (脳卒中スティグマ尺度の日本語版の開発：妥当性と信頼性の評価)(査読あり)	共著	2024年2月20日	Topics in Stroke Rehabilitation DOI: 10.1080/10749357.2024.2318097	本研究では、脳卒中スティグマ尺度(SSS-J)の日本語版を開発し、80名の対象者でRaschモデルに適合させ、信頼性と妥当性を検討し、その有用性を確認することができた。 著者：北村新, 宮本礼子, 渡邊翔太, 吉田大樹, 石井良和
計量テキスト分析を用いた就労支援継続に関する精神障害者の主観の検討(査読あり)	共著	2024年3月	日本保健科学学会誌 26(4), 220-229	精神障害者の就労支援では個別的なキャリア支援や自己実現を目指す支援が求められている。そのためには当事者の主観に着目した評価が重要であるものの現状では支援者の経験や勘で判断されている。本研究では、企業で就労を継続している精神障害者どのような主観をもつか、文献から当事者の主観に関する箇所を抽出し計量テキスト分析を行った。結果は、仕事をするこの覚悟と思い、生活の変化に関する認識をコアカテゴリとした11のサブカテゴリが抽出された。 著者：馬場順子, 宮寺寛子, 岡田直純, 石井良和, 谷村厚子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
地域活性化に役立つeスポーツは作業になりえる期待～計量テキスト分析による探索的検討～	—	2023年11月	第57回日本作業療法学会(沖縄)	本研究の目的は、社会人eスポーツに参加した現役社会人の生活の構造を概観した上で、eスポーツの経験が作業の可能性に役立つ仕組みや社会構造について明らかにするものである。結果は、比較的強く互いに結びついた①地域企業の人と関係性をつくる楽しさは想像以上、②知らない人同士で集まり参加しても楽しい、③eスポーツは誰とでも一緒にできる、④会場で一緒に盛り上がった体験、⑤参加した職場の人とさらに良好な関係という5つのカテゴリが抽出された。 南征吾, 石代敏拓, 竹原敦, 石井良和, 村田和香
テキストマイニングを用いた就労継続に影響する精神障害者の主観の文献検討	—	2023年11月	第57回日本作業療法学会(沖縄)	企業で就労を継続している精神障害者がどのような主観を持つのか、文献から当事者の主観に関する箇所を抽出し、計量テキスト分析を行った者である。 著者：馬場順子, 宮寺寛子, 岡田直純, 石井良和, 谷村厚子

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 リハビリテーション学部
作業療法学科

氏名

竹原 敦

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
1 イラストと動画で学ぼう！ 人間発達学（笹田哲・編）	共著	令和5年10月	診断と治療社，東京	高齢期の社会性について，社会的役割の変化の関係および生涯にわたるモチベーションについての理論である社会情動的選択性理論について説明した．特に，両者は社会性を育むため相互に作用することを示した． 第2章 領域別における発達 6. 社会性 加齢と社会性 166頁～167頁，著者：竹原敦

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1 Family caregiver's concerns and anxiety about unaccompanied out-of-home activities of persons with cognitive impairment. (認知障害者の付き添いなしの外出に対する家族介護者の懸念と不安) (査読あり)	共著	令和5年6月	BMC Geriatrics23:396-405, 2023. https://doi.org/10.1186/s12877-023-04025-7	初期の認知症に対する家族介護者の不安に焦点を当て，特に，認知症本人の付き添いなしでの外出活動に対する介護者の不安の要因を明らかにすることを目的とした．1,322人の介護者を対象に電子調査を行い，介護者が外出活動に関連するリスクに対してどのような懸念を持っているかを分析した．認知症の特徴や行動・心理症状の出現，介護の長期性が介護者の不安と関連していることが示された．特に，認知機能の低下がない場合や行動・心理症状が出現していない場合，介護者の不安が低い傾向にあった．本研究は，介護者への教育的支援が介護者の安心感を高め，認知症者の外出活動を促進する可能性を示唆した． 著者：Shuji Tsuda, Hiroshige Matsumoto, Shun Takehara, Tomoyuki Yabuki and Satoko Hotta
2 Association between Support after Dementia Diagnosis and Subsequent Decrease in Social Participation (認知症診断後の支援とその後の社会参加の減少との関連性) (査読あり)	共著	令和5年9月	Annals of Geriatric Medicine and Research 27 (3):274-276, 2023	本研究は，認知症の診断後の支援の特性について，研究と議論を促進するために行われた．認知症の正確な診断は，認知症患者とその家族へのケアと支援への入り口を提供し，早期診断が可能になれば，軽度の認知症の段階での認知リハビリテーションが後の悪化を予防する効果があるとされている．多くの国で認知症の早期診断に焦点を当てた国家計画が開始されていますが，診断時のスティグマや不安が，ケアや支援なしでの社会参加を減少させる可能性がある．また，診断後の支援はこの負の影響を和らげることが期待されているが，その提供と効果についての詳細は未知のままである．本研究では，家族介護者を対象にしたオンライン調査データを用いて，診断後の支援と社会参加の変化の関連性を分析した． 著者：Hiroshige Matsumoto, Shuji Tsuda, Shun Takehara, Tomoyuki Yabuki, Satoko Hotta

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 認知症のある人の自宅外活動に対する家族の不安	-	令和5年6月3日～6月4日	第24回日本認知症ケア学会大会（京都），日本認知症ケア学会誌 22(1):172, 2023.	認知症のある人の社会参加は大切であるが、家族はその点に不安を覚えることが多い。本研究では、家族が感じる認知症の人の自宅外活動に対する安全への懸念と不安の関連および背景因子について検討した結果、BPSDや診断を友人・知人に伝えるという本人の適応的な対処行動も、家族の強い不安に影響することが示唆された。 津田修治, 松本博成, 竹原敦, 矢吹知之, 堀田聡子
2 終末期がん患者の作業療法実践～対話を大切にすることで、自己効力感が高まり役割を再獲得した事例	-	令和5年10月6日～7日	第36回日本サイコoncロジー学会（奈良）	終末期がん患者に対し、作業の中で対話を重視することにより、ADLと感情に対する効力感が向上し、母親との関係性が改善し家族と人生を共にする希望が生まれた。スビュリチュアルペインは時間・関係・自律の喪失により起こるが、終末期の安心と自律を促すには、OTはその人の文脈を大切に丁寧な対話を通して、個々人の人生に向き合うことが重要であることが示唆された。 國武亜由美, 小野博典, 上野裕子, 竹原敦
3 終末期作業療法の構造と意義～作業に関する語りを通して～	-	令和5年11月10日～11月12日	第57回日本作業療法学会（沖縄）	本研究は、終末期作業療法実践過程における患者の語りから得られる想いを通して、①作業への想いが時間と共に変化する、価値を見出す、②症状からの解放、③作業を媒体として家族、他者とのつながりを深める、④作業を通して高まる自尊心、⑤希望が生きることを豊かにする、という5つのカテゴリーが得られ、作業療法の実践構造とその成果の意義が明らかになった。（PF-8-3） 國武亜由美, 竹原敦, 安永悟, 原頼子
4 回復期リハビリテーションにおける余暇活動支援に関するスコーピングレビュー	-	令和5年11月10日～11月12日	第57回日本作業療法学会（沖縄）	回復期リハビリテーションにおける余暇活動に対し、どのような評価や介入などが実施されているかを明らかにするために「スコーピングレビュー」を行った。回復期リハビリテーションにおける余暇に関する報告は散見され、余暇活動支援の重要性を感じているOTは少なくない。今後さらに余暇活動への実践を社会に示すことが今後の課題であることが示唆される。（PN-3-3） 溝部晃佑, 白井はる奈, 竹原敦
5 地域活性化に役立つeスポーツは作業になりえる期待～計量テキスト分析による探索的検討～	-	令和5年11月10日～11月12日	第57回日本作業療法学会（沖縄）	本研究の目的は、社会人eスポーツに参加した現役社会人の生活の構造を概観した上で、eスポーツの経験が作業の可能性に役立つ枠組みや社会的構造について明らかにすることであった。対象者へのインタビュー内容を計量的テキスト分析による探索的検討を実施した結果、総出語は3,418語で、出現頻度は「eスポーツ」「思う」「人」「感じ」「一緒」の順に多かった。共起ネット分析では、比較的強くお互いに結びついている5つのカテゴリーが抽出された。それは①地域企業の人と関係性をつくる楽しさは創造以上、②知らない人同士で集まり参加しても楽しい、③eスポーツは誰とでも一緒にできる、④会場で一緒に盛りあがった体験、⑤参加した職場の人とさらに良好な関係、であった。本研究により、eスポーツによって作業の可能性が促進され、地域の人と関係性をつくる環境や組織化に役立っていることが示唆された。（PN-7-8） 南征吾, 石代敏拓, 竹原敦, 石井良和, 村田和香
6 認定作業療法士取得研修選択 老年期 老年期障害の作業療法②高齢者に対する作業療法	-	令和5年8月26日～27日	日本作業療法士協会	認定作業療法取得条件のための研修を行った。老年期の作業療法実践の評価、介入、成果の示し方、事例検討などを実施した。 竹原敦
7 臨床作業療法学演習 認知症の人と家族に対する作業療法実践について	-	令和5年10月26日	神奈川県立保健福祉大学	認知症の人と家族に対する作業療法実践を、背景、症状、評価、アプローチと成果の視点で講義した。臨床実習を補完する実践的な内容を伝えた。 竹原敦

8 高齢者の暮らしを支援する作業療法の視点～森田療法から学ぶこと～（シンポジウム2）：高齢者への心理社会的支援のヒント	-	令和5年12月3日	第40回日本森田療法学会	森田療法の治療過程を作業療法実践の視点と結びつけて説明した。森田療法の臥褥期，軽作業期，重作業期，生活訓練期の内容は，作業療法の概念と親和性があることが示唆された。 竹原敦
9 読み聞かせ～読む、覚える、話す、交流～	-	令和5年12月6日	令和5年度神奈川県川崎市宮前図書館 シニアのための読み聞かせ養成講座	地域の図書館等で開催される読み聞かせが、どのような効果があるのかを、記憶、言語、社会交流の側面から解説した。 竹原敦
10 認定作業療法士取得研修選択 老年期 老年期障害の作業療法⑤高齢者に対する作業療法	-	令和5年1月27日～28日	日本作業療法士協会	認定作業療法取得条件のための研修を行った。老年期の作業療法実践の評価，介入，成果の示し方，事例検討などを実施した。 竹原敦

研究活動の記録（2022年4月～2023年3月）

所属 作業療法学科 氏名 宮寺寛子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
地域作業療法学	共著	2024年1月10	医歯薬出版株式会社	第8章 介護予防の地域づくり 介護予防において、作業療法士が地域でどのような活動をしているか、そのために必要な知識と技術は何かをまとめた。近年の情勢を踏まえ、災害保健医療福祉に関する最新の知見も解説している。 著者：猪股英輔・野村健太・金野達也・池田晋平・高島理沙・谷村厚子・内田達二・宮寺寛子・石橋裕・山西葉子・馬場順子・田中克一・丁子雄希・谷川真澄

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
群馬県作業療法士会員の災害対策の現状に関する調査	共著	2023年10月	ぐんま作業療法研究26, 21-28.	専門職としての災害に対する備えがどの程度進んでいるかを調査し、災害時に効果的な支援を行うための課題を明らかにした。 宮寺寛子, 馬場順子, 岡田直純, 関根圭介
地域で働くことについての理解に向けて～地域で学生ボランティアは何を学んだのか～	共著	2023年10月	ぐんま作業療法研究26, 29-35.	学生が地域貢献活動に参加することで、地域作業療法分野への作業療法の貢献が高まる可能性について考察した。 岡田直純, 馬場順子, 宮寺寛子
学術誌からみた作業療法5ヵ年戦略における日本と群馬県の実践の特徴～文献タイトルの計量テキスト分析～	共著	2023年10月	ぐんま作業療法研究26, 10-20.	精神科領域における作業療法戦略を、全国と群馬県で比較し、現状の課題を明らかにし、今後の活動の方向性を提案した。馬場, 岡田直純, 宮寺寛子

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 作業療法学科 氏名

馬場順子

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
1. 最新作業療法学講座 地域作業療法学	共著	令和5年12月	医歯薬出版社	<p>本書は令和6年版理学療法士作業療法士国家試験出題基準の「Ⅴ 地域作業療法学」(1. 基礎、2. 評価と支援、3. 安全管理)に対応しており、作業療法士をめざす学生にとって必要な、地域作業療法の理念、作業療法実践の場、各領域での作業療法士の役割、評価・支援アプローチ方法等を示し、演習事例を通して地域作業療法に必要な知識・技術の大枠を学べる構成となっている。</p> <p>担当部分：第12章 就労支援における作業療法。P191-210。 共著者：小林紀一，小林隆司（編），<u>馬場順子</u>他</p>
2. 公衆衛生学 (Crosslink basicリハビリテーションテキスト)	共著	令和5年12月	メジカルビュー社	<p>理学療法士，作業療法士，言語聴覚士の養成校の専門基礎科目に対応したテキストシリーズ。公衆衛生学の知識を理学療法士，作業療法士の役割を示しつつ解説することで、臨床への明確なつながりが理解できる内容。</p> <p>担当部分：第4章6 精神保健。P193-203。 共著者：浅川康吉，安村誠司（編），<u>馬場順子</u>他</p>

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. 自宅に準ひきこもり状態であった統合失調症の男性への自立生活支援－8050問題に対する人間作業モデルに基づく支援の有用性－ (筆頭論文，査読付き)	共著	令和5年 9月	作業行動研究 27(2), 120-128.	<p>精神障害者の地域定着支援において、自宅で高齢の親と暮らしている事例の支援に関する論文。本事例は我が国における深刻な社会課題である8050問題に対して筆者が作業療法理論の一つである人間作業モデルを用いて評価および支援を実施した結果、親亡き後の自宅での生活構築に至った。本事例論文により作業療法士の地域包括ケアシステムにおける役割および本分野における作業療法士の有効性を示すことができた。</p> <p>担当部分：研究計画，データ収集，分析，論文執筆 共著者：<u>馬場順子</u>，谷村厚子，岡田直純，宮寺寛子</p> <p>※本論文は、日本作業行動学会にて優秀事例論文として表彰を受けた。</p>

<p>2. 地域で働くことについての理解に向けて～地域で作業療法士学生は何を学んだのか～ (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年 11月</p>	<p>ぐんま作業療法研究 26, 29-35, 2023.</p>	<p>地域共生社会に向けた取り組みにおいて、作業療法士の専門性への期待は大きい。一方で地域実践を専門にした養成校教育は現状では不十分であり、地域で活躍できる作業療法士を教育するうえでの課題とされている。本研究では養成校の早期から地域作業療法現場に学生がボランティアとして参加するなかで、地域共生社会における作業療法士の役割をどのように理解したのか、質的に分析を行った。 その結果、学生は地域での課題への気づき、具体的な対処法への関心が芽生えたことが明らかになった。養成校早期から地域の実情を知るべくボランティアに参加することは養成校での地域実践教育への関心の向上において意義があった。</p> <p>担当部分：研究計画，分析，論文執筆 共著者：岡田直純，馬場順子，宮寺寛子</p>
<p>3. 群馬県作業療法士会員の災害対策の現状に関する調査（査読付き）</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年 11月</p>	<p>ぐんま作業療法研究 26, 21-28, 2023.</p>	<p>我が国での災害医療やリハビリテーションが注目されているなか、群馬県内での作業療法士における災害対策に関する実情は把握されていない。そこで本研究では、群馬県内の作業療法士に災害対策活動における現状課題を明らかにする目的で県士会会員にWeb調査を実施した。結果、災害に対する全体的な関心の低さ、災害経験支援の有無による災害対策の違いなどが明らかになった。今後は全体に対して災害対策への関心を高める働きが重要であることが示唆された。</p> <p>担当部分：共同研究のため担当部分の抽出不可 共著者：宮寺寛子，馬場順子，岡田直純，関根圭介</p>
<p>4. 学術誌からみた作業療法5ヵ年戦略における日本と群馬県の実践の特徴～文献タイトルの計量テキスト分析～（筆頭論文，査読付き）</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年 11月</p>	<p>ぐんま作業療法研究 26, 10-20, 2023.</p>	<p>日本作業療法士協会は5ヵ年計画として地域包括ケアシステムにおいて、医療と地域生活支援の両サービスに作業療法士が跨り活躍していくことを推進している。しかし、現状において作業療法士がどのような実践をしているのかは明らかになっていない。そこで本研究では、学術誌「作業療法」と学術誌「ぐんま作業療法」に着目し、作業療法5ヵ年計画の中でどのような実践が行われてきたのか計量テキスト分析を実施し、作業療法士の地域包括ケアシステムにおける実践課題を考察することにした。 結果、高齢者の地域包括ケアシステムでは日本と群馬とで十分な実践が確認されたが、精神障害にも対応した地域包括ケアシステムでは群馬県での実践が少なく、県内の作業療法での課題を示唆した。</p> <p>担当部分：研究計画，データ分析，論文執筆 共著者：馬場順子，宮寺寛子，岡田直純</p>

5. 計量テキスト分析を用いた就労継続に関する精神障害者の主観の検討 (筆頭論文, 査読付き)	共著	令和6年 3月	日本保健科学学会誌26 (4), 220-229, 2024.	精神障害者の就労支援では個別的なキャリア支援や自己実現を目指す支援が求められている。そのためには当事者の主観に着目した評価が重要であるものの現状では支援者の経験や勘で判断されている。そこで本研究では、企業で就労を継続している精神障害者がどのような主観を持つのか、文献から当事者の主観に関する箇所を抽出し計量テキスト分析を行った。 結果、仕事をする事の覚悟と思い、生活の変化に関する認識をコアカテゴリとした11のサブカテゴリが抽出され、今後の就労定着支援における着眼点となる可能性が示唆された。 担当部分：研究計画，データ分析，論文執筆 共著者：馬場順子，宮寺寛子，岡田直純，石井良和，谷村厚子
--	----	------------	---------------------------------------	---

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. テキストマイニングを用いた就労継続に影響する精神障害者の主観の文献検討 (査読付き)	—	令和5年 11月	第57回日本作業療法学会 (於：沖縄コンベンションセンター)	企業で就労を継続している精神障害者がどのような主観を持つのか、文献から当事者の主観に関する箇所を抽出し計量テキスト分析を行った。 結果、仕事をする事の覚悟と思い、生活の変化に関する認識をコアカテゴリとした11のサブカテゴリが抽出され、今後の就労定着支援における着眼点となる可能性が示唆された。 担当部分：序論，方法，結果，考察の全て 共同発表者：馬場順子，宮寺寛子，岡田直純，石井良和，谷村厚子
2. 上手く関わった経験の成り立ち —認知症クライアントに関わる作業療法士の世界— (査読付き)	—	令和5年 11月	第57回日本作業療法学会 (於：沖縄コンベンションセンター)	作業療法士は認知症患者を対象とした臨床実践を通じてクライアントをどのように理解しているのか。本研究は認知症のクライアントに関わる作業療法士の臨床実践経験を現象学的視点から考察し、クライアントの世界に「上手く関わった経験」がクライアントを理解できていたことに結びつけていたことを明らかにした。 担当部分：共同研究のため担当部分の抽出不可 共同発表者：岡田直純，馬場順子，宮寺寛子
3. 災害に対する作業療法士の備え —群馬県作業療法士会の取り組み— (査読付き)	—	令和5年 11月	第57回日本作業療法学会 (於：沖縄コンベンションセンター)	災害支援活動において作業療法士の役割が認識されつつある。こうしたなか作業療法士は災害直後の業務継続だけでなくクライアントの災害リスク軽減を含まなければならない。本研究は、群馬県作業療法士会の災害に対する備えについて明らかにすることを目的とした。結果、備えを行っているものとそうでない者が2分している結果等、災害対策が喫緊課題であることが示唆された。 担当部分：共同研究のため担当部分の抽出不可 共同発表者：宮寺寛子，馬場順子，岡田直純

<p>4. 精神障害当事者のリカバリーに焦点をあてた実践が就労移行支援職員に与える影響：2年間の実践に基づく質的検討 (査読付き)</p>	<p>—</p>	<p>令和5年 12月</p>	<p>第30回日本精神障害者リハビリテーション学会（於：倉敷芸文館）</p>	<p>精神障害を持つ人のリカバリーに向けた就労支援のために、リカバリーに対する職員の理解は重要である。しかし就労移行支援事業所では「就労すること」だけに焦点化されやすい。本研究は就労移行支援事業所においてリカバリー支援を導入した職員の意識変化について2年間の追跡調査を行った。結果、職員には、就労だけが目的でなく、対象者のリカバリー支援を発展させたい等の意識変化が見られた。</p> <p>担当部分：共同研究につき担当部分の抽出不可 共同発表者：浅黄真紀子，川口敬之，土屋英美子，田原智明，馬場順子</p>
<p>5. セラピストが重要視する運転再開支援判断項目についてのアンケート調査 (査読付き)</p>	<p>—</p>	<p>令和6年 3月</p>	<p>第25回千葉県作業療法学会（於：千葉県立保健医療大学）</p>	<p>脳損傷者の運転再開支援では疾患特性や個人因子などを考慮し、症例毎に総合的な判断が必要とされる。この総合的な判断には属人的な要素が含まれているが明確化されていない。本研究では、セラピストがどの要素を重要視し、運転再開可否を検討しているかに関するアンケート調査を実施した。結果、クライアントの生活場面等を重要視して運転再開判断をしていることが示唆された。</p> <p>担当部分：共同研究につき担当部分の抽出不可 共同発表者：倉澤直樹，馬場順子，下田辰也，山中義崇</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 作業療法学科 氏名 吉岡和哉

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
イラストと動画で学ぼう！	共著	令和5年10月	診断と治療社	本書の中で感覚統合について執筆した。感覚統合と人間発達を関連付けて、運動がどのような発達を示すかなど解説を行った。 pp. 138-142 編集：笹田哲，執筆者：笹田哲，吉岡和哉他28名

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
19. 重症COVID-19患者に対して作業参加に焦点を当てた作業療法により不安や抑うつ軽減が認められた事例（実践報告）	共著 (FA)	令和5年10月	作業療法：日本作業療法士協会 42巻3号, pp398-406	COVID-19感染により重度の呼吸不全に陥り，人工呼吸器離脱後に不安や抑うつ状態を認めたA氏を担当した。作業療法ではA氏にとって価値ある作業に焦点を当て，さらに作業参加に影響する要因をMOHOの視点を参考に分析し介入した。経過中，A氏は再び人工呼吸器管理となったが，床上でのメールや読書など，本人にとって価値ある作業を提供していく中で笑顔が見られ，不安や抑うつ軽減を認めた。重症COVID-19患者に対して，急性期から作業に焦点を当てた介入をすることは作業療法士の重要な役割として示唆された。 担当：分析，執筆 執筆者：佐野菜緒子，早川貴行，吉岡和哉

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 作業療法学科 氏名 近藤健

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
Improvements in psychological distress in patients participating in a cooking programme following digestive cancer surgery: A retrospective, propensity score-matched pilot study (消化器がん手術後の料理プログラムに参加した患者の心理的苦痛の改善：傾向スコアを用いた後ろ向きパイロット研究)	共著	2023年4月	British Journal of Occupational Therapy, 86(9), pp615-621 (IF:1.3)	この後ろ向きパイロット研究では、消化器がん手術後の入院中に日常生活動作介入が心理的苦痛を軽減するかどうかを評価しました。料理プログラムの経験によって患者を2つのグループに分け、通常の手術後ケアを受けさせました。結果、日常生活動作の向上が見られ、料理グループでは心理的苦痛の改善も見られました。これらの結果は、日常生活動作介入ががん患者の心理的健康にプラスの影響を与える可能性があることを示唆しています。(査読付) Ken kondo, Siyeong Kim, Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, Waka Murata, Bumsuk Lee
認知機能低下を伴う高齢者に対する、急性期病院での認知症ケアチームにおける作業療法実践の検討	共著	2023年4月	作業療法, 42(2), pp250-256	急性期病院での認知症ケアチームにおける作業療法は、高齢者の認知機能と運動機能の改善に効果があり、行動・心理症状や身体拘束の減少にも役立つことが示されました。(査読付) 常深 志子, 近藤 健, 藤原 香子, 中野 美佐
Development of an Evaluation System for Transfer Care Skills Using Embroidered Body Pressure and Proximity Sensor (刺繍体圧・近接センサーを用いた移乗介護スキル評価システムの開発)	共著	2023年7月	IEEE Journal of Translational Engineering in Health and Medicine, pp460-468 (IF:3.4)	介護者の負担を減らすために、高価な機器を必要とせず、簡易な評価システムを開発しました。これにより、ベッドから車椅子への移動時の座位位置や速度を評価し、介護者のスキルレベルを比較しました。本システムは、従来の動作解析システムと比較しても有効であることが示されました。(査読付) Hirofumi Kurosaki, Hiromu Shirahata, Junya Kawahara, Yasuhito Kondo, Ken Kondo, Bumsuk Lee, Masato Odagaki

Development of capacitive seating analysis sensor using conductive textile for the evaluation of seating motion (導電性繊維を用いた着座動作評価用静電容量型着座解析センサーの開発)	共著	2023年8月	Electronics and Communications in Japan, pp532-538	本研究では、介護シーンでの座位動作評価のための導電性刺繍センサーを用いた容量性座位解析センサーを開発しました。本研究では介護者のスキル評価に導電性刺繍センサーを活用し、椅子上での介護対象者の座位速度を測定するシステムの有効性を報告しました。(査読付き) Hirofumi Kurosaki, Hiromu Shirahata, Junya Kawahara, Yasuhito Kondo, <u>Ken Kondo</u> , Bumsuk Lee, Masato Odagaki
看護職・リハビリテーション職の多職種連携態度に影響を及ぼす対人葛藤解決方略の検討	共著	2023年10月	作業療法, 42(5), pp 614-621	急性期と回復期病棟で働く看護職とリハビリテーション職94名に対し、対人葛藤解決方略が多職種連携態度に与える影響を調査しました。結果、統合解決と妥協の方略が多職種連携態度に良い影響を与えました。(査読付き) 深澤 彩, 高田 幸子, <u>近藤 健</u> , 金 始映, 李 範爽
Kinematic alteration in three-dimensional reaching movement in C3-4 level cervical myelopathy (C3-4レベルの頸髄症における三次元到達運動の運動学的変化)	共著	2023年11月	PloS one18, e0295156 (IF : 3.7)	頸髄症患者の上肢運動における高位と低レベルの脊髄圧迫の影響を比較しました。高位レベルの患者は不安定な運動軌道と高い変動性を示し、運動時間と距離が長いことがわかりました。(査読付き) Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, <u>Ken Kondo</u> , Duy Quoc Vo, Lisa Sato, Akihito Yanai, Masatake Ino, Bumsuk Lee
Purposeful activity based electrical stimulation therapy promoted adaptability to daily life for a patients with moderate/severe upper extremity paralysis after a chronic stroke: a case report (慢性脳卒中後に中等度/重度の上肢麻痺を患った患者への合目的電気刺激療法の適応: 症例報告)	共著	2023年12月	COGNITION & REHABILITATION4(2), p p54-58	慢性期脳卒中後の中等度/重度の上肢麻痺患者に対する目的志向型活動を伴う電気刺激療法が、日常生活への適応を促進したことを示しました。(査読付) Minami S , Kobayashi R , Horaguchi T , <u>Kondo K</u> , Ishimori T , Aoki H , Fukumoto Y , Sano N , Shinoda A , Hashimoto K , Aoyama T
Decreased Visual Search Behavior in Elderly Drivers during the Early Phase of Reverse Parking, But an Increase during the Late Phase (高齢ドライバーの視覚探索行動は、バック駐車初期段階では減少するが、後期段階では増加する)	共著	2023年12月	Sensors, 23(23), 9555 (IF:3.9)	高齢ドライバーの逆駐車時の視覚探索行動とその生活品質への影響を調査しました。14人の高齢者と14人のエキスパートドライバーが駐車タスクを実施し、アイ・トラッカーを使用しました。高齢者は視線が駐車スペースの頂点に集中する時間が短く、QOLとの関連が示唆されました。(査読付) Siyeong Kim, <u>ken kondo</u> , Naoto Noguchi, Ryoto Akiyama, Yoko Ibe, Yeongae Yang, Bumsuk Lee

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
導電性繊維による自己静電型体圧・近接刺繍センサーを用いた介護技能評価システムの開発	-	2023/5/1	第62回 生体医工学会大会 (学会発表)	導電性繊維を使って体圧や近接を感知できる刺繍センサーを開発し、それを介護技能の評価に応用するシステムのことです。この技術により、介護者の動作や患者の体圧分布を詳細にモニタリングし、効率的かつ正確な介護評価を可能にすることができることを示しました。(査読付) 黒崎紘史, 川原 潤也, 中村 哲也, <u>近藤 健</u> , 李 範爽, 小田垣 雅人

Effects of purposeful activity-based electrical stimulation therapy on brain function in individuals with chronic upper limb paralysis	-	2023/5/1	15th Mediterranean Congress of Physical and Rehabilitation Medicine (学会発表)	上肢麻痺患者に対するこの療法の脳機能に与える効果を調査する研究です。療法が神経の可塑性を高め、運動機能の改善や動きの回復に役立つかを検討し、リハビリテーション方法の向上と患者の生活の質の改善を示唆しました。(査読付) Seigo Minami, Ryuji Kobayashi, Ken Kondo, Takahiro Horaguchi, Yoshihiro Fukumoto, Hdeki Aoki, Takuya Ishimori, Tomoki Aoyama
Collaborative practice between nurse and rehabilitation professionals	-	2023/6/1	The first international conference of Mongolian occupational therapy (学会発表)	看護師とリハビリ専門職が連携して患者ケアを行う実践を検討しました。この協働により、患者の回復を最適化し、全体的なケアの質を向上させることが明らかになりました。(査読付) Ken Kondo, Shunya Honda, Naomi Tajima, Waka Murata, Bumsuk Lee
3Dプリント技術への前向きな受け入れを測定する日本語版修正TAM質問票の信頼性・妥当性の検討	-	2023/7/1	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 60 (学会発表)	3Dプリント技術の受け入れを評価するための日本語版修正TAM(技術受容モデル)質問票の信頼性と妥当性を確認する研究です。この研究では、質問票の正確さと一貫性を検証し、その結果、3Dプリント技術に対するユーザーの前向きな認識を測定できることがわかりました。(査読付) 近藤 健, 丸山 祥, 金 始映, 村田 和香, 李 範爽
3Dプリント技術学習プログラム受講前後におけるリハビリテーション専門職の心理的变化の検討	-	2023/8/25	第36回教育研究大会・教員研修会(学会発表)	リハビリテーション専門職が3Dプリント技術の学習プログラムを受講する前後での心理的な変化を調査する研究です。この研究では、プログラムの受講が専門職の意識や信念、モチベーションにどのような影響を与えるかを検討し、新たな技術の導入に向けた心理的な準備や取り組み方を検討しました。結果として、使いやすさの認識は、他の項目に比べ低く、受講後の得点の向上が確認できました。(査読付) 近藤健, 丸山祥, 石森卓也, 金始映, 村田和香, 李範爽
導電性刺しゅう式体圧・接近センサによるベッド-車椅子移乗動作の解析	-	2023/9/1	SICEライフエンジニアリング部門シンポジウム2023(LE2023)(学会発表)	導電性刺しゅうを用いたセンサで体圧や接近を測定し、ベッドから車椅子への移乗動作を解析する研究です。この技術により、移乗動作中の詳細な圧力分布や動作パターンを明らかにしました。(査読付) 榊 幾也, 黒崎 紘史, 川原 潤也, 近藤 康人, 近藤 健, 李 範爽, 小田垣 雅人
3Dプリント技術への認識を測定する日本語版修正Technology acceptance model質問票の再検査信頼性、構造的妥当性の検討	-	2023/10/1	第17回日本作業療法研究学会学術大会	3Dプリント技術に対する認識を測定する評価を開発し、信頼性、構造的妥当性を検討しました。結果、開発した評価尺度は、信頼性、妥当性が確保されていることが明らかになりました。(査読付) 近藤健, 丸山祥, 石森卓也, 金始映, 村田和香, 李範爽
Effects of a 3D printing technology learning program in rehabilitation professionals: a randomized controlled trial	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会(学会発表)	リハビリテーション専門職に対して行われた3Dプリント技術学習プログラムの効果を評価する研究です。この研究では、プログラムを受講したグループと受講していないグループを比較し、3Dプリント技術に対するプログラムが専門職のスキルや知識に与える影響を調査しました。(査読付) Ken Kondo, Masatoshi Shibata, Siyeong Kim, Waka Murata, Lee Bumsuk

A case report of effects in the artwork on relieving pain in the older patient after surgical treatment of hip fractur	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会 (学会発表)	高齢患者が股関節骨折手術後の疼痛を和らげるためにアートワークを使用した効果についての症例報告です。この報告では、アートワークが患者の疼痛や不快感の軽減にどのように役立ったか、またそのメカニズムについて論じました。(査読付) Motoko Tsunemi, <u>Ken Kondo</u> , Misa Nakano
目標設定ツールを使用した多職種連携 —複数の高次脳機能障害を呈した症例	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会 (学会発表)	複数の専門職が連携して、高次脳機能障害を持つ患者に対して目標を設定し、治療やケアを提供するプロセスにおいて目標設定ツールを利用する症例報告です。この研究では、目標設定ツールが多職種連携にどのように貢献し、患者の治療やケアにどのような影響を与えるかが評価されます。目標設定ツールを通じて、専門職間のコミュニケーションや目標の明確化が促進され、患者のリハビリテーションや生活の質が向上することが示唆されました。(査読付) 町田 知駿, <u>近藤 健</u> , 黒澤 匠太, 藤井 洋有, 関根 圭介
周術期消化器がん患者における入院中の不安・抑うつに影響する因子 —入院前の手段的日常生活動作に着目した検討—	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会 (学会発表)	周術期消化器がん患者の入院中の不安・抑うつに影響する因子を、入院前の日常生活動作から検討しました。手段的な生活動作の変化が心理状態に及ぼす影響を明らかにしました。(査読付) 藤井 洋有, <u>近藤 健</u> , 小田 俊一, 関根 圭介
脳卒中患者における非麻痺側上肢機能に及ぼす認知機能の影響	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会 (学会発表)	脳卒中後、非麻痺側上肢の機能に認知機能が及ぼす影響に焦点を当てる研究です。認知機能の変化がリハビリテーションや患者の日常生活にどのような影響を与えるかを明らかにしました。(査読付) 池田 光季, <u>近藤 健</u> , 李 範爽, 平石 武士
消化器がん術後患者における精神的苦痛に影響する要因の検討	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会 (学会発表)	消化器がん手術後の患者の精神的苦痛に影響する要因を分析する研究です。身体的な回復や社会的サポートといった要因が精神的な苦痛に及ぼす影響を明らかにしました。(査読付) 堀越 晃子, <u>近藤 健</u> , 深澤 旭, 阿部 真也, 中村 純
入院高齢者に対する看護師 - 作業療法士間協働実践の検討	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会 (学会発表)	高齢者の入院患者に対する看護師と作業療法士の連携に焦点を当てた研究です。両専門家の協働によるケアが高齢者の健康や生活機能に及ぼす影響を評価し、最適なケア提供方法を症例を通して検討しました。(査読付き) 本多 俊弥, <u>近藤 健</u> , 大貫 翔平, 加藤 積良, 田嶋 尚美
楽しい作業活動を通して生活範囲が拡大した脊髄損傷を呈した一例	-	2023/11/7	第57回日本作業療法学会 (学会発表)	脊髄損傷患者が楽しい作業活動を通じて生活範囲が広がった事例検討です。作業活動がリハビリテーションや生活の質の向上にどのように貢献したかを報告しました。(査読付き) 笹谷 朋弘, <u>近藤 健</u> , 神部 千亜紀
アイロンビーズ工芸の紹介	共著	2023/12/1	作業療法ジャーナル 57(13)	アイロンビーズ工芸の紹介および症例を通して認知機能や注意力のトレーニングにも効果的であり、患者の集中力や問題解決能力が増大しました。さらに、作品完成時には達成感や喜びを感じ、意欲が向上しました。(査読付) 常深 志子, <u>近藤 健</u>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 作業療法学科 氏名

石代 敏拓

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
地域活性化に役立つeスポーツは作業になりえる期待 -計量テキスト分析による探索的検討-	-	2023年11月	第57回日本作業療法学会（沖縄）	eスポーツの経験が作業の可能化に役立つ仕組みや社会的構造について明らかにすることを目的とし、社会人eスポーツリーグにプレイヤーとして参加した社会人を対象にインタビューをした。計量テキスト分析をおこない、地域企業の人と関係性をつくる楽しさは想像以上であること、知らない人同士で集まり参加しても楽しいこと、eスポーツは誰とでも一緒にできること、会場で一緒に盛り上がる体験ができること、参加した職場の人とさらに良好な関係になることが、eスポーツの作業的特性であることがわかった。（共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） （共同発表者：南征吾、石代敏拓、竹原敦、石井良和、村田和香）

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名 白坂 康俊

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
21 発話明瞭度の信頼性について～理学療法士，作業療法士との比較による発話明瞭度の限界ならびに課題と聞き取り力向上の可能性の検討～	共著	令和5年3月	群馬パース大学紀要	P. 15～24 発話明瞭度の信頼性について理学療法士，作業療法士との比較を行い，発話明瞭度の限界ならびに課題と聞き取り力向上の可能性を検討した 酒井哲郎，白坂康俊，三浦康子，丹下弥生

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名

齊藤吉人

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科

氏名

浅見知市郎

著書

名称	単著・ 共著の 別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の 別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の 別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
1. 医療系大学生における歯科疾患の実態と意識に関する研究	-	2023年12月17日	第30回日本未病学会 学術集会	歯科関係ではない医療系大学に通う大学生に歯科保健に対する意識に関するアンケートを実施し、合わせて歯科健診を行い、医療系大学学生の歯科疾患に関する意識と実際の口腔内の状況を比較検討し、どの程度の一致あるいは乖離が認められるか調査し、今後の成人歯科保健の一助とすることを試みた。 藤本友香、Andrews David、浅見知市郎

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名

後藤 遼佑

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
霊長類の肩、 日本霊長類学会（編）、 『霊長類の百科事典』	単著	2023年	丸善出版	日本霊長類学会が出版する霊長類の百科事典において肩関節構造の概説文を寄稿した。霊長類の肩関節構造には多様なバリエーションが存在するため、それらの骨格構造と各種のロコモーション様式との関係を機能形態学的見地から総説した。 著者：後藤遼佑
霊長類の四足歩行、 日本霊長類学会（編）、 『霊長類の百科事典』	単著	2023年	丸善出版	日本霊長類学会が出版する霊長類の百科事典において四足歩行の概説文を寄稿した。霊長類は非霊長類と比較するといくつかの運動学的特徴において特異な四足歩行を示す。他分野の研究者や大学院生を読者として想定して、霊長類の四足歩行の特徴を概説した。 著者：後藤遼佑

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Diagonal-couplet gaits on discontinuous supports in Japanese macaques and implications for the adaptive significance of the diagonal-sequence, diagonal-couplet gait of primates (不連続支持基体におけるニホンザルのダイアゴナル・カプレット、および霊長類のダイアゴナル・シーケンス・ダイアゴナル・カプレット歩容の適応性に関する考察) (査読付き)	共著	2023年10月	American Journal of Biological Anthropology 181(3): 426-439	新規な不連続支持基体を用い、ニホンザルの四肢の運び順を解析した。この実験から新たなことが分かった。樹上に適応した霊長類では、99%程度の割合で同側の前肢と後肢を同一の支持基体に着き、ダイアゴナル・シーケンスでは同側前後肢が同一支持基体と接触している時間が重複することが明らかとなった。この同側前後四肢の位置関係であれば、視覚誘導によって着地位置を制御しにくい後肢であっても、前肢の位置情報を頼りに遊脚運動を制御でき、なおかつ、前肢から後肢に不連続な支持基体を直接受け渡すことができる可能性が示唆された。この成果によって、霊長類特有の四足歩容であるダイアゴナル・シーケンスの適応性について新たな仮説が提案された。 (実験の計画から論文の執筆までのすべてを担当) 共著者：後藤遼佑、木下勇貴、設楽哲弥、平崎鋭矢

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
樹上ロコモーションからの話題提供	-	2023年7月	第39回日本霊長類学会自由集会「猿は木から落ちる/落ちない：霊長類の樹上環境適応と落下を考える」	霊長類の樹上適応に関するシンポジウムにおいて、発表者が解析してきた霊長類特有の四肢の運び順について話題提供をした。霊長類の樹上四足歩行では四肢の運び順や、手足に作用する反力の特徴が見られる。しかし、それらの特徴が落下防止に実際にどう寄与するかについては未だ分からない点が多い。本発表では、フィールドと実験室での実験データを交えながら、霊長類の樹上四足歩行における落下防止メカニズムに関する発表者の見解を提示した。 発表者：後藤遼佑

筋シナジー解析から考える二足歩行の垂直木登り起源：チンパンジー、テナガザル、ニホンザルの場合	-	2023年10月	第77回日本人類学会、ヒト・霊長類比較解剖学分科会シンポジウム「ヒトを含めた霊長類下肢筋群の比較形態・機能学」	垂直木登りを行う霊長類種ではそれらの頻度と相関して二足歩行頻度が他種よりも高いことが知られている。そのような背景から、二足歩行と垂直木登りにおける運動学的な類似性を根拠として、垂直木登り適応が二足歩行の前段階にあったとする垂直木登り仮説が古くから存在する。発表者は二足歩行の起源を解明することをモチベーションとして、二足歩行、垂直木登り、四足歩行における後肢筋活動の類似点と相違点を調べてきた。それらの研究では、網羅的に収集したチンパンジーとテナガザル、ニホンザルの後肢筋の筋電図に筋シナジー解析と呼ばれる分析手法を適用し、同期的に活動する筋の組み合わせに注目した。本発表では二足歩行と垂直木登りの類似点、さらにはそれらの移動様式と四足歩行の相違点（ただしテナガザルを除く）を中心として解析結果を示した。 発表者：後藤遼佑
Time-frequency analysis of hindlimb muscle electromyograms in bipedalism and quadrupedalism in Japanese macaques, Ryosuke Goto, Kenji Oka, Tetsuya Shitara, Yoshihiko Nakano, Los Angeles	-	2024年3月	93rd Annual Meeting of American Association of Biological Anthropologists	二足歩行は、体を支えるのに二本の後肢のみを使用するため、四足歩行よりも後肢の筋肉には高い筋肉緊張が必要とされる。この高い張力を生成することと関連して、筋肉の速筋線維が二足歩行ではより動員されている可能性が考えられる。速筋線維はより高い発火率や信号周波数、そして高い張力を生じることが知られている。本研究では、二足歩行における筋肉の活動の適応を明らかにするために、ニホンザル数個体個体の主要な後肢筋の筋電図の周波数を二足歩行と四足歩行の間で比較した。主な発見は筋電図振幅と中央周波数の関係であった。後肢筋が活動し始めると、振幅と周波数の間に直線的な関係が見られ、各筋肉で振幅が大きいほど周波数も高くなる傾向が確認された。しかし、ある周波数域を超えると、二足歩行中の振幅が四足歩行よりも有意に大きいにもかかわらず、周波数は上限に達してそれ以上は増加しませんでした。これらの結果から、四足歩行では筋電図の周波数が効果的に増加する範囲内で後肢筋が動員され、二足歩行ではそれを超えた活性化が必要とされる可能性が考えられた。 発表者：後藤遼佑、岡健司、設楽哲弥、中野良彦
ニホンザル二足歩行に特異的な後肢筋活動を時間周波数解析で解明する試み：予報的報告	-	2023年10月	第77回日本人類学会	常習的四足歩行動物であるニホンザルが二足歩行を行う際の後肢筋活動の特性を明らかにすることを目的として、四足歩行、二足歩行、垂直木登りにおける後肢筋の活動周波数を分析した。その予備的結果を報告する。本研究では、2個体のニホンザルの後肢筋から網羅的に収集した筋電図を、ウェーブレット解析によって時系列構造を維持したまま周波数成分に分解し、ロコモーション様式の間で活動周波数に差異のある筋を探索した。解析が終わった1個体のニホンザルの結果を概観すると、以下の知見が得られた：1) 主に 100Hz から 200Hz の周波数帯に後肢筋のパワーのピークが観察され、2) ロコモーション様式の間で活動周波数に明らかな差異は認められないが、3) パワーの違いが顕著であった。また、4) 半膜様筋、薄筋、中間広筋、ヒラメ筋、長母趾伸筋などでは低い周波数にパワーのピークが観察され、5) 腓腹筋外側頭と内側頭では高い周波数帯にも活動が認められた。 発表者：後藤遼佑、岡健司、中野良彦

<p>移動様式の変化がニホンザル中殿筋の筋機能へもたらす影響</p>	<p>-</p>	<p>2023年10月</p>	<p>第77回日本人類学会</p>	<p>中殿筋は、ヒト二足歩行時の片脚支持期に体幹の遊脚側への傾斜を抑制することで、円滑な二足歩行の実現に寄与する重要な骨格筋である。二足歩行時の側方安定性に重要とされる中殿筋の外転作用は、これまでのニホンザルを用いた実験的な研究から、四足歩行から二足歩行への移動運動様式の変化に伴って増加する可能性が示唆されている。しかし、先行研究はニホンザルの中殿筋の特徴を記述することどまっており、二足歩行に際して増加する外転作用が、質的及び量的にどの程度ヒトの中殿筋のそれに匹敵しうるのかについては明らかにはされてこなかった。そこで本研究では、近年発達している三次元スキャニング技術を用いて乾燥骨から筋骨格モデルを構築し、実際の二足歩行運動をモデルに入力することによって、ニホンザルとヒトの二足歩行時における中殿筋の筋作用の推定及び比較を試みた。 発表者：設楽哲弥、伊藤幸太、藤原峻宇、後藤遼佐、中野良彦</p>
<p>テナガザルとマカクの声帯振動特性と音響学的効果の比較</p>	<p>-</p>	<p>2023年10月</p>	<p>第77回日本人類学会</p>	<p>テナガザル類は、朗々と歌う「ソング」とよばれる音声行動で有名である。サル類は、声帯のすぐ近くに声帯膜を有して、主として後者の振動で発声する。ヒトでは喪失する。テナガザル類も声帯膜を有しているが、声帯に対して側方に離れる。本研究では、テナガザルとマカクの声帯 / 声帯膜の振動特性を比較し、その音響学的効果について検討した。生体で発声中の声帯振動特性をハイスピードカメラや EGG 等により解析した。さらに、摘出喉頭試料に気流を与えて振動を起こす吹鳴実験を行って、その結果を検証した。テナガザルでは、声帯膜ではなく、声帯振動の変化により、低音の地声から高音のファルセットへシフトする。その変化は、ヒトと同様である。一方、マカクでは、地声は声帯と声帯膜の同時振動によっており、そこから声帯膜振動へと遷移して、ファルセット的な音響効果を得る。テナガザルでの声帯膜の解剖学的位置の変化は、連続的に発せられる音声のつながりにコミュニケーション上に大きな意味があるソング音声を安定的に発するための身体的基盤であることが示唆された。 発表者：西村剛、宮地重弘、徳田功、Herbst Christian T、新宅勇太、古谷友紀、兼子明久、後藤遼佐、中野良彦</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名 岡野 由実

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 『一側性難聴者に対する配慮に関する調査』	—	2023年7月	第49回日本コミュニケーション障害学会	一側性難聴の当事者団体が運営するサイトを通じて、一側性難聴者がコミュニケーションの相手との関係性に応じて、日頃受けている配慮と希望する配慮についてWeb調査を実施した。相手との関係性が遠い場合に、当事者が希望する配慮と実際には乖離があること、場所の配慮は比較的得られやすいが音環境に対する配慮は得られにくいことが明らかとなった。 (単独での発表)
2. 『当事者団体に登録する一側性難聴者を対象とした聞こえの障害状況に関する調査』	—	2023年10月	第68回日本聴覚医学会総会・学術講演会	一側性難聴の当事者団体が運営するサイトを通じて、聴こえの主観的評価の質問紙(SSQ)を用いてアンケートを実施した。成人期発症の方が幼児期発症に比し困難感が高く、難聴側の聴力が軽度であれば空間の認識は保たれる一方で、音の質が低下する傾向が示された。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：岡野由実、久保田江里、古館佐起子、高橋優宏、岩崎聡
3. 『一側性難聴による障害の実態と支援』	—	2023年10月	第68回日本聴覚医学会総会・学術講演会	シンポジウム『一側性感音難聴の現状—その問題点と対応—』のシンポジストとして、これまでの研究成果を概観し、今後求められる支援について講演した。
4. 『当科小児難聴外来受診児に関する検討』	—	2023年11月	第18回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	東邦大学医療センター大森病院耳鼻咽喉科小児難聴外来の1年分の受診児統計をまとめ、重複障害児の聴覚管理のニーズが高いことを報告した。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共同発表者：瀬戸由記子、岡野由実、井上彰子、井関琢哉、関本龍太郎、松島康二、和田弘太

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科

氏名

遠藤俊介

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
レイトトーカーの理解と支援	共著	令和5年5月1日	学苑社	<p>編著：田中裕美子 著：遠藤俊介、金屋麻衣 担当：3章、4章（pp39-pp104） 第2章 だれが、どうやってLTを見つけるのか（p39-44） 第3章 LTってどんな子？（pp47-pp64） 第4章 LTへの適切なアプローチ（pp67-pp101）</p> <p>明らかな器質的・発達的問題がないにも関わらず、「ことばが遅い」2歳児を海外ではレイトトーカーと呼び、丁寧にフォローしていくことが推奨されている。しかし、日本でのレイトトーカーの理解は遅れている。本著は、日本で初めてのレイトトーカーに関する啓発書であり、症状の詳細や支援方法について整理した。</p>

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
8. 穴あきスピーチバルブの使用により音声言語発達が促された2症例（査読付）	共著	令和5年4月	言語聴覚研究, 20巻1号, pp35-pp43	<p>スピーチバルブ（speaking valve：以下SV）の使用は、気管切開児の音声言語発達を促進することが報告されている。しかし、本邦ではその有効性に関する報告は見られない。本論文では、穴あきSVを使用することにより段階的に通常のSVの装着が可能になり、音声言語発達が促進されたと考えられる2症例を報告した。穴あきSVは、穴なしSV比べて気管内圧が上昇しにくく、年少児にとって違和感が少ないと推測された。気管切開孔から呼気の一部を流出させる穴あきSVであっても、音声言語発達に一定の効果があることが示唆された。（筆頭論文） 著者名：遠藤俊介、清水加奈子、石田隼一郎、沢千晶、安達のどか、浅沼聡</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<学会発表>				
20. 当院NICUを退院した出生体重2500g未満児の言葉の遅れの検討	-	令和5年6月4日	第117回日本小児科学会島根地方会	<p>低出生体重児は言語発達のリスクを抱える。早期の言語の問題を発見し、フォローする体制を構築するための問題提起を行なった 発表者名：伊藤晃崇、日下優子、山本慧、吾郷真子、遠藤俊介、竹谷健</p>
21. 文の多様性による「早期言語発達評価法」の開発（第2報）-30ヶ月および36ヶ月定型発達児の文の多様性-	-	令和5年7月2日	第49回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 開催地：関西福祉科学大学（大阪）	<p>幼児の早期の文発達評価を目的とした「文の多様性による早期言語発達評価法」を開発するため、30ヶ月および36ヶ月のデータを収集・分析した。日本の2歳半、3歳の定型発達児の文の多様性の平均値を算出し提示した。 発表者名：遠藤俊介、田中裕美子、工藤芳幸、金屋麻衣（筆頭演者）</p>

22. 異なり語彙数の早期発達的变化と文の多様性との関係について— 30ヶ月および36か月定型発達児のデータ達から —	-	令和5年7月2日	第49回日本コミュニケーション障害学会学術講演会 開催地：関西福祉科学大学（大阪）	30ヶ月および36ヶ月の異なり語彙の発達について「文の多様性による早期言語発達評価法」開発データより分析を行なった。文の多様性評価では検出できないさらに早期の文発達の芽生えを動態動詞の異なり語彙数で評価できる可能性が示唆された。 発表者名：金屋麻衣、田中裕美子、遠藤俊介、工藤芳幸
23. 文復唱課題を用いた人工内耳装用児の言語評価の試み	-	令和5年10月5日	第68回日本音声言語医学会学術講演会 開催地：倉敷市民会館（岡山）	人工内耳装用児の言語問題を検出するため、文の復唱課題が有効であるかを検討した。定型発達児と人工内耳装用児を比較したところ、膠着文において人工内耳装用児の成績は低かった。人工内耳装用児の文構築の弱さを反映していると考えられた。 発表者名：野波尚子、田中裕美子、遠藤俊介、伊藤敬市
24. 日本語版文の多様性による早期言語発達評価法の開発-30ヶ月の定型発達児と言語発達障害リスク児の比較-	-	令和5年10月6日	第68回日本音声言語医学会学術講演会 開催地：倉敷市民会館（岡山）	30ヶ月の定型発達児の文の多様性データと、言語発達障害リスク児および多言語環境養育児のデータを比較して検討した。言語発達にリスクのある児は、定型発達児に比べて明らかに文の多様性が低く、対象児の自発的な文構築能力の弱さを反映している可能性が示唆された。 発表者名：遠藤俊介、田中裕美子、工藤芳幸、金屋麻衣（筆頭演者）
25. 日本語版文の多様性による早期言語発達評価法の開発	-	令和5年11月19日	第7回 群馬県言語聴覚士会学術研究発表会 オンライン開催	30ヶ月の定型発達児の文の多様性データと、言語発達障害リスク児および多言語環境養育児のデータを比較して検討した。 発表者名：遠藤俊介（筆頭演者）
<症例報告等>				
10. NPO法人どこでもことばドア 症例検討会	-	令和6年2月11日	NPO法人どこでもことばドア アドバンスセミナー 『言語発達障害児の評価アップデート』	長期的に経過を追った言語発達障害児について、各年齢ごとの評価の諸相、および言語の諸症状を詳細に分析し、報告した。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科 氏名 及川 翔

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Characteristics of drawing deficits in people with aphasia: Differences between symbolic and realistic drawn objects (失語症患者における描画障害の特徴:象徴的描画オブジェクトと現実的描画オブジェクトの違い) (査読付き)	共著	2023年12月	Noriyo Komori Int J Lang Commun Disord. 2023 P 1269-1283	失語症者群 (PWA) と健常対照 (HC) によって描かれたSO (象徴的に描かれたオブジェクト) とRO (リアルに描かれたオブジェクト) の識別率と誤解の数を比較した。PWAによる絵の誤解の傾向を明らかにし、PWAが描いた絵の識別率に関連する言語や認知能力を明らかにすることを目的とした。PWAによる図面では、SOは識別率が高く、ROは識別率が低く、誤解の種類が豊富だった。SOは描画のモチベーションを高める可能性がある。SOおよびROの識別可能性を改善するための介入は、それぞれの特徴を反映すべきである。識別率は、漢字の筆記スコアとのみ相関していた。日本語を母語とし、漢字の書き方やコミュニケーション能力を絵を描くことで向上させることができるPWAは、日本語を母国語とし、漢字の書き方やコミュニケーション能力を蓄えていた。 共著者: Ritsuo Hashimoto, Chihiro Jinushi, Momoko Uechi, Emi Hirano

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
軽度失語症者のコミュニケーション活動、参加に影響を与える環境因子に関する研究	-	令和6年3月2日, 3日	第25回 日本リハビリテーション連携科学学会	本研究の目的は、軽度失語症者を構成する環境因子がコミュニケーション活動、参加に与える影響を検討し、コミュニケーション支援における環境因子の重要性を明らかにすることである。その結果、軽度失語症者の主観的なコミュニケーションの困難さや家族とのコミュニケーションの困難さを引き起こす要因として家族との関係性や家族のコミュニケーション態度 (会話支援技術を含む) が重要である可能性が示唆された。結論としては、コミュニケーション支援においては、失語症者を構成する環境因子が促進因子となるように働きかけることが重要であると考えられる。本研究の結果は、生活期における失語症者のコミュニケーション支援を考える上での基礎的資料となり得る。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 言語聴覚学科

氏名

酒井哲郎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 発話明瞭度の信頼性について～理学療法士，作業療法士との比較による発話明瞭度の限界ならびに課題と聞き取り力向上の可能性の検討～	共著 (筆頭)	令和5年3月	群馬パース大学紀要	第29号 P.15～24 発話明瞭度の信頼性について理学療法士，作業療法士との比較を行い，発話明瞭度の限界ならびに課題と聞き取り力向上の可能性を検討した 酒井哲郎，白坂康俊，三浦康子，丹下弥生

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 新型コロナウイルス感染症に配慮した急性期一般病床上で動画をを用いて嚥下体操を行う方法の考案とその効果	-	令和5年6月23日	第24回 言語聴覚学会	口演 急性期一般病床上に入院している患者を対象に嚥下体操の動画を作成し実施したところ，反復唾液のみテスト(RSST)，改定水のみテスト(MWST)，最大開口量の改善が図れた・動画をを用いた嚥下体操を行うことは・COVID-19の流行下であっても効果的に誤嚥性肺炎の予防が図れる可能性が示唆された・ 酒井 哲郎，田島 由佳，横村 季代子
2 ハンドヘルドダイナモメーターを用いた摂食嚥下機能の筋力評価（予備的研究）	-	令和5年11月19日	第7回 学術研究発表会	口演 ハンドヘルドダイナモメーターでの嚥下筋力の測定は高い信頼性で測定できる可能性は示唆された 酒井哲郎，岡崎泰

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 松下 誠

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
臨床化学検査学 第3版	共著	2024年2月	医歯薬出版株式会社	臨床化学検査学（本書）は、臨床検査技師養成校の教科書として利用されている書籍であり、4000部/年の発行がある。戸塚実, 奥村伸雄, 浦山 修, 松下 誠 , 山内一由, 大川龍之介の6名で編集している。 なお、松下の分担執筆部分は下記の通りである。p86～115, p226～257, p417～419.

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Evaluation of the two-point calibration bromocresol green method, showing reduced deviation from the bromocresol purple method in sera from patients with hypoalbuminemia (査読有) 低アルブミン血症における改良BCP法との乖離を軽減した2点校正BCG法に関する研究	共著	2023年9月	Annals of Clinical Biochemistry, 2023 ; 60 ; 320-327.	BCG法は国際的に最も利用されている血清アルブミン測定法である。しかし、一部のグロブリンが反応することから、アルブミンに特異性が高い改良BCPとに乖離が認められる。今回、これらの問題を軽減することが可能な2点校正BCG法を考案し、その有用性を実施した。(本研究は埼玉県立大学大学院博士後期課程の学生の論文) 松下の担当部分 (特別研究指導教員) Tatsuya Iwasaki, Kazuki Nakajim, Yuji Hirowatari, and Makoto Matsushita
Development of blood collection tubes for glucose measurement using adenosine 3-phosphate and sodium fluoride as glycolytic inhibitors (査読有) ATPおよびフッ化ナトリウムを解糖阻剤とする新たな血糖測定用採血管の考案	共著	2024年3月	Annals of Clinical Biochemistry, 2024 ; 61 ; 91-97.	現在血糖測定用の採血管はフッ化ナトリウムを解糖阻剤として利用するものが使用されている。しかし、フッ化ナトリウムでは解糖阻効果不十分であり、真の血糖値を繁榮していない現状である。今回、ATPとフッ化ナトリウムを併用する新たな血糖測定採血管の検討を行い、従来のフッ化ナトリウム採血管よりも解糖阻効果が高いことを明らかとした。(本研究は埼玉県立大学大学院博士後期課程の学生の論文) 松下の主な担当部分 (特別研究指導教員) Yukio Kume, Yuji Hirowatari, Makoto Kurano, Yutaka Yatomi and Makoto Matsushita

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 1. 緒論および終点分析法における試薬の劣化	単著	2023年7月	<i>Medical Technology</i> , 51(7) : 723~730. 2023.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身につけることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。1回目は緒論および終点分析法における試薬の劣化について解説した。
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 2. 酵素活性測定における試薬の劣化の解析法 —ALPの例—	単著	2023年9月	<i>Medical Technology</i> , 51(9) : 950~958. 2023.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身につけることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。2回目は酵素活性測定における試薬の劣化の解析法について解説した。
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 3. 酵素検査での異常高活性血清における偽低値 —ASTの例—	単著	2023年11月	<i>Medical Technology</i> , 51(11) : 1185~1192. 2023.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身につけることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。3回目は酵素検査での異常高活性血清における偽低値について解説した。
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 4. M蛋白血清における濁りの影響 —Ca測定の例—	単著	2024年1月	<i>Medical Technology</i> , 52(1) : 86~92. 2024.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身につけることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。4回目はM蛋白血清における濁りの影響について解説した。
基礎から学ぶ生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法 5. 終点分析法における溶血の影響 —TP測定の例—	単著	2024年3月	<i>Medical Technology</i> , 52(3) : 282~290. 2024.	現在の生化学検査は、生化学自動分析装置を用いる方法が中心となり、異常検査データおよびピットフォールを含めて検査データを保証することが重要である。そのためには、生化学自動分析装置に備わっている反応タイムコースモニタの解析法を身につけることが大切となる。今回、生化学検査の反応タイムコースモニタ解析法を学ぶための全10回の連載を企画することとなった。5回目は終点分析法における溶血の影響について解説した。
基礎講座 ペルオキシダーゼ酵素法における還元性物質の影響	単著	2023年4月	<i>Medical Technology</i> , 51(4) : 381~386. 2023.	生化学検査で多用されているペルオキシダーゼ系酵素法は、アスコルビン酸等の還元性物質の共存で負誤差を生じる欠点が問題となっている。今回、グルコース、総コレステロール、トリグリセライド、尿酸、クレアチニンを例に、本酵素法における還元性物質の影響の特徴について解説した。

<p>特集 酵素検査の報告法および標準化対応法 — 主要8酵素の現状と課題を整理する — 3) CK (クレアチンキナーゼ)</p>	<p>共著</p>	<p>2023年5月</p>	<p><i>Medical Technology</i>, 51(5) : 453~457. 2023.</p>	<p>酵素検査は報告法を設定することによって、基準範囲の共有化および標準化が実施されている。今回、日本で報告法が設定されている主要8酵素について、その現状と課題を整理する特集を企画し、その中で、CK について解説した。 松下の担当：雑誌編集部より依頼され、本特集の企画・編集、およびCKについての解説を共著者とともに行った。 共著者：渡辺駿太、松下 誠</p>
<p>BCP改良法との乖離を低減する2点校正BCG法の考案 (シンポジウム)</p>	<p>一</p>	<p>2023年10月</p>	<p>第63回日本臨床化学会年次学術集会</p>	<p>アルブミンに特異性の高い改良BCP法のアルブミン値に一致する2点校正BCG法を考案し、本法がアルブミンの日常検査に有用であることを実証し、その内容を紹介した。(本研究は埼玉県立大学大学院博士後期課程の学生の特別研究論文の成果を紹介したものである) 松下の担当部分(特別研究指導教員) 共著者：巖崎達矢、中島一樹、廣渡祐史、松下 誠</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 亀子 光明

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
臨床検査データブック 2023-2024	共著	2023/1/15	株式会社 医学書院	アミノ酸・窒素化合物に関連する生化学検査分野で、アミノ酸分析2種類（チロシン、フェニルアラニン）の測定法、基準値、疾患との関連性について解説。また、近年は、MSによる分析が進み、今回はLC/MS、LC/MS/MSの測定原理やそれを用いての代謝異常についても解説。本書は臨床検査現場でデータブックとして参考にされる。

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床検査学科

氏名

古田島伸雄

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科

氏名

高橋克典

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
臨床検査学講座「最新臨床検査学講座 免疫検査学／輸血・移植検査学」	共著	2024年3月	医歯薬出版	編集：窪田哲郎、藤田清貴、高橋克典、梶原道子、他 分担執筆：窪田哲郎、藤田清貴、高橋克典、梶原道子、他 担当：第3章 V、VI、VIII（4～6）、4章 I、III（4）IV、VI（4）。免疫学の知識を応用した臨床検査の原理や意義を解説する教科書。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Isolation and Structure Determination of New Pyrones from Dictyostelium spp. Cellar Slime Molds Coincubated with Pseudomonas spp.、Nishimura T, Murotani T, Sasaki H, Uekusa Y, Eguchi H, Ishigaki H, Takahashi K, Kubohara Y, Kikuch H.、Molecules (Pseudomonas 属と共培養した細胞性粘菌由来の新規ピロンの単離と構造決定)（査読付）	共著	2024年3月	Molecules 29, 2143	Pseudomonas属と共培養した細胞性粘菌 D. discoïdiumから3種類の新規化合物の単離に成功し、その構造決定を行った。さらに、その化合物の薬理作用スクリーニングを実施し、いくつかの新薬候補としての可能性が示唆された。Takehiro Nishimura, Takuya Murotani, Hitomi Sasaki, Yoshinori Uekusa, Hiromi Eguchi, Hirotaka Ishigaki, <u>Katsunori Takahashi</u> , Yuzuru Kubohara and Haruhisa Kikuchi（実験の遂行、結果の解析、執筆を担当）

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
新規免疫制御剤の候補化合物に関する作用機序の解析	—	2023年10月	日本臨床化学会（東京）	細胞性粘菌の一種であるD. discoïdiumの柄細胞分化誘導因子DIF-1の構造をベースに作成したアナログ化合物の中からTリンパ球が産生するIL-2の産生を制御する化合物を見出し、その作用機序解析を行った結果を報告した。 石垣宏尚、藤田清貴、松下誠、高橋克典

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 岡山香里

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Molecular Evolutionary Analyses of the Fusion Protein Gene in Human Respirivirus 1 (ヒトレスピロウイルス1の融合タンパク質遺伝子の分子進化解析) (査読付き)	共著	令和5年6月 (2023)	Virus research, 199142-199142.	<p>HRV1 株の全長融合 (F) 遺伝子について、時間スケールの系統解析、ゲノム集団サイズ、および選択圧解析を実施した。その結果、HRV1 F 遺伝子が長年にわたって絶えず進化し、ヒトに感染してきた一方で、その遺伝子は比較的保存されている可能性があることを示唆された。</p> <p>共著者：Takahashi T, Akagawa M, Kimura R, Sada M, Shirai T, <u>Okayama K</u>, Hayashi Y, Kondo M, Takeda M, Ryo A, Kimura H. (共著者としてデータの収集と解析を行った。)</p>
2. Molecular Evolutionary Analyses of the RNA-Dependent RNA Polymerase (RdRp) Region and VP1 Gene in Human Norovirus Genotypes GII. P6-GII. 6 and GII. P7-GII. 6 (ヒトノロウイルス遺伝子型 GII. P6-GII. 6 および GII. P7-GII. 6 における RNA 依存性 RNA ポリメラーゼ (RdRp) 領域と VP1 遺伝子の分子進化解析) (査読付き)	共著	令和5年7月 (2023)	Viruses, 15, 1497.	<p>ヒトノロウイルス GII. P6-GII. 6 株と GII. P7-GII. 6 株について RdRp 領域と VP1 遺伝子を分析した。P6 型 RdRp 領域および VP1 遺伝子の進化速度は、P7 型 RdRp 領域および VP1 遺伝子よりも有意に速かった。また、VP1蛋白質の陽性選択部位は抗原性関連突出2ドメインに位置し、これらの部位は立体構造エピトープと重なっていた。これらの結果は、GII. P6-GII. 6 および GII. P7-GII. 6 の P6 型および P7 型 RdRp 領域間の組換えにより、GII. 6 VP1 遺伝子および VP1 タンパク質が独自に進化したことを示唆している。</p> <p>共著者：Takahashi T, Kimura R, Shirai T, Sada M, Sugai T, Murakami K, Harada K, Ito K, Matsushima Y, Mizukoshi F, <u>Okayama K</u>, Hayashi Y, Kondo M, Kageyama T, Suzuki Y, Ishii H, Ryo A, Katayama K, Fujita K, Kimura H. (共著者としてデータの収集と解析を行った。)</p>

<p>3. Preferential Tissue Sites of Different Cancer-Risk Groups of Human Papillomaviruses (ヒトパピローマウイルスにおける異なるがんリスクグループが好発する組織部位) (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年8月 (2023)</p>	<p>International Journal of Molecular Sciences, 24(17), 13151.</p>	<p>子宮頸部と膣を別々に擦過し、HPV型を同定した。HPV組織指向性は、どの HPV 型が1つの部位 (子宮頸部または膣) のみで陽性であるかを、その部位に優先的に感染するウイルスとして考慮することによって決定した。この方法により、すべての LR タイプは膣サンプルでのみ特定されるのに対し、HR タイプの 87% は子宮頸部で特定されることが明らかになった。</p> <p>共著者 : Okodo M, <u>Okayama K</u>, Sasagawa T, Teruya K, Settsu R, Mizuno S, Ishii Y, Oda M. (共著者としてデータの収集と解析と論文執筆を行った。)</p>
<p>4. Pathogen Profiles in Outpatients with Non-COVID-19 during the 7th Prevalent Period of COVID-19 in Gunma, Japan (群馬県における第 7 次 COVID-19 流行期における非 COVID-19 外来患者の病原体プロファイル) (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年8月 (2023)</p>	<p>Microorganisms, 11(9), 2142</p>	<p>日本の群馬県での第 7 回流行期に非新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 以外の呼吸器症状を引き起こした病原体を包括的にプロファイリングした。その結果、HAdV が40.0%で最も頻繁に検出されたウイルスであり、次いでcoryneformsが52.5%で最も頻繁に検出された細菌であった。これらの結果は、日本の群馬県における第 7 回流行期に、さまざまな呼吸器病原体が非新型コロナウイルス感染症患者と関連している可能性があることを示唆している。</p> <p>共著者 : Kimura H, Hayashi Y, Kiatagawa M, Yoshizaki M, Saito K, Harada K, <u>Okayama K</u>, Miura Y, Kimura R, Shirai T, Fujita K, Machida S, Ito K, Kurosawa I. (共著者としてデータの収集と解析と論文執筆を行った。)</p>
<p>5. Molecular Evolutionary Analyses of the Spike Protein Gene and Spike Protein in the SARS-CoV-2 Omicron Subvariants (SARS-CoV-2 オミクロン亜種におけるスパイクタンパク質遺伝子とスパイクタンパク質の分子進化解析) (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年9月 (2023)</p>	<p>Microorganisms, 11(9), 2336</p>	<p>SARS-CoV-2 オミクロンサブバリエントの進化をより深く理解するために、高度なバイオインフォマティクス技術を使用してスパイク (S) タンパク質遺伝子/Sタンパク質の分子進化解析を実行した。その結果 L452R、F486V、R493Q、および V490S などのいくつかの代表的な免疫原性に関連するアミノ酸変異がサブバリエントで見つかった。これらの置換は立体構造エピトープに関与しており、これらの変異が免疫原性とワクチン回避に影響を与えることを示唆している。</p> <p>共著者 : Nagasawa N, Kimura R, Akagawa M, Shirai T, Sada M, <u>Okayama K</u>, Sato-Fujimoto Y, Saito M, Kondo M, Katayama K, Ryo A, Kuroda M, Kimura H. (共著者としてデータの収集と解析と論文執筆を行った。)</p>
<p>6. Optimal Papanicolaou Smear Conditions for Manual Microdissection of Single Target Cells (単一標的細胞の手動マイクロダイセクションに最適なパパニコロウ塗抹標本条件) (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和5年11月 (2023)</p>	<p>Microorganisms 2023, 11(11), 2700</p>	<p>本研究は、MMDによる標的細胞分離の成功率を高め、細胞の拡散を防ぐためのPap塗抹標本の最適条件を調査することを目的とした。結果より、MMD を使用して湿潤パップ塗抹標本から標的細胞を分離すると、汚染のリスクが軽減され、HPV 検出の成功率が向上した。湿潤パップ塗抹標本を用いた MMD によって、新しい CIN 由来 HPV 感染細胞の特定が容易になる可能性がある。</p> <p>共著者 : <u>Okayama K</u>, Kakinuma M, Tajima S, Nagasawa N, Ishii Y, Oda M, Kimura H, Okodo M. (筆頭者としてデータの収集、解析と論文執筆を行った。)</p>

7. Cytological features of human papillomavirus - infected immature squamous metaplastic cells from cervical intraepithelial neoplasia grade 2 (子宮頸部上皮内腫瘍グレード2からのヒトパピローマウイルス感染未熟扁平上皮化生細胞の細胞学的特徴) (査読付き)	共著	令和5年12月 (2023)	Journal of Medical Virology, 95(12), e29311.	Pap塗抹標本上のCIN2のIMクラスターに感染するHPVを同定し、病変由来細胞の細胞学的特徴を明らかにすることである。結果より、好中球の2倍以上の核面積を持つ細胞や核の大きさに大きなばらつきがある細胞からなるIMクラスターは、HPVによって引き起こされる腫瘍細胞である可能性が高いことを示した。 共著者：Okodo M, <u>Okayama K</u> , Teruya K, Shinohara R, Mizuno S, Settsu R, Ishii Y, Fujii M, Kimura H, Oda M. (共著者としてデータの収集、解析を行った。)
8. 過去3年間の新型コロナウイルス感染症の総括と今後の対策 1 新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型 (SARS-CoV-20micron Variants/Subvariants) の分子進化に関する最新知見 (査読付き)	共著	令和5年12月 (2023)	感染制御と予防衛生, 7 (1), 4-8.	本稿では、過去3年間の新型コロナウイルス感染症の実態と今後の感染症対策に加え、新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型 (SARS-CoV-20micron Variants/Subvariants) の分子進化に関する最新知見を示した。 共著者：近土真由美, 木村龍介, 長澤紀佳, 岡山香里, 赤川真緒, 林由里子, 藤本友香, 白井達也, 齋藤慎, 原田和彦, 伊藤一人, 藤田清貴, 木村博一. (共著者としてデータの収集、解析を行った。)
9. Predictive Value of Various Atypical Cells for the Detection of Human Papillomavirus in Cervical Smears (子宮頸部塗抹標本におけるヒトパピローマウイルス検出のための各種異型細胞の予測) (査読付き)	共著	令和6年1月 (2024)	International Journal of Molecular Science, 25(2), 1212.	パパニコロウ (Pap) 塗抹標本におけるHPV 遺伝子型と二核細胞、不全角化細胞、巨細胞との関連を分析した。Uniplex E6/E7 PCR法およびMicrodissection法により、細胞標本中の二核細胞、不全角化細胞、および巨細胞の存在は、低悪性度扁平上皮内病変より上の子宮頸部病変または高度発癌性 HPV 遺伝子型による感染を予測しない可能性が示唆された。 共著者：Okayama K, Kakinuma M, Teruya K, Fujii M, Kimura H, Sasagawa T, Okodo M. (筆頭者としてデータの収集、解析と論文執筆を行った。)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. Special Interest Satellite Symposium 14: Studies by women's researchers aiming to eliminate cervico-vaginal cancer in Japan - Determination of HPV-risk type and tissue tropism by molecular mapping or single cell sorting method (特別研究サテライトシンポジウム14: 子宮頸癌撲滅を目指す女性研究者の研究-分子マッピング法やシングルセルソーティング法によるHPVリスク型と組織指向性の判定)	—	令和5年4月 (2023年)	35th International Papillomavirus Conference, Washington	single cell microdissection法およびUniplex E6/E7 PCR法によって明らかになった子宮頸部異型細胞の意義についてシンポジウムで概説した。
2. Preferential tissue sites of different cancer - risk groups of human papillomaviruses (さまざまな癌の優先組織部位 - ヒトパピローマウイルスのリスクグループ)	—	令和5年4月 (2023年)	35th International Papillomavirus Conference, Washington, DC	子宮頸部および膺サンプルの HPV 遺伝子型解析により特定の HPV 型の優先的な組織指向性が悪性進行の 1 つの要因である可能性が高いことを示唆した。 共同発表者：Okodo M, <u>Okayama K</u> , Sasagawa T, Oda M.

3. 子宮頸部細胞診標本のSingle cell microdissectionにおける細胞採取法の検討	—	令和5年5月 (2023年)	第64回日本臨床細胞学会春期大会, 名古屋	子宮頸部細胞標本におけるMicrodissection法の最適条件を検討し、湿潤標本からの採取が適切であることを明らかにした。 共同発表者：柿沼真央, <u>岡山香里</u> , 石井保吉, 藤井雅彦, 小田瑞恵, 大河戸光章.
4. 米国における臨床検査医学に関するオンライン講義の学習効果	—	令和5年5月 (2023年)	第72回日本医学検査学会, 群馬	臨床検査医学に関するオンライン講義を実施することによって、非常に高い学習効果を得られた。 共同発表者：林由里子, 木村鮎子, <u>岡山香里</u> , 長田誠, 藤田清貴.
5. 麻疹ウイルスH蛋白とウイルス受容体との分子間相互作用	—	令和5年5月 (2023年)	第72回日本医学検査学会, 群馬	麻疹ウイルスのH蛋白とウイルス受容体との分子間相互作用をバイオインフォマティクス技術によって調べ報告した。 共同発表者：長澤紀佳, <u>岡山香里</u> , 木村博一.
6. 細胞集塊のHPV解析によって得られたHSIL/中等度異形成と異型化生細胞に関する新知見	—	令和5年10月 (2023年)	第62回日本臨床細胞学会秋期大会, 福岡	HSILと異型化生の鑑別について、Microdissection法を用いてHPV遺伝子型を同定し、その所見を解析した。 共同発表者：大河戸光章, 石井保吉, <u>岡山香里</u> , 渋谷光, 藤井雅彦, 小田瑞恵.

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 林 由里子

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
1. Molecular evolutionary analyses of the fusion protein gene in human respirovirus 1. (ヒトレスピロウイルスにおける融合タンパク質遺伝子の分子進化解析)(査読付)	共著	令和5年 (2023年)	Virus Research 333:199142, 2023 (IF=5.0)	【概要】各国から採取したHRV1株の完全長融合遺伝子(F)について、時間スケールの系統解析、ゲノム集団サイズ解析、選択圧解析、抗原性解析を行った。その結果、HRV1 F遺伝子が長年にわたって絶えず進化し、ヒトに感染し、遺伝子が比較的保存されている可能性があることを示唆した。(共著者として実験の遂行、データ解析を担当) 共著者：Tomoko Takahashi, Mao Akagawa, Ryusuke Kimura, Mitsuru Sada, Tatsuya Shirai, Kaori Okayama, Yuriko Hayashi , Mayumi Kondo, Makoto Takeda, Akihide Ryo, Hirokazu Kimura.
2. Molecular Evolutionary Analyses of the RNA-Dependent RNA Polymerase (RdRp) Region and VP1 Gene in Human Norovirus Genotypes GII.P6-GII.6 and GII.P7-GII.6. (ヒトノロウイルス遺伝子型GII.P6-GII.6およびGII.P7-GII.6におけるRNA依存性RNAポリメラーゼ (RdRp) 領域とVP1遺伝子の分子進化解析)(査読付)	共著	令和5年 (2023年)	Viruses 15(7):1497, 2023 (IF=4.910)	【概要】ヒトノロウイルスの遺伝子型であるGII.P6-GII.6株とGII.P7-GII.6株の進化を高度なバイオインフォマティクス技術を使用し、分子進化的解析を行った。(共著者として実験の遂行、データ解析を担当) 共著者：Tomoko Takahashi, Ryusuke Kimura, Tatsuya Shirai, Mitsuru Sada, Toshiyuki Sugai, Kosuke Murakami, Kazuhiko Harada, Kazuto Ito, Yuki Matsushima, Fuminori Mizukoshi, Kaori Okayama, Yuriko Hayashi , Mayumi Kondo, Tsutomu Kageyama, Yoshiyuki Suzuki, Haruyuki Ishii, Akihide Ryo, Kazuhiko Katayama, Kiyotaka Fujita, Hirokazu Kimura.
3. Pathogen Profiles in Outpatients with Non-COVID-19 during the 7th Prevalent Period of COVID-19 in Gunma, Japan.(群馬県における新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の第7流行期における非新型コロナウイルス感染症外来患者の病原体プロフィール)(査読付)	共著	令和5年 (2023年)	Microorganisms 11(9), 2142, 2023 (IF=4.167)	【概要】群馬県で第7次流行期にCOVID-19以外の呼吸器症状を引き起こす病原体を、次世代シーケンサー(NGS)と高度なバイオインフォマティクス技術を組み合わせたディープシーケンシングを用いて包括的にプロファイリングした。(責任著者として研究企画、論文執筆を行った。)(筆頭論文) 共著者：Hirokazu Kimura*, Yuriko Hayashi* , Masanari Kitagawa, Miwa Yoshizaki, Kensuke Saito, Kazuhiko Harada, Kaori Okayama, Yusuke Miura, Ryusuke Kimura, Tatsuya Shirai, Kiyotaka Fujita, Suguru Machida, Kazuto Ito, Isao Kurosawa.

4. Infant case of severe immune thrombocytopenia caused by COVID-19 infection. (COVID-19感染による重症免疫性血小板減少症の乳児例)(査読付)	共著	令和5年 (2023年)	eJHaem 5;4(4):1148-1151, 2023 (IF=1.7)	【概要】免疫性血小板減少症(ITP)は、多数のウイルスによって引き起こされる一般的な小児急性自己免疫性出血性疾患であり、孤立性血小板減少症を特徴としている。COVID-19感染によるITPの症例は成人で報告されているが、小児科の報告は限られている。ここでは、1歳女児の症例を紹介した。(共著者として実験の遂行,データ解析を担当) 共著者Tatsuya Anzai, Naomi Nakashima, Hiroyuki Betsui, Yuta Kawahara, Yuriko Hayashi , Hirokazu Kimura, Akira Shimada
5. 新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型 (SARS-CoV-2 Omicron Variants/Subvariants) の分子進化に関する最新知見.(査読付)	共著	令和5年 (2023年)	感染制御と予防衛生 7(1):4-8	【概要】新型コロナウイルス感染症のオミクロン変異型・亜変異型を中心とした当該ウイルスS蛋白の分子進化を中心とした最新知見について概説した。(共著者として、研究企画・論文執筆を行った。) 共著者：近土真由美, 木村龍介, 長澤紀佳, 岡山香里, 赤川真緒, 林由里子, 藤本友香, 白井達也, 齋藤慎, 原田和彦, 伊藤一人, 藤田清貴, 木村博一
6. Severe Hemolytic Anemia in a Glucose-6-phosphate Dehydrogenase-deficient Child with COVID-19.(COVID-19のグルコース-6-リン酸デヒドロゲナーゼ欠損症における重度の溶血性貧血)(査読付)	共著	令和6年 (2024年)	Pediatric International 66(1):e15717, 2024 (IF=1.617)	【概要】新型コロナウイルスの感染に反応したマクロファージの活性化は、活性酸素種の生産を誘発し宿主の組織に酸化ストレスを引き起こす可能性がある。COVID-19の治療に使用されるヒドロキシクロロキンがG6PD欠損症の人に溶血を引き起こす可能性がある症例がいくつか報告されている。また、一方でCOVID-19による溶血はG6PD欠損症の診断につながる。G6PD欠損症は日本ではまれであるが、COVID-19パンデミック後の医療ではCOVID-19によって引き起こされる重度の溶血性貧血に注意する必要がある。(共著者として実験の遂行,データ解析を担当) 共著者：Mika Dofuku, Daisuke Tamura, Marina Mizobe, Koyuru Kurane, Yuriko Hayashi , Hirokazu Kimura, Akira Shimada.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 新型コロナウイルスワクチン接種による発熱の有無が中和抗体価に及ぼす影響	—	2023年5月20日	第72回医学検査学会	【概要】新型コロナウイルスワクチン1回接種, 2回接種者を対象に、副反応による発熱の有無が抗体価に与える影響について検討し報告した。 共著者: 藤本友香, 梁明秀, 宮川敬, 浅見知市郎, 林由里子 , 亀子光明, 小河原はつ江, 木村博一
2. 米国における臨床検査医学に関するオンライン講義の学習効果	—	2023年5月20日	第72回医学検査学会	【概要】米国Emory Healthcare Medical Laboratory Science Programのメディカルダイレクターを招いた講演会を開催し、米国における臨床検査医学及び臨床検査技師教育プログラムに関して学生がオンラインによる英語の講義を受ける機会を設け、その学習効果について検討し報告した。 共著者： 林由里子 , 木村 鮎子, 岡山 香里, 長田 誠, 藤田 清貴

3. 末梢血におけるCD172aの発現分布解析	—	2023/7/20	第34回日本サイトメリー学会学術集会	<p>【概要】先行研究において、培養神経細胞中のCD172aが、インフラマソームと呼ばれる炎症反応の惹起を制御する細胞内蛋白複合体の制御因子であるチオレドキシニン結合タンパク質(TXNIP)の発現をコントロールしている可能性を見出し、CD172aの炎症反応制御への関与を解明する足掛かりとして、全身の炎症を制御するヒト末梢血細胞におけるCD172aの発現分布解析を行い報告した。</p> <p>共著者：渡辺 莉乃, 佐々木 真白, 宮崎 愛斗, 藤本 友香, 神宮 大輝, 大西 浩史, 長田 誠, 松下 誠, 藤田</p>
4. SIRPα欠損によるCD11c陽性ミクログリア出現領域の解析	—	2023年9月28日	第70 回北関東医学会総会	<p>【概要】先行研究において、中枢神経系のミクログリアに発現する膜型分子 SIRPα が、保護的ミクログリア活性化を抑制する可能性を見出しており、ミクログリア(MG) 特異的 SIRPα 欠損(MG-SIRPα cKO) マウスでは、脱髄モデルに抵抗性を示す。本研究では、SIRPα 欠損によりCD11c + MG が誘導される白質領域の特徴をもとに、その役割について検討し報告した。</p> <p>共著者：尾池 恵摘, 水谷 瑠依, 榛澤 春哉, 今井 武史, 浦野 江里子, 松本 映子, 林由里子, 大西 浩史</p>
5. SIRPα欠損ミクログリアの遺伝子発現プロファイル解析	—	2023年9月28日	第70 回北関東医学会総会	<p>【概要】MG 特異的 SIRPα ノックアウト(MG-SIRPα cKO) マウスの脳内白質では、CD11c + MG が増加し、白質脱髄モデルや、加齢に伴う運動学習機能低下へ抵抗性を示すようになることから、SIRPα 欠損で誘導される CD11c + MGも保護的機能を持つ可能性が考えられる。今回は、MG-SIRPα cKO マウスから単離した MG について、RNA-seq 解析を行い、SIRPα 欠損 MG の特徴を検討し報告した。</p> <p>共著者：榛澤 春哉, 水谷 瑠依, 尾池 恵摘, 今井 武史, 浦野 江里子, 松本 映子, 林由里子, 大西 浩史</p>
6. 膜型分子SIRPαによる保護的ミクログリア活性化制御	—	2023年9月28日	第70 回北関東医学会総会	<p>【概要】CD11c + ミクログリア(MG)は正常な脳にはほとんど存在しないが、神経変性疾患や老化後の脳で観察される。近年、CD11c+ MGとしてDisease-Associated Microglia (DAM) や White matter-Associated Microglia (WAM) が報告され、神経変性疾患や老化に対して保護機能を持つことが予測されている。SIRPα 欠損 MG がDAM や WAM に類似した性質を持ち、白質病変や加齢に伴う脳組織障害に対して保護作用を持つ可能性を想定しており、本研究では、SIRPα 欠損 MG の性質について遺伝子、タンパク質レベルでの解析を行い報告した。</p> <p>共著者：水谷 瑠依, 尾池 恵摘, 榛澤 春哉, 今井 武史, 浦野 江里子, 松本 映子, 林由里子, 大西 浩史</p>
7. Affinity電気泳動によるmonoclonal蛋白の新規簡易同定法に関する研究	—	2023年10月28日	第63回日本臨床化学会年次学術集会	<p>【概要】一般病院でも実施可能なM蛋白同定法として、高価な抗血清を使用せず、出現頻度の高いM蛋白クラスであるIgG, IgA, IgMの各免疫グロブリンクラスに親和性のある担体・試薬と反応させた試料を直接電気泳動するAffinity電気泳動法によるM蛋白の新規簡易同定法の開発・確立を目指し検討を行い報告した。</p> <p>共著者：宮木 聡恵, 神宮 大輝, 林由里子, 藤田 清貴</p>
9. Ultrafree-MC 遠心フィルターユニットを用いたProtein Gによる簡易IgG精製法の検討	—	2023年10月28日	第63回日本臨床化学会年次学術集会	<p>【概要】臨床検査測定系に影響を及ぼす異常蛋白質は、そのほとんどが質的異常を示す免疫グロブリンのmonoclonal (M) 蛋白であり、多発性骨髄腫や原発性マクログロブリン血症例では病態を反映しない異常値を示すことが報告されている。異常蛋白質の解析に用いる免疫グロブリン(IgG)の精製に市販のUltrafree-MC遠心フィルターユニットを用いコストの削減を図り、短時間でIgGの精製を行う簡易法の検討を行い報告した。</p> <p>共著者：長澤 紀佳, 林由里子, 松下 誠, 藤田 清貴</p>

<p>10. 蛍光酵素免疫測定法によるB型肝炎ウイルスHBs抗体価の有用性に関する研究</p>	<p>—</p>	<p>2023/10/28</p>	<p>第63回日本臨床化学会年次学術集会</p>	<p>【概要】B型肝炎ワクチン接種の効果判について、ガイドラインには定蛍光酵素免疫測定法(FEIA法)についての記載はなく、FEIA法の結果では実習受け入れに不十分とし、再測定を求める実習施設もある。そこで、FEIA法による測定値をワクチン接種の効果判定に用いることが可能であるかを検討することを目的として、同一検体におけるFEIA法とガイドラインに示されているCLEIA法での測定結果の比較を行い、FEIA法の有用性について検討し報告した。 共著者: 高橋あゆ子, 林由里子, 角田紀代美, 染谷凱斗, 亀子光明, 藤田清貴</p>
<p>11. ミクログリア活性化チェックポイントSIRPα欠損による遺伝子発現変化の解析</p>	<p>—</p>	<p>2023年10月31日</p>	<p>第96回日本生化学会大会</p>	<p>【概要】MG特異的SIRPαノックアウト(MG-SIRPα cKO)マウスでは、CD11c+ MGが白質領域に自発的に現れる。MG-SIRPα cKOマウスは、脱髄モデルや加齢に伴う運動学習障害に抵抗性を示し、SIRPα欠損MGは白質病変や加齢に伴う脳組織損傷に対する保護効果を持つ可能性があることを示唆していることから、MG-SIRPα cKOマウスの白質組織のトランスクリプトーム解析を行い報告した。 共著者: 榛澤 春哉, 水谷 瑠依, 尾池 恵摘, 今井 武史, 浦野 江里子, 松本 映子, 神宮 大輝, 林由里子, 的崎 尚 大西 浩中</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 木村 鮎子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Proteomic analysis for studying antibiotic resistance mechanisms of pseudomonas aeruginosa clinical isolates (緑膿菌臨床分離株を用いたプロテオーム解析による抗菌薬耐性機構の解明) (学会口頭発表)	—	2023/5/10	Joint 11th Asia Oceania Human Proteome Organization (AOHUPO) and 7th Asia Oceania Agricultural Proteomics Organization (AOAPO) Congress	緑膿菌治療に用いられる3系統の薬剤に耐性をもつ緑膿菌多剤耐性菌臨床分離株と実験室標準株を用いたプロテオーム・リン酸化プロテオーム解析により、多剤耐性菌では自然耐性に関わる薬剤排出ポンプやβラクタム系薬剤の分解酵素の増加に加えて、獲得耐性に関わるバイオフィーム形成に寄与する分泌系タンパク質や種々の転写因子のタンパク質・リン酸化レベルの増加が見られることが分かった。 共著者：Ayuko Kimura, Yukari Miyano, Kaori Iwano, Haruyoshi Tomita, Hidetada Hirakawa.
ヒト正常繊維芽細胞株 TIG-1を用いたユビキトーム解析による細胞老化機構の解析 (学会口頭発表)	—	2023/7/26	日本プロテオーム2023年大会	老化・若齢モデル細胞株であるTIG1-50, TIG1-20細胞株を用いたユビキチン化タンパク質のプロテオーム解析により、老化に伴うユビキチン-プロテアソーム系およびオートファジーを介したタンパク質分解系の変化の解析を行った。結果として、老化モデル細胞では、アポトーシスやタンパク質ユビキチン化に関わる膜タンパク質や、パーキンソン病・アルツハイマー病などの老化関連疾患に関わるタンパク質のユビキチン化レベルが向上していることが明らかになった。 共著者：木村 鮎子, 岩野 かおり

<p>米国における臨床検査医学に関するオンライン講義の学習効果 (学会ポスター発表)</p>	<p>—</p>	<p>2023/5/21</p>	<p>第72回日本医学検査学会</p>	<p>著者らは、群馬パース大学国際交流センターの取り組みの一環として、本学学生を対象に、Emory Healthcare Medical Laboratory Science Programのメディカルディレクターを招いた講演会を開催し、米国における臨床検査技師教育プログラムに関するオンラインによる英語の講義を開催した。講義資料に簡単な和訳と注釈をつけて配布し、講演後は学生が直接英語で質問し、講師からの解答を教員が通訳するなどすることで、学生が海外に目を向け、教育制度・臨床検査医学の位置づけの違いを学ぶ良い機会を作ることができた一方で、今後取り組むべき課題も明らかになった。 共著者：林 由里子, 木村 鮎子, 岡山 香里, 長田 誠, 藤田 清貴</p>
--	----------	------------------	---------------------	---

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 荒木 泰行

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
外壁改修工事期間におけるVOC濃度と培養成績の影響	-	2023年7月27-28日	第41回日本受精着床学会 総会・学術講演会	ART施設における揮発性有機化合物（VOC）濃度が高いと胚発生率や妊娠率に影響を与えるという報告がある（N Agarwal. et al. J Reprod. 2017）。当院では 2022年11月に外壁改修工事を行ったが、塗装工事における塗料にはVOCが含まれている為、改修工事前後の培養成績を検討した。空気切替装置を外気と遮断した状態でも室内のVOC濃度に上昇が認められた。室内環境中における2ppm程のVOC濃度変動でも胚盤胞形成速度やD5良好胚盤胞率、総胚盤胞率の胚発生に影響を与える事が示唆された。藤村佳子、大場奈穂子、中楯真朗、神沢典子、剣持智恵美、加藤喜愛、大村生和子、八木遥香、荒木泰行、上村り子、山口貴史、久保祐子、佐藤雄一
血清フェリチン値が体外受精および胚発育に与える影響～当院初診患者における 6 年間の成績より～	-	2023年7月27-28日	第41回日本受精着床学会 総会・学術講演会	体外受精成績に影響を与える因子が初診時の採血データとBMI値の中に存在するかどうかを網羅的に検索した結果、採卵時の卵獲得の有無に影響を与える因子としてHbA1c値とTP値を認めた。また、c-IVFにおいてはAMH値が関連因子と考えられた。新鮮初期胚移植383症例において臨床妊娠を目的変数とした結果、採卵時妻年齢とAMH値が関連因子と考えられた。臨床妊娠が確認された164症例において流産を目的変数とした結果、採卵時妻年齢が関連因子と考えられた。結論として、卵獲得に影響を与える因子としてHbA1c値とTP値が認められた。体外受精成績に影響を与える因子として採卵時妻年齢とAMH値が認められた。剣持智恵美、藤村佳子、大場奈穂子、中楯真朗、神沢典子、加藤喜愛、大村生和子、八木遥香、荒木泰行、上村り子、山口貴史、久保祐子、佐藤雄一

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 石垣宏尚

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
Isolation and Structure Determination of New Pyrones from Dictyostelium spp. Cellular Slime Molds Coincubated with Pseudomonas spp (シュードモナス属と共培養した細胞性粘菌より得られた新規ピロンの単利と構造決定) (査読付)	共著	2024年3月	Molecules 2024. 29 (9). 2143	シュードモナス属との共培養した細胞性粘菌より3つの新規化合物を単離した。単離されたものについて、構造決定を行った。その結果、新規化合物探索において、今後の可能性が示唆された。 Nishimura T, Murotani T, Sasaki H, Uekusa Y, Eguchi H, <u>Ishigaki H</u> , Takahashi K, Kubohara Y, Kikuchi H.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
新規免疫制御剤の候補化合物に関する作用機序の解析	-	2023年10月	日本臨床化学会（東京）	細胞性粘菌由来の分化誘導因子を構造変化させ合成された化合物より、Tリンパ球が産生するIL-2の発現に影響を与える物質を見出した。細胞内シグナル解析の結果、IL-2制御メカニズムは転写因子NFAT、AP-1、NFkBのいずれかの制御に関与していることが判明した。本研究の結果をもとに、副作用の少ない新規免疫制御剤の候補探索を行っていく。 石垣 宏尚, 藤田 清貴, 松下 誠, 高橋 克典

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 三浦 佑介

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Pathogen Profiles in Outpatients with Non-COVID-19 during the 7th Prevalent Period of COVID-19 in Gunma, Japan (群馬県のCOVID-19 第7波における非COVID-19外来患者の病原体プロファイル) (査読付)	共著	2023年8月	Microorganisms 2023, 11(9), 2142	次世代シーケンサーによるバイオインフォマティクス解析を用いて、群馬県でのCOVID-19 第7波におけるCOVID-19以外の呼吸器症状を引き起こした病原体を包括的にプロファイリングした。およそ半数の患者から複数の病原体が検出されており、病原体の正確な同定には詳細な分析が必要であると考えられた。COVID-19流行期でも様々な病原体が発熱や呼吸器感染症に関与していることが明らかとなった。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) Hirokazu Kimura, Yuriko Hayashi, Masanari Kitagawa, Miwa Yoshizaki, Kensuke Saito, Kazuhiko Harada, Kaori Okayama, Yusuke Miura , Ryusuke Kimura, Tatsuya Shirai, Kiyotaka Fujita, Suguru Machida, Kazuto Ito, and Isao Kurosawa

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 高橋 あゆ子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 蛍光酵素免疫測定法によるB型肝炎ウイルスHBs抗体価の有用性に関する研究	—	2023年10月28日	第63回日本臨床化学会年次学術集会	B型肝炎ワクチン接種の効果判定について、ガイドラインには蛍光酵素免疫測定法(FEIA法)についての記載はなく、FEIA法の結果では実習受け入れに不十分とし、再測定を求める実習施設もあった。そこで、FEIA法による測定値をワクチン接種の効果判定に用いることが可能であるかを検討することを目的として、同一検体におけるFEIA法とガイドラインに示されているCLEIA法での測定結果の比較を行い、FEIA法の有用性について検討し報告した。 共著者：高橋あゆ子、林由里子、角田紀代美、染谷凱斗、亀子光明、藤田清貴

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 検査技術学科 氏名 長澤 紀佳

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. Molecular Evolutionary Analyses of the Spike Protein Gene and Spike Protein in the SARS-CoV-2 Omicron Subvariants (SARS-CoV-2オミクロン亜種におけるスパイク蛋白質遺伝子とスパイク蛋白質の分子進化的解析) (査読付)	共著	2023年9月18日	Microorganisms. 2023 ; 11 (9) : 2336	SARS-CoV-2オミクロン亜型のS遺伝子分子進化的解析を行った。XBB. 1. 5およびXBB. 1. 16では、RBDに特異的なアミノ酸変異があることが推定された。さらに代表的な免疫原性に関連するアミノ酸変異も見られ、コンフォメーション・エピトープに関与しており、これらの変異が免疫原性とワクチン回避に影響を与えることを示唆している。さらに、これらの変異は正の選択部位として同定され、これらの結果は、オミクロン亜型が急速に進化し、コンフォメーション・エピトープで観察された変異が、BA. 4/BA. 5亜型を含むmRNAワクチンのような二価ワクチンを含む現行のワクチンの有効性を低下させる可能性があることを示唆している。 共著者：Nagasawa N, Kimura R, Akagawa M, Shirai T, Sada M, Okayama K, Sato-Fujimoto Y, Saito M, Kondo M, Katayama K, Ryo A, Kuroda M, Kimura H.
2. Optimal Papanicolaou Smear Conditions for Manual Microdissection of Single Target Cells (単一標的細胞のマニュアルマイクロダイセクションのための最適パパニコロウ塗抹条件) (査読付)	共著	2023年11月3日	Microorganisms . 2023 Nov 3;11(11):2700.	本研究の目的は、手動マイクロダイセクション(MMD)による標的細胞分離の成功率を高め、細胞拡散を防止するためのパパニコロウ(Pap)塗抹標本の最適条件を検討するため、HPV42陽性のSurePath™液状細胞診ケースを用いてパップスマアを作製し、HPV検出率に基づくMMDによる標的細胞分離の成功率を検証した。HPV42は乾燥パップスマアおよび湿潤パップスマアの検出率に有意差はなかった。MMDを用いた湿潤パップスマアからの標的細胞の分離は、コンタミネーションのリスクを低減し、HPV検出の成功率を増加させた。本研究により、湿潤パップスマアを用いたMMDによる新たなCIN由来HPV感染細胞の同定が容易になる可能性を報告した。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Okayama K, Kakinuma M, Tajima S, Nagasawa N, Ishii Y, Oda M, Kimura H, Okodo M
3. 新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型(SARS-CoV-2 Omicron Variants/Subvariants)の分子進化に関する最新知見	共著	2023年12月22日	感染制御と予防衛生 Vol. 7 No. 1 pp4-8	SARS-CoV-2の主要抗原S蛋白を主体とした分子進化を中心とした最賃知見について概説した。XBB系統亜変異型のをSimPlot解析を用いて明らかにし、オミクロン亜変異型S蛋白の立体構造からBA. 4/BA. 5亜変異型配合ワクチンの効果について考察した。 (近土真由美, 木村龍介, 長澤紀佳, 岡山香里, 赤川真緒, 林由里子, 藤本友香, 白井達也, 齋藤慎, 原田和彦, 伊藤一人, 藤田清貴, 木村博一)

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 麻疹ウイルスH蛋白とウイルス受容体との分子間相互作用	—	2023年5月20日	第72回日本医学検査学会Gメッセ群馬・高崎芸術劇場	麻疹ウイルス (MeV) は小児の主要な死亡原因となっており再感染は非常に稀であるとされているが、その詳細な機序は未だ不明である。本研究ではバイオインフォマティクス技術を用いてMeVの宿主細胞への感染・再感染予防機序の理解を深めることを目的とした。その結果、立体配座エビトープと中和抗体結合部位の一致がMeVの再感染を抑制すること、中和抗体から逃れる変異は細胞受容体との結合能低下を招き、本ウイルス感染にとって有益でないことを明らかにした。(代表) 長澤紀佳, 岡山香里, 木村博一
2. Ultrafree-MC遠心フィルターユニットを用いたProtein G による簡易 IgG精製法の検討	—	2023年10月28日	第63回日本臨床化学会学術集会 御茶ノ水ソラカンファレンスセンター	Ultrafree-MC遠心フィルターと比較的少量の担体を用いたIgG精製法を報告した。新規簡易精製法では、従来使用されてきたカラムを用いた精製法と比較し精製度にほとんど差がなかったことが確認された。また、この新規精製法では、これまで問題視されてきた長時間を要する点、高コストの点、操作が煩雑である点などを解決することができた。さらに、簡易な操作で蛋白質を精製することができることから、臨床現場でもM蛋白などの異常蛋白の解明が容易になり、その応用が期待される。(代表) 長澤紀佳, 林由里子, 松下誠, 藤田清貴

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 渡邊 浩

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
医療機関における職業被ばくに関する放射線管理状況調査報告（2021年度の状況）（査読付）	共著	2024年2月	日本診療放射線技師会雑誌 2024 Vol. 71 No. 857 pp26-35	職業被ばくに関する改正法令の2022年4月1日施行を契機に、医療従事者の職業被ばく低減が求められている。本論文では全国の医療機関を対象に2021年度の放射線業務従事者の放射線管理状況を調査した結果をまとめた論文である。職業被ばく低減には教育が基本であり、その拡充を求めた。研究論文執筆責任者（総括）を務めた。渡邊 浩、山本和幸、坂本 肇、今尾 仁、瀬下幸彦、加藤英幸、竹中 完、赤羽恵一、神田玲子、鳥巢健二、三上容司、細野 眞

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
法改正後の放射線管理状況の変化	—	2023年4月	第79回日本放射線技術学会総会学術大会、JSRT関係法令委員会フォーラム「適切な職業被ばく管理の在り方」（横浜）	医療従事者の職業被ばく低減が求められている。改正電離放射線障害防止規則の施行前と後を比較した研究成果として「法改正後の放射線管理状況の変化」を発表した。（講演 渡邊 浩）
ERCP検査における防護材の鉛当量と重量を勘案した術者線量低減方法に関する研究	—	2023年12月	日本放射線技術学会東京・関東支部合同研究発表大会2023（東京）	IVR術者の職業被ばく低減が求められている。ERCP検査における防護材の鉛当量と重量を勘案した術者線量低減方法に関する研究成果を発表した。我々が改良した防護材が重量が少なく線量低減効果が高かった。研究総括責任者。（新庄博斗、鈴木 格、竹澤綺梨、樋沢杏羽、浅田 光、渡邊 浩）
ERCP検査における防護材の鉛当量の差異と室内位置による術者水晶体線量に関する研究	—	2023年12月	日本放射線技術学会東京・関東支部合同研究発表大会2023（東京）	IVR術者の職業被ばく低減が求められている。ERCP検査における防護材の鉛当量の差異と室内位置による術者水晶体線量に関する研究成果を発表した。防護材の線量低減効果はアイソセンタからの距離に関係なく同じであることを示した。研究総括責任者。（笠原脩平、入山拓斗、小見 翼、小島美々子、浅田 光、渡邊 浩）
放射線管理に携わる人材育成への課題 ～最新動向を踏まえて～ WEB開催	—	2023年3月	日本放射線公衆安全学会 第10回ミニ講習会（WEB開催）	放射線管理に携わる人材育成が医療現場の課題になっている。医療被ばくや職業被ばく管理例を参考に放射線管理の人材育成方法を示した。また、医療機関の人材育成方法の例を紹介した。（講演 渡邊 浩）

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科

氏名

酒井健一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
Geant4シミュレーションを用いたPET装置の新規検出器の開発に関する研究	—	2023. 10. 29	第51回日本放射線技術学会秋季学術大会（名古屋）	従来のPET装置の放射線検出器に用いられている無機シンチレータは発光量が多く、エネルギーの分解能が良好であるが、蛍光減衰時間が比較的遅いため、時間分解能が悪い特性がある。そこで、本研究では新規のシンチレータを見つけるべく加工容易なプラスチックシンチレータの添加物による効果をGeant4シミュレーションを行い、最適シンチの検討を行った。その結果、5wt%の鉛を添加したことで、期待性能を落とすことなく改善できることを見出した。共同研究につき、本人担当部分抽出不可。 共同発表者： 佐藤正大、山崎真、 酒井健一

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科

氏名

西澤 徹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
放射線取扱主任者試験対策シリーズ（2023）放射性同位元素等規制法	単著	2023年5月1日	デザインエッグ社	授業およびセミナーで使用したテキスト&問題集を書籍化した。主任者試験の過去問題を分析し、効率的に学習できるようきめ細やかな解説を行った点に特徴がある。また、多くの演習問題を配置し、学習効率を高められるような編集している。ISBN(978-4-8150-3762-8)を取得し、書店等で購入できるようにした。全頁（pp1～pp357）にわたり、単独で作成した。

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
			126	

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 加藤英樹

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
視線検索パターンを用いた乳房における腫瘍状陰影の領域抽出。（査読付）	共著	令和6年1月	日本放射線技術学会雑誌, Vol. 80, No. 5, pp487-489	<p>Pix2Pix, UNIT を用いて、視線計測器で得た観察者の注視頻度を表すフォーカス画像から、未知の乳房画像上の腫瘍状陰影を強調したようなフォーカス画像を生成した。3つの画像生成モデルのうち、最も有用であったのは UNITであり、生成されたフォーカス画像の腫瘍状陰影付近で、観察者が注視している時間が長く、腫瘍状の陰影領域の抽出能も高かった。</p> <p>・共同研究のため担当部抽出はできない。</p> <p>奥村英一郎, 加藤英樹, 本元 強, 鈴木伸忠, 奥村恵理香, 東川拓治, 北村茂三, 安藤二郎, 石田隆行.</p>

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
深層学習を用いた自動着色処理による胸部X線画像のカラー化の効果	-	令和5年10月	第51回 日本放射線技術学会秋季学術大会 (名古屋市)	<p>深層学習を用いた胸部X線画像のカラー化が、画像認識能を改善しうるかを明らかにするために、画像認識能に対する影響を対比較法によって検証した。プログラム言語は、Python, 学習ライブラリはPytorchを使用し白黒X線画像をカラー画像化した。</p> <p>各解剖構造の認識は、観察者間変動と試料間変動が大きく、現時点でカラー化が明らかに有用であるとは言えない結果であった。医用画像モニタの品質管理を担当した。</p> <p>丸山 星, 渡部晴之、加藤英樹</p>
Can the generative AI pass the national examination for the Radiological Technologist? : A Comparison of Japan and Taiwan (生成AIは診療放射線技師国家試験に合格できるのか? : 日本と台湾の比較)	-	令和6年3月	The 57st Annual Meeting of Taiwan Society of Radiological Technologist, 25th East Asia Conference of Radiological Technologist. Conference book. (2024. May)	<p>生成AIを用いて、政府が公開している過去の国家試験問題について、5年間分を対象に正答率を求めた。生成AIの回答は、日本及び台湾において、合格基準を超えた。TWSRT (中華民国医事放射線学会) Taiwan (Taipei) において口述発表した。主に問題とAI回答の入出力を担当した。</p> <p>Hideki Kato, Sho Maruyama, Masayuki Shimosegawa, Chiung-Wen Kuo</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 岩井 譜憲

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「自己学習のための診療放射線技師国家試験学習支援ツールの作成と実践」のタイトルで発表	—	2023年8月	第17回日本診療放射線学教育学会学術集会（東京）	<p>概要： 国家試験の指導を進めている中で、毎日きちんと学習しているのだが模擬試験の結果に結びつかず、成績の向上が見られない学生が一定数存在した。これらの学生は上記のような入学制度の多様化により集中的に勉強して学力を向上させるすべを身につけていなかったのではないかと推察される。</p> <p>現在の学生は生まれたときから家庭内にTVゲームが存在し、幼少の頃よりTVゲームに親しんで育ってきている。そのため、学習にゲーム要素を取り入れることで学生を勉強に向かわせ、学習意欲の継続につなげることができる可能性がある。</p> <p>エンターテイメント要素を取り入れた国試対策学習ツールを構築し、その学習効果を検討したことを報告した。</p> <p>共著者：岩井譜憲，岩沢 健登，海津 遥，木村 美早希，久保田 奏，高橋 愛，高柳 秀斗，沼田 和佳南，橋本 一眞 本人担当部分：全般</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 茂木 俊一

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
スリム・ベーシック医療 安全管理学	共著	2023年12月	メジカルビュー社	診療放射線学領域の安全管理書。「MRIの安全管理」を担当した。 編集：福土正広、五十嵐博 分担執筆：樋口清孝、小林正周、堀正明、茂木俊一、他 担当：3章 検査・治療別の安全 4) MRI検査 (p113-124) MRIの特殊性・MRI検査における危険因子・安全に検査を行うために

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 山崎 真

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
放射線学科におけるメタ認知能力と学修習慣の関係 (査読有)	共著 (筆頭)	2023年12月	診療放射線学教育学 (11), pp. 17-21	放射線学科の学生を対象とし、日常の学修への取り組み方へ主眼を置き、メタ認知能力と学修習慣の関連性についての報告である。スマートフォンを学修環境に取り入れない学生の方がメタ認知能力が高いことが分かった。デジタル社会と現代の大学教育の特性の一端が垣間見れた。筆者は山崎真、井原夢菜、高橋里奈。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1Geant4シミュレーションを用いたPET装置の新規検出器の開発に関する基礎検討	—	2023年10月	第51回日本放射線技術学会秋季学術大会	従来のPET装置で用いられる無機シンチレータは時間分解能に限界が見えてきている情勢を鑑みて、新たなプラスチックシンチレータを利用する提案を行った。このプラスチックシンチレータがどの程度PET装置に利用価値があるのか、エネルギー分解能と検出効率の側面から考察した。発表者は佐藤正大（群馬パース大学大学院保健科学研究科保健科学専攻放射線学領域指導学生）。群馬パース大学大学院設立以来、放射線学領域では初めての学会発表を行った学生となった。 共同発表者：佐藤正大、酒井健一、山崎真

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 技術学部 放射線 氏名

星野 洋満

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
11. スマートフォンを用いた誤投与防止のための患者-放射性医薬品照合システムの開発-実現可能性検討-	共著	2024年2月9日	RADIOISOTOPES, 2024, 73. 1: 69-80	佐藤充, 星野洋満, 清水正挙, 大崎洋充, 市川翔太, 近藤達也, 岡本昌士 放射性医薬品の誤投与は防ぐ必要がある。本研究では, スマートフォンを用いた誤投与防止のための患者-放射性医薬品照合システム開発を考案し, その要素技術である放射性医薬品の容器を識別する深層学習モデルを開発した。ResNet18 の転移学習および10 分割交差検証を実施した結果, 15 種類の放射性医薬品容器をすべて正確に分類できた。本研究により, 提案システムの実現可能性が証明された。

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
20. 小児腎ファントムを用いた ^{99m} Tc-DMSAシンチグラフィの最適撮像時間の検討	-	2024年11月16日	グランフロント大坂北館カンファレンスルームタワーB 10F ルームB06+07	勘崎 貴雄、黒澤 裕司、清水 正挙、星野洋満、茂木 彰子、市川 肇、嶋田 博孝、須藤 高行、樋口 徹也 小児腎静態シンチグラフィはガイドライン改正により、投与量が減量となった。そこで群馬県内多施設のSPECT装置を用いて、画像評価を行い臨床で利用可能な撮像条件を検討した。撮像はPlanar及びSPECT撮像にて評価した。結果はPlanar最適撮像条件は4分以上、SPECT収集は8分以上の撮像時間を必要とすることが示唆された。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 今尾 仁

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
パーキンソン病患者の上腕二頭筋における超音波剪断波エラストグラフィを用いた筋硬度の前向き検討（査読付）	共著	2023年5月1日	日本診療放射線技師会誌 J. J. A. R. T 2023. 5, vol. 70/No. 848, p. 5-11	パーキンソン病患者の上腕二頭筋における超音波剪断弾性波を用いたSWEと、パーキンソン病統一評価スケール（MDS-UPDRS）の関係はあきらかではない。本研究では有意肢のSWEの値より得られた閾値により、上肢の筋強剛1～3の評価点を判別できる可能性を示唆した。（研究計画、統計解析、構成、考察などを担当した） 共著者：小林悟士，笠井健治，矢部仁，今尾仁，橋本祐二，市川忠
医療機関における職業被ばくに関する放射線管理状況調査報告（2021年度の状況）	共著	2024年2月1日	日本診療放射線技師会誌 J. J. A. R. T 2024. 2, vol. 71/No. 857, p. 138-147 (26-35)	電離放射線障害防止規則改正（2020年4月）により放射線業務従事者の職業被ばく低減と放射線管理の充実が求められている。本調査の目的は従事者に対する放射線管理状況について、医療機関に対しアンケートによる実態調査を実施した。従事者線量の院内組織への報告率ならびに放射線防護研修の実施率は有意に増加した。しかし、水晶体専用放射線測定器ならびに放射線防護眼鏡の着用率は有意に増加しなかった。また、放射線防護眼鏡の配備率も有意に増加しなかった。（統計解析を担当した） 共著者：渡邊浩，山本和幸，坂本肇，今尾仁

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
東京都診療放射線技師会会員における診療放射線技師法改正に伴う告示研修の実態調査	共著	2023年7月1日	東京放射線 2023. 7, vol. 70/No. 818, p. 9-17	「良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進するための医療法等一部を改正する法律案」が2021年5月21日に成立をうけ、診療放射線技師法も改正され2021年10月1日に施行された。それに伴い実施される東京都診療放射線技師会の会員の告示研修の受講の実態を実施した。前年度に実施した意識調査の結果通り、追加された業務を実施する予定のない施設勤務者は、告示研修を受講していないことが明確となった。施設規模の差による受講率に傾向は見られなかった。（立案，研究計画，調査，統計解析，考察を担当した） 共同研究者：磯崎拓巳，城尾俊，齊藤政治，今尾仁，江田哲男，飯島文洋，緒方達哉

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 島崎 綾子

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
32. 学力向上のための共通科目「大学の学び入門」と「大学の学び専門への誘い」	—	2023年8月	第17回日本診療放射線学教育学会学術集会、東京	<p>「大学の学び入門」では、「大学での学習形態や学問に対する姿勢、大人としての生活態度を認識、理解し、高校生までの学習・生活から大学生の学習・生活に移行することができるように、基本的なスキル、姿勢を学ぶ。」とし、「大学の学び 専門への誘い」では、「診療放射線学における社会的役割、医療人としての心構え等を学び、学生自らの職業観や将来像を確立する」ことを目的としている。これらの2つの授業計画と評価をデザインし、実施した内容から、テキストマイニングによる対応分析にて、評価を行った。</p> <p>本人担当部分：共同研究のため担当部分抽出不可能</p> <p>星野修平、谷口杏奈、島崎綾子、加藤英樹、岩井譜憲、峯村優一、竹居田幸仁、徳永慎也、堀風雅</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 放射線学科 氏名 湯浅 仁博

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 大瀧和也

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要
在宅血液透析における臨床工学技士の役割	単著	2023年9月	臨床透析 Vol139 No;9106	在宅血液透析(HHD)では、インフォーマルケアにフォーマルケアの医療機器を使用する事から課題が発生する。それらの中で装置を管理する立場から多職種との円滑な連携が求められる。それら問題点などについて記述した。筆頭：大瀧和也（査読付）
42 特集『在宅透析』：患者教育	単著	2024年4月	「腎と透析」96巻4号東 京医学社	昨今、見直されつつある血液透析の形として、在宅血液透析患者の導入施設での教育について検討した。特にチーム医療を前提とした臨床工学技士の役割も大きい。著者：大瀧和也（査読付）

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
在宅血液透析における臨床工学技士の役割	単著	2023年9月	臨床透析 Vol139 No;9106	在宅血液透析(HHD)では、インフォーマルケアにフォーマルケアの医療機器を使用する事から課題が発生する。それらの中で装置を管理する立場から多職種との円滑な連携が求められる。それら問題点などについて記述した。筆頭：大瀧和也（査読付）
VOF法(Volume of Fluid)による静脈側トラップチャンバの流れ解析に関する研究	共著	2023年12月	埼玉県臨床工学会会誌 2023VOL. 46PP. 85-88	数値流体力学であるVOF法を用いて静脈側トラップチャンバ内での空気分布について、気液混相流による流れ解析にて検討 共著者:中澤知里、井出康仁、谷口麻衣、丸下洋一、島崎直也、大瀧和也（査読付）
よくわかる透析条件設定	共著	2023年12月	埼玉県臨床工学会会誌 2023VOL. 46PP. 49-51	透析条件の設定における根拠やPatient-reported outcomeを考慮した透析条件設定について解説した。著者：齋藤慎、大瀧和也（査読付）
運動療法中の耳朶血流量の変化と運動強度の関係	共著	2024年3月	日本臨床工学会会誌No. 81 2024PP. 183-187	本研究では運動中の耳朶血流量の変化を運動強度との関係について、(レーザー血流計)LDFを用いて明らかにする事を目的とした。その結果安静時に比して運動時の耳朶血流量はダイナミックに増加したこと、Borg ScaleとTalk Test Scaleとの間に有意な相関が認められ、運動強度が上昇するにつれて、耳朶血流量も増加する事が明らかとなった。 著者：齋藤慎、大瀧和也（査読付）
レーザー血流計による下肢血流評価の適正な指標は静脈幅である。	共著	2024年3月	医工学治療 Vol. 36No1 2024 PP. 15-20	本研究では運動中の耳朶血流量の変化を運動強度との関係について、LDFを用いて明らかにする事を目的とした。その結果安静時に比して運動時の耳朶血流量はダイナミックに増加したこと、Borg ScaleとTalk Test Scaleとの間に有意な相関が認められ、運動強度が上昇するにつれて、耳朶血流量も増加する事が明らかとなった。 著者：齋藤慎、大瀧和也（査読付）
これからどうなる研究と研究倫理審査	共著	2024年3月	日本血液浄化技術学会誌 31(2) 2024 PP. 253-254	研究においても倫理が重要視される時代となっている。臨床研究に関しては「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が中心的規範とされる一方、平成30年4月からは「臨床研究法」が施行され研究の種類に応じた倫理審査手続きが必要となり複雑となっている。さらに令和3年にはゲノム指針と統合された「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」が公表された。臨床研究は研究対象者の善意による検体やデータの提供により成り立ち、研究者はその検体やデータを無駄にしない責任があり、研究実施には倫理性、社会的意義、科学的妥当性が求められる。共著者：齋藤慎、大瀧和也（査読付）

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
我が国における在宅血液透析の現状	—	2023年6月	第68回日本透析医学会・ 神戸	学会ワークショップ11 座長
群馬県臨床工学技士会特別企画「臨床工学技士の過去・現在・未来」	—	2022年6月	一般社団法人群馬県臨床 工学技士会学術大会	特別講演
在宅血液透析における臨床工学技士の関わり	—	2023年11月	一般社団法人日本在宅血 液透析学会 135	座長・演者：在宅血液透析（HHD）はチームの中の一員として特に臨床工学技士には患者の自宅におけるインフラ状況や透析装置の設置環境、透析液の管理を行うことが求められている。それら管理等について報告した。

研究活動の記録 (2023年4月～2024年3月)

所属 臨床工学科 氏名 木村 博一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. In silico 技術によるフィブリノーゲンと汎用透析膜素材との分子間相互作用に関する研究 (査読付)	共著	2023年3月	Paz-bulletin No.29 pp89-92	血液凝固の主体となるフィブリノーゲンとメチルメタクリレート (MMA) との詳細な分子間相互作用を明らかにするために、in silico 解析技術を用いた基礎的検討を行った。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った) 共著者: 近土真由美, 白井達也, 松岡李奈, 鯨智哉佐田充, 大濱和也, 木村博一
2. Shared clusters between phylogenetic trees for upstream and downstream regions of recombination hotspot in norovirus genomes.(ノロウイルスゲノムにおける組換えホットスポットの上流領域と下流領域の系統樹に共通するクラスター定義) (査読付)	共著	2023年5月	Gene Reports Vol 32 pp.101786	国際塩基配列データベースから取得した339株のノロウイルスのゲノム配列を解析し、上流領域と下流領域について構築した系統樹間で菌株からなるクラスターを定義した。 共著者: Yoshiyuki Suzuki, Hirokazu Kimura , Kazuhiko Katayama.
3. Editorial: Rising Stars in Virology2022. (社説: ウイルス学2022年のライジングスター) (査読付)	共著	2023年5月	Front Microbiol Vol 14 pp.1205877	ウイルス学の若手研究者5名から寄せられた論文を概説した。 共著者: Yasuko Tsunetsugu-Yokota, Gkikas Magiorkinis, Hirokazu Kimura .
4. Integrated Tandem Affinity Protein Purification Using the Polyhistidine Plus Extra 4 Amino Acids (HiP4) Tag System. (ポリヒスチジン+エクストラ4アミノ酸 (HiP4) タグシステムを用いたタンデムアフィニティ蛋白質精製の統合化) (査読付)	共著	2023年6月	Proteomics.2023 Jun Volume23 Issue11:E2200334	新規ペプチドタグシステムHiP4の開発により、包括的なタンパク質間相互作用解析において、低バックグラウンドかつ高選択性を達成できるTAP-MSのサンプルで強力なツールとして実行可能であることを示唆した。(主要著者として論文執筆を行った。) 共著者: Yoko Ino, Yutaro Yamaoka, Kiho Tanaka, Kei Miyakawa, Mayuko Nishi, Yasuyoshi Hatayama, Hirokazu Kimura , Yayoi Kimura, Akihide Ryo.
5. Molecular evolutionary analyses of the fusion protein gene in human respirovirus 1. (ヒトレスピロウイルスにおける融合タンパク質遺伝子の分子進化解析) (査読付)	共著	2023年6月	Virus Research Vol. 333 pp. 199142	各国から採取したHRV1株の完全長融合遺伝子(F)について、時間スケールの系統解析、ゲノム集団サイズ解析、選択圧解析、抗原性解析を行った。その結果、HRV1 F遺伝子が長年にわたって絶えず進化し、ヒトに感染し、遺伝子が比較的保存されている可能性があることを示唆した。(責任者として研究企画、論文執筆を行った。) 共著者: Tomoko Takahashi, Mao Akagawa, Ryusuke Kimura, Mitsuru Sada, Tatsuya Shirai, Kaori Okayama, Yuriko Hayashi, Mayumi Kondo, Makoto Takeda, Akihide Ryo, Hirokazu Kimura* .
6. Molecular Evolutionary Analyses of the RNA-Dependent RNA Polymerase (RdRp) Region and VP1 Gene in Human Norovirus Genotypes GII.P6-GII.6 and GII.P7-GII.6. (ヒトノロウイルス遺伝子型GII.P6-GII.6およびGII.P7-GII.6におけるRNA依存性RNAポリメラーゼ (RdRp) 領域とVP1遺伝子の分子進化解析) (査読付)	共著	2023年6月	Virus 2023 Vol.15 特集号 「ヒトノロウイルス」に記載 136	ヒトノロウイルスの遺伝子型である GII.P6-GII.6 株と GII.P7-GII.6 株の進化を高度なバイオインフォマティクス技術を使用し、分子進化的解析を行った。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った。) 共著者: Tomoko Takahashi, Ryusuke Kimura, Tatsuya Shirai, Mitsuru Sada, Toshiyuki Sugai, Kosuke Murakami, Kazuhiko Harada, Kazuto Ito, Yuki Matsushima, Fuminori Mizukoshi, Kaori Okayama, Yuriko Hayashi, Mayumi Kondo, Tsutomu Kageyama, Yoshiyuki Suzuki, Haruyuki Ishii, Akihide Ryo, Kazuhiko Katayama, Kiyotaka Fujita, Hirokazu Kimura* .

7. Molecular Diversity of Human Respiratory Syncytial Virus Before and During the COVID-19 Pandemic in Two Neighboring Japanese Cities. (日本の近隣2都市におけるCOVID-19パンデミック前およびパンデミック中のヒト呼吸器合胞体ウイルスの分子多様性) (査読付)	共著	2023年8月	Microbiol Spectr Volume 11 Issue 4: e0260622.	2017年9月から2021年12月までに福島県で分離採取されたHRSVを解析した。クラスター内のHRSVは地域内で数年間循環し、流行サイクルを引き起こす可能性があると思われる。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った。) 共著者: Takashi Ono, Koichi Hashimoto, Yohei Kume, Mina Chishiki, Hisao Okabe, Masatoki Sato, Sakurako Norito, Jumpei Aso, Mitsuru Sada, Izumi Mochizuki, Fumi Mashiyama, Naohisa Ishibashi, Shigeo Suzuki, Hiroko Sakuma, Reiko Suwa, Miyuki Kawase, Makoto Takeda, Kazuya Shirato, <u>Hirokazu Kimura</u> , Mitsuaki Hosoya.
8. Pathogen Profiles in Outpatients with Non-COVID-19 during the 7th Prevalent Period of COVID-19 in Gunma, Japan. (群馬県における新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の第7流行期における非新型コロナウイルス感染症外来患者の病原体プロフィール) (査読付)	共著	2023年8月	Molecular Epidemiology, Diagnostics and Management of Respiratory Virus Infections 2.0)	群馬県で第7次流行期にCOVID-19以外の呼吸器症状を引き起こす病原体を、次世代シーケンサー(NGS)と高度なバイオインフォマティクス技術を組み合わせたディープシーケンシングを用いて包括的にプロファイリングした。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った。) 共著者: <u>Hirokazu Kimura*</u> , Yuriko Hayashi, Masanari Kitagawa, Miwa Yoshizaki, Kensuke Saito, Kazuhiko Harada, Kaori Okayama, Yusuke Miura, Ryusuke Kimura, Tatsuya Shirai, kiyotaka Fujita, Suguru Machida, Kazuto Ito, Isao Kurosawa.
9. Molecular Evolutionary Analyses of the Spike Protein Gene and Spike Protein in the SARS-CoV-2 Omicron Subvariants. (SARS-CoV-2オミクロン亜種におけるスパイク蛋白質遺伝子とスパイク蛋白質の分子進化学的解析) (査読付)	共著	2023年9月	Microorganisms 2023 Vol.11(9), 2336.	SARS-CoV-2オミクロン亜型の進化をより深く理解するために、高度なバイオインフォマティクス技術を用いてスパイク(S)タンパク質遺伝子/タンパク質の分子進化学的解析を行った。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った。) 共著者: Norika Nagasawa, Ryusuke Kimura, Mao Akagawa, Tatsuya Shirai, Mitsuru Sada, Kaori Okayama, Yuka Sato-Fujimoto, Makoto Saito, Mayumi Kondo, Kazuhiko Katayama, Akihito Ryo, Makoto Kuroda, <u>Hirokazu Kimura*</u> .
10. Infant case of severe immune thrombocytopenia caused by COVID-19 infection. (COVID-19感染による重症免疫性血小板減少症の乳児例) (査読付)	共著	2023年10月	eJHaem. 2023 Oct 5;4(4):1148-1151.	免疫性血小板減少症(ITP)は、多数のウイルスによって引き起こされる一般的な小児急性自己免疫性出血性疾患であり、孤立性血小板減少症を特徴としている。COVID-19感染によるITPの症例は成人で報告されているが、小児科の報告は限られている。ここでは、1歳女児の症例を紹介した。COVID-19感染による小児ITP症例は重症になる可能性があるが、更なる研究が必要である。(責任著者として研究企画, 論文執筆を行った。) 共著者: Mika Dofuku, Tamura Daisuke, Mizobe Marina, Kurane Koyuru, Hayashi Yuriko, <u>Kimura Hirokazu</u> , Shimada Akira.
11. Promotion of ABCG2 gene expression by neolignans from Piper longum L.(Piper Longum L.由来のネオリグナンによるABCG2遺伝子発現の促進) (査読付)	共著	2023年11月	Biosci Biotechnol Biochem.2023 Nov 21;87(12):1523-1531.	レノプロテクティブ効果のある漢方薬「Piper longum L.」に着目し、ABCG2遺伝子の発現を亢進させる化合物の単離と同定を試みた。単離された化合物のうち、リカリンAとネオボマテンは、hABCG2の発現を促進する可能性が示唆された。(主要著者として論文執筆を行った。) 共著者: Atsuyoshi Nishina, Motohiko Ukiya, Kazuki Motegi, Risa Kiryu, Daisuke Sato, Mitsuru Sada, Yuki Hori, Hideo Satsu, Kazuhiro Uemura, Mamoru Koketsu, Masayuki Ninomiya, Lwin Mon Mon Myint, <u>Hirokazu Kimura</u>
12. Optimal Papanicolaou Smear Conditions for Manual Microdissection of Single Target Cells. (MMDを用いた最適なパニコロウ塗抹標本条件の決定) (査読付)	共著	2023年11月	Microorganisms 2023 Vol.11(11), 2700.	MMDを用いた標的細胞単離の成功率を高め、細胞の拡散を防ぐための最適なパニコロウ塗抹標本条件を決定することを目的とした。病変由来のHPV感染細胞を、湿潤パニコロウ塗抹標本と乾燥パニコロウ塗抹標本でMMDを用いて単離し、条件の違いを実証した。 共著者: Kaori Okayama, Mao Kakinuma, Saki Tajima, Norika Nagasawa, Yasuyoshi Ishii, Mizue Oda, <u>Hirokazu Kimura</u> , Mitsuaki Okodo.

13. Development of a contacting transwell co-culture system for the in vitro propagation of primary central nervous system lymphoma. (原発性中枢神経系リンパ腫の接触型トランズウェル共培養システムの開発) (査読付)	共著	2023年11月	Front Cell Dev Biol.2023 Nov 27;11:1275519	トランズウェル細胞培養系と脳血管周皮細胞(BVP)を接触させて、患者由来のPCNSL細胞を培養する方法を開発した。この方法は、脳の微小環境における細胞の近接性を再構築し、PCNSL細胞が表現型の変化なしに増殖することを可能にする。さらに、マルチオミクス解析を駆使して、PCNSL細胞の生存と増殖に関連する細胞内シグナル伝達経路と分子の同定を試みた。本研究の共培養系がPCNSL細胞の生物学的・分子的特性の解析に適しており、新たな治療介入の発見に寄与する可能性を示唆している。 共著者: Mayuko Nishi, Kensuke Tateishi, Jeremiah S. Sundararaj, Yoko Ino, Yusuke Nakai, Yasuyoshi Hatayama, Yutaro Yamaoka, Yusaku Mihana, Kei Miyakawa, <u>Hirokazu Kimura</u> , Yayoi Kimura, Tetsuya Yamamoto, Akihide Ryo
14. Classification of sapoviruses based on comparison of phylogenetic trees for structural and non-structural proteins. (構造タンパク質と非構造タンパク質の系統樹の比較に基づくサポウイルスの分類) (査読付)	共著	2023年12月	Gene Reports Vol.34 Mrtch 2024,101875.	サポウイルス株のゲノム配列をデータベースから検索し、系統解析を行った。共有クラスターに基づいてサポウイルスを分類することを目的としている。 共著者: Yoshiyuki Suzuki, <u>Hirokazu Kimura</u> , KatayamaKazuhiko.
15. 新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型 (SARS-CoV-2 Omicron Variants/Subvariants)の分子進化に関する最新知見。(査読付)	共著	2023年12月	感染制御と予防衛生, 7(1):4-8	新型コロナウイルス感染症のオミクロン変異型・亜変異型を中心とした当該ウイルスS蛋白の分子進化を中心とした最新知見について概説した。(主要著者として、研究企画・論文執筆を行った。) 共著者: 近土真由美, 木村龍介, 長澤紀佳, 岡山香里, 赤川真緒, 林由里子, 藤本友香, 白井達也, 齋藤慎, 原田和彦, 伊藤一人, 藤田清貴, 木村博一)
16. Severe Hemolytic Anemia in a Glucose-6-phosphate Dehydrogenase-deficient Child with COVID-19.(COVID-19のグルコース-6-リン酸デヒドロゲナーゼ欠損症における重度の溶血性貧血) (査読付)	共著	2024年1月	Pedistr Int.2024 Jan-Dec;66(1):e15717	新型コロナウイルスの感染に反応したマクロファージの活性化は、活性酸素種の生産を誘発し宿主の組織に酸化ストレスを引き起こす可能性がある。COVID-19の治療に使用されるヒドロキシクロキシンがG6PD欠損症の人に溶血を引き起こす可能性がある症例がいくつか報告されている。また、一方でCOVID-19による溶血はG6PD欠損症の診断につながる。G6PD欠損症は日本ではまれであるが、COVID-19パンデミック後の医療ではCOVID-19によって引き起こされる重度の溶血性貧血に注意する必要がある。共著者: Mika Dofuku, Tamura Daisuke, Mizobe Marina, Kurane Koyuru, Hayashi Yuriko, <u>Kimura Hirokazu</u> , Shimada Akira.
17. Predictive Value of Various Atypical Cells for the Detection of Human Papillomavirus in Cervical Smears. (子宮頸部塗抹標本におけるヒトパピローマウイルス検出における各種非定型細胞の予測的価値) (査読付)	共著	2024年1月	International Journal of Molecular Sciences.2024;25(2):1212	ヒトパピローマウイルス(HPV)の多くの遺伝子型が子宮頸部の多核細胞、小球細胞、二核細胞、傍核化細胞、巨細胞などの様々な異型細胞と関連していると考えられている。本研究では、パバニコロウ塗抹標本におけるHPV遺伝子型と二核細胞、傍角細胞、巨細胞との関連を解析した。 共著者: Okayama, Kaori, Mao Kakinuma, Koji Teruya, Mizue Oda, Masahiko Fujii, <u>Hirokazu Kimura</u> , Toshiyuki Sasagawa, and Mitsuki Okodo.

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 湯本 真人

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
54. Investigating the technical feasibility of magnetoencephalography during transcranial direct current stimulation (経頭蓋直流刺激中の脳磁場計測の技術的実現可能性の検討) (査読付)	共著	令和5年9月	Front Hum Neurosci. 2023 Sep 13:17:1270605. doi: 10.3389/fnhum.2023.1270605. eCollection 2023. PMID: 37771350	経頭蓋直流刺激 (tDCS) 施行中の脳磁図計測の技術的実現可能性をファントム実験により明らかにした。 共著者: Shirota Y, Fushimi M, Sekino M, <u>Yumoto M</u>
55. Correlation of motor-auditory cross-modal and auditory unimodal N1 and mismatch responses of schizophrenic patients and normal subjects: an MEG study (統合失調症患者と健常者における運動-聴覚クロスモーダルおよび聴覚誘発N1・ミスマッチ応答成分の相関性 -脳磁場による研究-) (査読付)	共著	令和5年10月	Front Psychiatry. 2023 Oct 11:14:1217307. doi: 10.3389/fpsyt.2023.1217307. eCollection 2023. PMID: 37886112	運動-聴覚クロスモーダル課題によるミスマッチ応答とself-triggered actionの結果としての聴覚応答抑制(sense of self-agency) に関して、統合失調症と健常者の違いを脳磁場記録から検討した。 共著者: Okazaki M, <u>Yumoto M</u> , Kaneko Y, Maruo K

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 松岡 雄一郎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(1) MRIの受信コイル共振特性に対するコイル配置の影響	-	2024年3月	2024年 日本生体医工学会九州支部学術講演会	MR撮像で必要となるハードウェアの一つであるRFコイルの共振特性最適化に必要な情報に関する研究成果を発表した。消化管内にRFコイルを設置する際に、RFコイルと消化管表面との位置関係によりRFコイルの共振特性が変化する現象を、電磁界シミュレーションにより変化量、変化の要因、および最適化に必要な回路素子の条件などを解明した。 発表者：松岡雄一郎

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 花田 三四郎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
生体外での腎組織への血管新生	-	2023年10月	第61回日本人工臓器学会大会	塩田 拓輝、酒井 康行、西川 昌輝、竹内 昌治、Dina Myasnikova、花田 三四郎 マウス腎を用い、ヒト由来血管内皮細胞による再構成血管を用い血管網の構築を試みた。「共同研究のため抽出不可能」
生体现象の再現を目指した血管灌流モデルの開発	-	2024年3月	令和5年度生体医歯工学共同研究拠点成果報告会(予稿集)	花田 三四郎、梨本裕司、西山功一 安定な流れの付与が可能なオンチップ三次元血管デバイスを作成し、流れによる血管安定化の再現を示した。「研究全般に従事」

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科

氏名

近土真由美

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
15. 「Molecular Evolutionary Analyses of the RNA-Dependent RNA Polymerase (RdRp) Region and VP1 Gene in Human Norovirus Genotypes GII. P6-GII. 6 and GII. P7-GII. 6.」 (ヒトノロウイルス遺伝子型GII. P6-GII. 6およびGII. P7-GII. 6におけるRNA依存性RNAポリメラーゼ (RdRp) 領域とVP1遺伝子の分子進化解析) (査読付)	共著	2023年7月	Viruses 15(7)	ヒトのノロウイルスGII. P6-GII. 6株とGII. P7-GII. 6株の進化を解析するため、世界的に収集された株のRdRp領域とVP1遺伝子をバイオインフォマティクス技術を用いて解析した。共通祖先はRdRp領域が約50年前、VP1遺伝子が約110年前に出現した。P6型の進化速度はP7型よりも速く、P7型ではP6型より大きな遺伝的分岐が見られた。VP1タンパク質の陽性選択部位は抗原性に関する領域に位置し、これらの結果はGII. 6 VP1遺伝子とタンパク質が独自に進化したことが示された。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Tomoko Takahashi, Ryusuke Kimura, Tatsuya Shirai, Mitsuru Sada, Toshiyuki Sugai, Kosuke Murakami, Kazuhiko Harada, Kazuto Ito, Yuki Matsushima, Fuminori Mizukoshi, Kaori Okayama, Yuriko Hayashi, <u>Mayumi Kondo</u> , Tsutomu Kageyama, Yoshiyuki Suzuki, Haruyuki Ishii, Akihide Ryo, Kazuhiko Katayama, Kiyotaka Fujita, Hirokazu Kimura
16. 「Molecular Evolutionary Analyses of the Spike Protein Gene and Spike Protein in the SARS-CoV-2 Omicron Subvariants.」 (SARS-CoV-2オミクロン亜種のスパイク蛋白質遺伝子とスパイク蛋白質の分子進化解析) (査読付)	共著	2023年9月	Microorganisms 11(9)	バイオインフォマティクス技術を用いて、SARS-CoV-2オミクロン亜種のスパイク (S) タンパク質遺伝子の分子進化解析を行った。系統解析により、武漢株からオミクロン亜種までの共通祖先が2020年5月に分岐し、1年後に様々なオミクロン亜種が生成されたことが明らかになった。XBB亜種は2021年7月に分岐し、現在流行しているXBB. 1. 5とXBB. 1. 16が出現していた。解析によりXBB. 1. 5およびXBB. 1. 16は特定のアミノ酸変異を有し、免疫原性やワクチン回避に影響を与えることが示唆された。これにより、オミクロン亜種が急速に進化し、現在のワクチンの有効性を低下させる可能性が示唆された。(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：Norika Nagasawa, Ryusuke Kimura, 3, 4, Mao Akagaw, Tatsuya Shirai, Mitsuru Sada, Kaori Okayama, Yuka Sato-Fujimot, Makoto Sait, <u>Mayumi Kondo</u> , Kazuhiko Katayama, Akihide Ryo, Makoto Kuroda, Hirokazu Kimura

17. 「新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型 (SARS-CoV-2 Omicron Variants/Subvariants) の分子進化に関する最新知見」 (査読付)	共著	2023年12月	感染制御と予防衛生 vol. 7 No. 1	SARS-CoV-2は進化を続けており、様々な亜種や亜型が出現している。現在までの一連の系統学的研究から、SARS-CoV-2は約30のクレードに分類できることが示唆されている。本総説では、SARS-CoV-2の分子進化に関する最近の知見を述べた。 (論文執筆) 共著者：近土真由美, 木村龍介, 長澤 紀佳, 岡山香里, 赤川真緒, 林由里子, 藤本友香, 白井達也, 齋藤慎, 原田和彦, 伊藤一人, 藤田清貴, 木村博一
--	----	----------	---------------------------	---

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 島崎直也

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
12. Computational fluid dynamics analysis for proposing optimized chamber configurations to suppress blood coagulation (血液凝固抑制のための最適なチャンバー形状の提案を目的とした数値流体力学解析)	共著	2023年6月	桐蔭論叢第48号 pp. 79-84	<p>アーチループ型静脈側エアトラップチャンバの解析モデルを作成し、CFD解析を実施した。また、PIVを用いてチャンバの流れの可視化を試みた。さらに、ブタ血液を用いて血液凝固完了時間TCOAGの測定を行った。その結果、CFD解析結果とPIVによる流れの可視化結果がよく一致したことから、CFD解析結果の妥当性及び有用性を確認することができた。また、血液凝固実験の結果についても、既に人見らが報告したエアレス回路を用いたACT測定結果と一致し、実験的にもALのチャンバにおける独特な構造によって血液凝固抑制効果が期待できる可能性が示唆された。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：SHIMAZAKI Naoya, ISHIGAKI Hideki, OKU Tomoko, MOTOHASHI Yuka, YAMAUCHI Shinobu, SATO Toshio</p>

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
17. 静脈側エアトラップチャンバの長さおよび血液流入角度が血液凝固に及ぼす影響	-	2023年6月	第68回日本透析医学会学術集会・総会	<p>市販の透析回路のチャンバ長さL (14cm) を基準にして、L を変更した5 種類のチャンバを試作した。また、3D プリンターを使って、流入角度 θ を変更した7 種類のチャンバも試作した。チャンバを含む閉鎖回路内に循環した豚血液に凝固促進剤を添加することで、凝固完了時間 (TCOAG) の違いを評価した。また、粒子画像流速測定法 (PIV) によるチャンバ内の流れの可視化も試みた。Lが短くなるにつれて、TCOAG は長くなる傾向がみられた。PIV による流れの可視化結果から、L が長くなるほどチャンバ内の流れが滞留していた。</p> <p>(共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：石垣 秀記, 伊原 毅, 島崎 直也, 奥 知子, 本橋 由香, 山内 忍, 佐藤 敏夫</p>

18. 数値流体力学解析を用いた血液浄化療法における各種デバイスの最適化に関する検討	-	2023年11月11日	第61回日本人工臓器学会大会	我々は、血液浄化療法に用いられる各種デバイスの構造最適化を目的とした数値流体力学（CFD）解析を用いた理論的な検討を試みている。今回の報告では、①静脈側エアトラップチャンバの各種設計パラメータが血液凝固発生に及ぼす影響、②血液透析用留置針に設ける側孔の最適設計を目的とした数値流体力学（CFD）解析の導入、③サイドホール型ダブルルーメンカテーテル（DLC）の再循環に関するCFD解析について紹介する。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：島崎直也，丸下洋一，中根紀章，石垣秀記，奥知子，本橋由香，山内忍，佐藤敏夫
19. 高い抗凝固性能を有する静脈側エアトラップチャンバの提案を目的とした実験的検討	-	2023年11月11日	第61回日本人工臓器学会大会	今回の報告では、抗凝固性能に影響を及ぼすチャンバの全長Lと血液流入角度 θ について、再現性を含めてより詳細に検討した。Lを変化させた時のTCOAGを調べたところ、これまでに得られていた結果と同様にLが短くなると直線的にTCOAGが大きくなることが確認できた。また、 θ を変化させた結果からも、 θ が 30° の時に最もTCOAGが大きくなる結果となった。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：半田寛明，石垣秀記，島崎直也，奥知子，本橋由香，山内忍，佐藤敏夫
20. 積極的に旋回流を起こすチャンバキャップを有する静脈側ドリップチャンバの抗凝固性能評価	-	2023年11月11日	第61回日本人工臓器学会大会	本研究では、チャンバ内に積極的に旋回流を作り出すことができるチャンバ上部（キャップ）を試作し、抗凝固性能を評価した。既存の水平流入チャンバと試作した旋回流チャンバ内の流れの様子を比較したところ、旋回流チャンバはチャンバ下部まで旋回流が起きていることが確認できた。また、ブタ血液を使った実験でも、凝固までの時間が有意に延長することが確認できた。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：石垣秀記，半田寛明，島崎直也，奥知子，本橋由香，山内忍，佐藤敏夫
21. 数値流体力学解析に基づく静脈側エアトラップチャンバの新しい流入形状に関する検討	-	2023年11月11日	第61回日本人工臓器学会大会	今回の報告では、チャンバ内に積極的に旋回流を発生させることを目的とした新しい血液流入形状を有するチャンバについて、数値流体力学（Computational Fluid Dynamics：CFD）解析による検討を試みた。従来型の水平流入チャンバと今回検討した旋回流チャンバ内の流れを比較すると、旋回流チャンバ内の方が強く旋回流が発生していることがわかった。また、チャンバ流出口にある濾過フィルタ近傍でも流れが停滞せず、旋回流を維持していることがわかった。 （共同研究につき、本人担当部分抽出不可能） 共著者：島崎直也，石垣秀記，半田寛明，奥知子，本橋由香，山内忍，佐藤敏夫

<p>22. Optimization of devices for blood purification therapy using computational fluid dynamics analysis (数値流体力学解析を用いた血液浄化療法における各種デバイスの最適化に関する検討)</p>	<p>-</p>	<p>2023年12月12日</p>	<p>17th TOIN International Symposium on Biomedical Engineering</p>	<p>【解析事例① 静脈側エアトラップチャンバの各種設計パラメータが血液凝固発生に及ぼす影響】これまでの結果として、チャンバ内で流れが停滞しない時に高い抗凝固性能が得られることが判明している。【解析事例② 血液透析用留置針に設ける側孔の最適設計を目的としたCFD解析の導入】これまでの結果として、17Gのような細径の留置針の場合、側孔の数としては2個でも良いとの結論が得られた。【解析事例③ サイドホール型ダブルルーメンカテーテル (DLC) の再循環に関するCFD解析】これまでの結果として、逆接続時には脱血孔・返血孔間距離が大きくなるにつれて、再循環率も上昇することが明らかとなった。 (共同研究につき、本人担当部分抽出不可能) 共著者：島崎直也, 石垣秀記, 半田寛明, 奥知子, 本橋由香, 山内忍, 佐藤敏夫</p>
--	----------	--------------------	--	---

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 齋藤 慎

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要
1. 感染制御と予防衛生	共著	2023年12月	メディカルレビュー社	新型コロナウイルスオミクロン変異型・亜変異型の分子進化に関する最新知見について解説した。 共著者：近土真由美、木村龍介、長澤紀佳、岡山香里、赤川真緒、林由里子、藤本友香、白井達也、齋藤慎、原田和彦、伊藤一人、藤田清貴、木村博一

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1. 濾過の条件（置換液量、定速濾過法、定圧濾過法、Qsコントロール）	共著	2023年9月	日本血液浄化技術学会雑誌 31(1) pp. 19-22	オンラインHDFに臨床効果を期待する反面、Alb漏出量の増加が懸念されることから、本稿では、基本的な濾過条件に加えて、Alb漏出量を安定させるための新たな濾過方法について解説した。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 著者：齋藤慎、大濱和也
2. レーザ血流計による脈動幅測定が透析患者の下肢閉塞性動脈疾患のスクリーニングに有用であった1例	共著	2023年9月	日本血液浄化技術学会雑誌 31(1) pp. 63-65	われわれは、これまでにジェイ・エム・エス社製レーザー血流計ポケットLDF® (LDF) により測定された足趾の脈動幅は、足関節上腕血圧比 (ankle-brachial pressure index; ABI)、足趾上腕血圧比 (toe brachial index; TBI) と有意な相関関係があること、また、脈動幅のカットオフ値は9.5 mL/minで、感度100%、特異度88%であることを報告した。今回、われわれは毎月、LDFによる下肢血流測定によるスクリーニングを行い、脈動幅に着目することでLEADの早期発見・早期治療に有用であった症例を経験したので報告した。LEADのスクリーニングとして、LDFによる脈動幅に着目することは、透析患者のLEADの早期発見、早期治療に有用である可能性が示唆された。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：齋藤慎、神宮宏臣、大澤英史、大山裕亮、田中俊之
3. Molecular Evolutionary Analyses of the Spike Protein Gene and Spike Protein in the SARS-CoV-2 Omicron Subvariants	共著	2023年9月	Microorganisms 2023, 11, 2336.	The study analyzed the evolution of SARS-CoV-2 Omicron subvariants using advanced bioinformatics. The common ancestor of Wuhan, Alpha, Beta, Delta, and Omicron variants diverged in May 2020. Omicron subvariants, including XBB.1.5 and XBB.1.16, emerged from a chimeric virus in July 2021. Recombination at nucleotide 1373 resulted in strains with BJ.1 and BM.1.1.1 sequences. Omicron subvariants shared genetic links with Wuhan and Delta variants, leading to amino acid mutations. Prevalent subvariants had specific mutations in the RBD, affecting immunogenicity and vaccine efficacy, implying reduced effectiveness of current vaccines, including mRNA vaccines with BA.4/BA.5 subvariants. (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) Norika Nagasawa, Ryusuke Kimura, MaoAkagawa, Tatsuya Shirai, Mitsuru Sada, Kaori Okayama, Yuka Sato-Fujimoto, <u>Makoto Saito</u> , Mayumi Kondo, Kazuhiko Katayama, Akihide Ryo, Makoto Kuroda and Hirokazu Kimura

4. よくわかる透析条件設定	共著	2023年12月	埼玉県臨床工学技士会 会誌2023 Vol. 46 pp. 49-51	透析条件の設定の根拠やPatient-reported outcomeを考慮した透析条件設定について解説した。 (研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 著者：齋藤慎、大濱和也
5. 運動療法中の耳朶血流量の変化と運動強度の関係	共著	2024年3月	日本臨床工学技士会会誌 No. 81 2024 pp. 183-187	一般的に脳血流は様々な環境下において一定に保たれるとする自己調節機能の存在から、運動時においても脳血流は変化しないといわれてきた。しかし、近年、超音波診断装置や近赤外線分光分析装置による脳血流評価において、運動時の脳血流は上昇することが報告されている。また、運動療法中の循環動態のモニタリングとして、レーザ血流計(LDF)による耳朶血流の有用性が散見されるが、臨床において、運動療法中の循環動態のモニタリングは行われておらず、耳朶血流量と運動強度の関係も不明である。そこで、本研究では、運動中の耳朶血流量の変化と運動強度との関係について、LDFを用いて明らかにすることを目的とした。その結果、安静時に比し、運動時の耳朶血流量はダイナミックに増加したこと、Borg Scale とTalk Test Scaleとの間に、有意な相関が認められたこと、運動時の耳朶血流量とTalk Test Scaleとの間には有意な相関があり、運動強度が上昇するにつれて、耳朶血流量も増加することが明らかとなった。(研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：齋藤慎、大濱和也
6. レーザ血流計による下肢血流評価の適正な指標は脈動幅である	共著	2024年3月	医工学治療 Vol. 36 No1 2024 pp. 15-20	レーザ血流計(LDF)を用いて、足関節圧迫ストレス試験を行い、LDFによる下肢血流の安定した定量的な評価として、足趾血流量または、脈動幅どちらが適正かを明らかにすることを目的とした。健康人14名(28肢)を対象に、LDFのセンサを足趾第1趾腹側に装着して、閉塞や狭窄を模擬した足関節圧迫ストレス試験を行い、末梢循環血流量を測定した。結果は、血管拡張反応を観察した足関節圧迫ストレス試験では、ストレス前後での変化率は、足趾血流量は高値を示し、脈動幅が有意に低値を示した。また、狭窄を模擬した足関節圧迫ストレス試験では、ストレス前、ストレス中、足趾血流量に大きな変化は認められなかったが、脈動幅は、ストレス前に比し、ストレス中が有意に低下した。 本研究から、脈動幅は、動静脈吻合部の影響を受けず、狭窄など血管状態の変化を反映する可能性が示唆され、LDFによる下肢血流評価は、脈動幅で行うべきであると考えられた。(研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：齋藤慎、大濱和也
7. これからどうなる研究と研究倫理審査	共著	2024年3月	日本血液浄化技術学会雑誌 31(2) pp. 253-254	私たち医療者は日常業務において倫理が求められるのはもちろんのこと、研究においても倫理が重要視される時代になっている。臨床研究に関しては、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」が中心的な規範とされる一方、平成30年4月から「臨床研究法」が施行され、研究の種類に応じた倫理審査手続きが必要となり、複雑になってきているのが現状である。さらに、令和3年にはゲノム指針と統合された「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」1)が公表された。臨床研究は研究対象者の善意による検体やデータの提供により成り立ち、研究者はその検体やデータを無駄にしない責任があり、研究実施には倫理性、社会的意義、科学的妥当性が求められる。(研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：齋藤慎、大濱和也

8. 会員の国際化に向けた委員会の活動から	共著	2024年3月	日本血液浄化技術学会雑誌 31(2) pp. 307-308	2015年に発足した国際委員会は、発展途上国への技術支援事業と、会員の国際化事業を目的に活動してきた。近年、臨床工学技士に限らず、医療界において研究・発表の場は世界へと広がってきており、科学の世界での「公用語」は英語である。 血液浄化技術を専門する学術団体は、世界の中でも日本血液浄化技術学会のみであり、血液浄化技術を推進するための原動力は、臨床工学技士にある。日本の血液浄化技術は、世界中のどの国と比べても能力的・学術的に最高レベルであり、血液浄化技術に関する優れた研究発表を日本から世界に発信する義務があると考え。そこで、会員の国際化を推進させるべく英語プログラムを毎年企画し、開催している。(研究の遂行、全体の考察、執筆を担当) (筆頭論文) 共著者：齋藤慎、桜沢貴俊、小林こず恵、小久保謙一
-----------------------	----	---------	-----------------------------------	---

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1. 会員の国際化に向けた委員会の活動から	—	2023年4月	第49回日本血液浄化技術学会学術集会・総会	シンポジスト (齋藤慎)
2. Application of new modality and monitoring technique	—	2023年4月	第49回日本血液浄化技術学会学術集会・総会	シンポジスト (齋藤慎)
3. これからどうなる研究と倫理審査 ～海外と本邦の違い～	—	2023年4月	第49回日本血液浄化技術学会学術集会・総会	シンポジスト (齋藤慎)
4. よくわかるセミナー③「よくわかる透析条件設定」	—	2023年6月	第33回埼玉臨床工学会	講演 (齋藤慎)
5. ワークショップ レーザ血流計を用いた末梢動脈疾患 (PAD) の評価	—	2023年6月	第68回日本透析医学会学術集会・総会	シンポジスト (齋藤慎)
6. パネルディスカッション7 「人を対象とした研究倫理とは」	—	2023年7月	第33回日本臨床工学会	パネリスト (齋藤慎)
7. 共催ランチョンセミナー9 「レーザー血流計による下肢血流測定はLEADスクリーニングに有用である」	—	2023年7月	第33回日本臨床工学会	講師 (齋藤慎)
8. レーザー血流計による末梢血流測定の実用性	—	2023年8月	第17回 日本透析クリアランスギャップ研究会学術集会	シンポジスト (齋藤慎)
9. データの取り扱いと統計解析	—	2023年10月	第2回研究スキルアップセミナー	講師 (齋藤慎)
10. リサーチクエストについて	—	2023年11月	千葉県臨床工学技士会 第33回学術勉強会	講師 (齋藤慎)
11. レーザ血流計を用いた末梢循環評価	—	2023年12月	第7回I-HDF研究会	シンポジスト (齋藤慎)
12. 末梢循環モニタ (レーザー血流量)	—	2023年12月	第9回日本透析機能評価研究会	シンポジスト (齋藤慎)

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 西村裕介

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
Technology using simulated microgravity (模擬微小重力を利用したテクノロジー) (査読付)	単著	2023年6月	Regenerative therapy. 24: 318-323.	<p>模擬微小重力装置は様々な幹細胞培養に利用されている。この総説では、様々な模擬微小重力装置の利点や欠点、その装置を利用した心臓、神経、骨などの培養を中心に解説し、さらに微小重力の展望についても記述している。</p> <p>著者： <u>Nishimura Y*</u></p>

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 臨床工学科 氏名 丸下 洋一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
VOF法 (Volume of Fluid) による静脈側トラップチャンバの流れ解析に関する研究	共著	2023年	埼玉臨床工学会 会誌 2023 Vol. 46 PP. 85-88	数値流体力学であるVOF法を用いて静脈側トラップチャンバ内の空気分布について、気液混相流による流れ解析にて検討 共著者：中澤知里、井出康仁、谷口真衣、丸下洋一、島崎直也、大濱和也

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
数値流体力学を用いた急性A型大動脈解離症例における大動脈内の血行動態に関する理論解析	-	2023/10/10	日本人工臓器学会 Vol. 52 No. 2 2023	急性A型大動脈解離に対する人工血管置換術と2期的ステントグラフト内挿術による治療前・後の血行動態の相違を理論的に検討するため、医用画像データを元にCFD解析を行った。 共著者：丸下 洋一、飯田 泰功、本橋 由香、佐藤 敏夫
A theoretical study of the hemodynamics of aortas of patients with acute Type A aortic dissection using computational fluid dynamics (数値流体力学を用いた急性A型大動脈解離症例に対する大動脈内の血行動態に関する理論検討)	-	2023/12/2	18th TOIN International Symposium on Biomedical Engineering	In this study, an analytical model based on medical image data was created, and exploratory computational fluid dynamics (CFD) analysis was performed to conduct a theoretical study of hemodynamic changes pre- and post-treatment of acute Type A aortic dissection with artificial graft replacement or two-stage stent grafting. (我々は急性A型大動脈解離に対する人工血管置換術と2期的ステントグラフト内挿術による治療前後の血行動態の変化を理論的に検討するため、医用画像データを元に解析モデルを作成し、数値流体力学 (CFD) 解析を試みた。) 共著者：Yoichi Marushita, Yasunori Iida, Tomoko Oku, Shinobu Yamauchi, Yuka Motohashi and Toshio Sato

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 教養部 氏名 星野修平

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
学力向上のための共通科目「大学の学び入門」と「大学の学び専門への誘い」	-	2023. 8. 26	第17回日本診療放射線学教育学会学術集会	<p>「大学の学び入門」は「大学での学習形態や学問に対する姿勢、大人としての生活態度を認識、理解し、高校生までの学習・生活から大学生の学習・生活に移行することができるように、基本的なスキル、姿勢を学ぶ。」とし、初年時において取得すべきスキルを4つのスキルとして設定し、オムニバス形式での授業を実践した。また、引き続き開講される「大学の学び 専門への誘い」では、「診療放射線学における社会的役割、医療人としての心構え等を学び、学生自らの職業観や将来像を確立する」ことを目的に掲げ、診療放射線学や医療コミュニケーションに関する講義、フリートーク、グループワークによるアクティブラーニングを実践する。本研究では、この2つの授業計画と評価をデザインし、実施した内容から、テキストマイニングによる対応分析にて、評価を行った。</p> <p>「大学の学び入門」では、4つのスキルを、学ぶスキル、書くスキル、探索スキル、生きるスキルと設定し、大学での学び方から、将来の生き方に関するスキルを継続的かつ自立的に学習することを配慮した。また「大学の学び 専門への誘い」では、診療放射線技師像を育み、専門基礎分野、専門分野の学習の学ぶ意義と医療における知識と理解を明確にすることとともに、生涯にわたり、専門分野を探究しその発展に貢献する意欲をもつことを自律的に行う仕組みとした。特に、フリートークによる問題提起し、グループ・ディスカッションを通して他者との共同作業を経験し、保健医療分野での諸課題を見出し、科学的な洞察による判断力に重視し、他者との関わりによるコミュニケーションスキルの獲得を強く意識付けることを重視した。</p> <p>共同発表者： 星野修平、谷口杏奈、島崎綾子、加藤英樹、岩井譜憲、峯村優一、竹居田幸仁、徳永慎也、堀 風雅</p>

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 教養部 氏名 アンドリュース デビッド

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
1 Musings on an Interpretation Class (通訳クラスについての考察) (査読付)	単著	2024年1月	Translator Perspectives (翻訳者の目線) 2023, December 2023, JAT (日本翻訳者協会), pp. 1-2	大学国際コミュニケーション学部通訳コース新設にあたり、カリキュラムを開発した。このコースでは、日英通訳を通して通訳スキルを学び、英語力を向上させることが主な目的であり、効果的な通訳をするためには母国語の文化的言語的知識が不可欠であることに気付かせ、その過程で洞察力と通訳スキルを養成する。
2 Teaching presentation skills to Japanese high school students (日本の高校生にプレゼンテーション・スキルを教える) (査読付)	単著	2024年1月	Speakeasy Journal (スピークイージー・ジャーナル), December 2023, Vol. 34, JALT (全国語学教育学会), pp. 33-35	プレゼンテーションスタイルは文化によって異なる。日本のプレゼンテーションにおいては、情報量の多いスライドを読み上げる傾向があるが、これは欧米の聴衆にとっては魅力的なプレゼンテーションスタイルではない。ここでは、アクティブラーニングを効果的に取り入れた出前授業の実践例を報告した。授業では、筆者による実演を見せたあと、効果的なプレゼンテーションと非効果的なプレゼンテーションを比較分析させ、デリバリーに関わる重要なスキル（イントネーションやアイコンタクトなど）について話し合わせた。次にグラフを使ったプレゼンテーションを準備させ、小グループ内で発表し、互いにフィードバックをさせた。さらに練習を重ねた上で、グループの代表者がクラス全員の前で発表をした。この出前授業は、大変好評であった。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
1 「プリンタ」(特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2023年4月	特許庁	本開示は、プリンタに関する。プリンタでは、媒体は、媒体掛けからヘッドアッセンブリへ供給される。リボンは、リボン供給スピンドルからヘッドアッセンブリへ供給される。ヘッドアッセンブリのプリントヘッドによって、リボンのインクが媒体へ転写される。印刷済みの媒体は、開口部から排出されるか、又は、巻戻しスピンドルによって巻き取られる。リボンは、リボン巻取りスピンドルによって巻き取られる。本開示の目的は、リントの大型化を抑制しつつ、読取部により媒体の印刷品質を検査できるプリンタを提供することにある。

2 「カテーテル用バルーン体及びバルーンカテーテル」 (特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2023年11月	特許庁	バルーンカテーテルにおける血管内での通過性を良好とするために、収縮状態のバルーンの径は小さい程好ましい。このため、収縮状態におけるバルーンの径を小さくするための技術が提案されている。血管内の病変部に作用させるための硬性部材がバルーンに設けられたバルーンカテーテルがある。このようなバルーンカテーテルでは、バルーンの収縮時において硬性部材が外側に張り出し、径の小型化の妨げとなる場合がある。本開示の目的は、硬性部材が設けられる場合でも、収縮時における径を小型化できるカテーテル用バルーン体、及び、このカテーテル用バルーン体を備えたバルーンカテーテルを提供することである。
3 「バルーンカテーテル」 (特許出願の日英特許翻訳)	単訳	2023年12月	特許庁	本発明は、バルーンカテーテルに関する。特許文献1は、線状突出部がバルーンに設けられたバルーンカテーテルを開示する。線状突出部は、バルーンの基端側コーン領域、直管領域、及び先端側コーン領域に亘って、バルーンの軸線方向の全域に設けられる。線状突出部は、バルーンの外表面から外方に突出する。バルーンが血管内に挿入される場合において、先端側コーン領域に設けられた線状突出部が血管の内壁等に引っ掛り、バルーンの通過性が低下する可能性があるという問題点がある。本発明の目的は、突出部がバルーン先端部に設けられる場合でも、バルーンの通過性を良好にできるバルーンカテーテルを提供することである。
4 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全6件) (和文英訳)	単訳	2023年5月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。
5 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全9件) (和文英訳)	単訳	2023年5月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。
6 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全7件) (和文英訳)	単訳	2023年7月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。
7 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全7件) (和文英訳)	単訳	2023年8月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。
8 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全3件) (和文英訳)	単訳	2023年9月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。
9 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全4件) (和文英訳)	単訳	2023年10月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。
10 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全7件) (和文英訳)	単訳	2023年11月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。
11 国際知的所有機関の国際調査見解書・特許性報告書 (全7件) (和文英訳)	単訳	2023年12月	世界知的所有権機関	非公開のため記載不可。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 教養部 氏名 峯村優一

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
医療の倫理四原則 -四原則の性質と役割	単著	2023年9月	『医学哲学 医学倫理』41号、111-114頁	倫理四原則が成立した歴史的背景、それぞれの原則の性質と役割を示した。異なる文化において倫理四原則の重要度が変化すること、また四原則全体が倫理的問題を考察するための分析的枠組みとして機能することを明らかにした。
Between Respect for Autonomy and Justice: When is Medical Intervention Necessary?	単著	2023年12月	Formosan Journal of Medical Humanities, Vol. 24, 11-19頁	自律尊重原則と正義原則の重要性を示した。両原則は重要だが、患者が理性に反する行為をする時、また医療資源の公平な分配を促進する必要のある時、原則を忠実に守るだけでなく、医学的介入が必要となることを明らかにした。

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 教養部 氏名 竹居田幸仁

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等 の名称	概 要

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
学士力向上のための「大学の 学び入門」と「大学の学び専 門への誘い」	-	令和5年8月	第17回日本診療放射線学 教育学会学術集会	本研究では、本学の「大学の学び入門」と「大学の 学び専門への誘い」という2つの授業計画と評 価をデザインし、実施した内容から、テキストマ イニングによる対応分析によって評価を行った。 共同研究につき、担当箇所抽出不可 共同発表者：星野修平、谷口杏奈、島崎綾子、加 藤英樹、岩井譜憲、峯村雄一、 <u>竹居田幸仁</u> 、徳永 慎也、堀風雅

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 教養部 氏名 徳永慎也

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
研究報告発表（口頭発表） 1 <i>Breakfast at Tiffany's</i> に描かれるアメリカの自由——貧困の記憶とアメリカ消費社会への夢——	—	令和5年6月17日	日本アメリカ文学会東北支部6月例会 於 TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口	本発表では、 <i>Breakfast at Tiffany's</i> のホリー・ゴライトリから、カポーティが描いた「アメリカ」について論じた。自分が正しいと思うことを信じ、ありのままに自分らしく生きることを望むホリー・ゴライトリの姿から見えてくるものは、「自由」を掲げながらも、実際には抑圧的であったアメリカの姿である。本作品にはカポーティが持っていたアメリカ社会への批判がはっきりと認められる。すなわち、貧困に苦しまずに自由に生きる権利、戦争から自由になること、人種差別や同性愛者差別なく自由に結婚相手を選ぶ権利をカポーティは作品中において示したのである。
研究報告発表（ポスター発表） 1 学力向上のための共通科目「大学の学び入門」と「大学の学び専門への誘い」	—	令和5年8月26日	第17回日本診療放射線学教育学会学術集会 於 東京都立大学 荒川キャンパス	群馬バース大学は、9つの医療専門職を育成する医療系大学で、3学部7学科で構成される。学士力向上のため「大学の学び入門」と「大学の学び 専門への誘い」が開講される。「大学の学び入門」では、4つのスキルを、学ぶスキル、書くスキル、探索スキル、生きるスキルと設定し、大学での学び方から、将来の生き方に関するスキルを継続的かつ自立的に学習することを配慮した。また「大学の学び 専門への誘い」では、診療放射線技師像を育み、専門基礎分野、専門分野の学習の学ぶ意義と医療における知識と理解を明確にすることとともに、生涯にわたり、専門分野を追求しその発展に貢献する意欲をもつことを自律的に行う仕組みとした。 筆頭演者：星野修平 共同研究者：谷口杏奈、島崎綾子、加藤英樹、岩井譜憲、峯村 優一、竹居田 幸仁、徳永 慎也、堀 風雅
（書評） 1 『現代アメリカ社会のレイシズム——ユダヤ人と非ユダヤ人の確執・協力』	単著	令和6年3月31日	『東北アメリカ文学研究』47号、35-38頁。	本書は、現代アメリカ社会における「レイシズム（民族差別）」の問題点と解決策について、日本人の文学者がユダヤ系という視点から読者に示唆を与える優れた研究書となっている。現在、新型コロナ感染症が引き起こした混乱は落ち着きつつあるものの、ウクライナとロシア、イスラエルとパレスチナにおける暴力の嵐が鎮まる気配はない。今こそ、世界には、尊厳ある個人の命がこれ以上奪われないためにも、広瀬氏が本書で論じている、レヴィナスの「他者性」が必要なのではないだろうか。

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 教養部 氏名 衣川 隆

著書

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所	概 要

学術論文

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発表雑誌等の名称	概 要
腕立て伏せから健康 を考える	共著	2024年3月	群馬パース大学 紀要30号P81-85	<p>本研究報告は、場所を選ばず道具も不要なことから、取り組みやすい運動の代表として腕立て伏せを取り上げる。単純に思われがちな腕立て伏せも、さまざまなトレーニング方法があり、それぞれ期待する効果が変わっているという視点から、加齢、生活習慣病、心血管疾患、姿勢と呼吸など、どのようにかかわるのかを先行する研究をもとにして紹介していく。</p> <p>(本人担当部分:研究計画の策定、トレーニング方法・プロトコルのデザイン、論文総括)(筆頭論文)</p> <p>共著者:衣川隆、岩城翔平</p>

その他

名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要

研究活動の記録（2023年4月～2024年3月）

所属 教養部 氏名 岩城翔平

著書

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所	概要

学術論文

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発表雑誌等の名称	概要
野球選手における投球フォームの違いによる球種の特徴（報告書（体育研究所プロジェクト研究））	共著	令和6年3月	国士舘大学 体育研究所報 第42巻, p. 91-96. (令和5年度)	本研究では、ボールトラッキングデータ計測から得られるパラメータについて、先行研究とのデータを比較しながら、現場における投球指導への有効性について検討した。その結果、以下の知見が得られた。 1) ボールトラッキングデータ計測から得られたボール速度や回転数などのパラメータは、各球種の特徴を反映するものであった。 2) その投手が投じる変化球の球種には、投球フォームによって偏りが見られた。 3) 同じ球種（握り方）であっても、投手によって変化の意図が異なることが明らかとなった。また、その意図は投球フォームに起因する変化球の優劣を反映している可能性が推察された。 4) 変化球を投じる際には、変化の大きさや方向など、投手の意図によってフォームに変化が生じている可能性が推察された。 畑島一翔、岩城翔平、関口佳之、飯田周平、田中重陽

その他

名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要